

---

# Changing Detective

ユーリ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

C h a n g i n g   D e t e c t i v e

### 【Nコード】

N 5 5 7 1 A

### 【作者名】

ユーリ

### 【あらすじ】

コナンは朝起きたら、なんと女の子になっていた！しかも博士の計らいで、帝丹小学校にイチから転校し直しに。さらにいろいろ面倒な事が、彼もとい彼女に降りかかる・・・果たして、彼女は元の姿に戻る事ができるのか！？

## エピソード1 コナン君、女の子になる（前書き）

### 前書きドラマ

コナン「な、なんだこりゃっ！！」

哀「ど、どうしたの工藤君！？」

コナン「オレ・・・女になっちまった・・・」

哀「ええっ！！？」

平次「前代未聞やな・・・」

快斗「そんじゃー、服と髪型変えて・・・」

紅子「変身っ！えい！」

ボン！！

紅子「変身完了よ」

リアン「こ、こんにちは・・・」

青子「きゃー、リアンちゃんカワイーツー！」

平次「もともと工藤は美少年やからのー。」

快斗「美少女になって、カワイさ100倍って感じ？」

リアン「恥ずかしいです・・・」

青子「快斗ー！」

紅子「リアンちゃんに変な事しちゃダメよ！」

快斗「わーってるよ！オレだって紳士なんだ、そんぐらいの事はわきまえてるさ！」

哀「ホントかしら・・・」

平次「ホンマかうソか眉唾モンやなー。」

快斗「な、なんだよ！そんなにオレが信用できないってのか？」

リアン・哀・平次・青子・紅子「・・・できない。」

快斗「マジかよ・・・」

哀「それにしても、もしこの姿で黒の組織に見つかったらどうしよう・・・」

リアン「アタシ、怖い・・・」

平次「心配すなや、リアンちゃん！」

紅子「いざとなったら、私達が守ってあげるから！」

青子「そうよ、私達が手を組んだら、どんな事件も迷宮界入りま  
ちがいなし！」

快斗「迷宮入りしちゃイカンだろ・・・」

青子「あ、そつか。テヘツ。」

哀「皆さま、大変長らくお待たせしました！」

リアン「いよいよ、『Chasing Detective』本  
編が始まります！」

紅子「最後まで、ごゆっくりご覧ください！」

リアン・哀・平次・快斗・青子・紅子「それでは、本編へどうぞ！  
！」

## エピソード1 コナン君、女の子になる

それは、ある夏の連休だった。

コナンはいつものように、小五郎の大イビキで目が覚めた。

コナン「たく、毎日毎日うるさくてしょうがねえな・・・」

そうつぶやいて起き上がったコナンは、何だか変な感じがした。声がいいつもと違うのだ。

コナン「あれ？オレこんな高い声だっけ・・・？」

コナンは次に、自分の体と髪の毛を触ってみた。

コナン「何だ？このふくらみは・・・髪も何か変だぞ・・・」

コナンは鏡の前に立ってみて、やっと現状に気がついた。

コナン「~~~~~っ！！！」

コナンは声にならない悲鳴をあげると、すぐに着替えて阿笠博士の家に走っていった。

コナン「博士、博士！コナンだ、出て！！」

コナンは扉をドンドンと叩く。

しばらくすると、哀が眠そうな顔をして出てきた。

哀「工藤君？何よこんな朝っぱらから・・・」

そう言っ出てきた次の瞬間、哀は驚いて立ちつくした。

哀「あ、あなた、本当に工藤君！？」

コナン「うん・・・」

哀の目の前に立っていたのは、黒髪のロングヘアをした少女だった。

特徴があるピョコン髪は消えていたが、その口調はまぎれもなくコ

ナンだった。  
しばらくの沈黙の後、2人の少女のキャアアアという悲鳴があがった。

5分後、阿笠とコナン、哀はリビングに集まっていた。  
阿笠も、最初はビックリしたらしい。

阿笠「すると、何らかの突然変異で新一の体が女になってしまったというワケじゃな？」

コナン「うん・・・そうみたいよ・・・」

もう、言葉遣いも完全に女言葉になってしまった。

哀「今日が連休で助かったわね・・・」

哀は冷静に言いながらも、ジーツとコナンを見つめている。

コナン「な、何よ・・・」

哀「カ、カワイイ・・・」

コナンのスタイルは、哀も見とれるほどのカワイらしさだった。

コナン「情けないよ・・・こんな姿になっちゃって・・・」

コナンはうつむいて落ち込んでしまった。

哀が駆け寄って、コナンをなぐさめる。

哀「大丈夫よ工藤君・・・絶対に元に戻れるわ。」

コナン「ありがと・・・哀ちゃん・・・」

いきなりコナンに名前と呼ばれ、哀は赤面した。

阿笠「しかし、学校はどうするんじゃ？」

哀「そうねえ・・・口調や髪型で女の子だってバレちゃうだろうし・・・」

コナン「そんなあ・・・」

阿笠「よし、ワシに任せろ！交換留学生という事で、転校手続きを取ってやる！！」

そう言っていると、阿笠は帝丹小学校に電話をかけ始めた。

5分後、受話器を置いて戻ってきた。

阿笠「オーケーじゃ！月曜日から学校に行けるぞ！！」

哀・コナン「スゴ・・・」

哀とコナンは、博士のスゴさに改めて驚いた。

コナン「またイチから転校し直しのね・・・」

哀・コナン「ハア・・・」

阿笠「さて、転校手続きは取ったが、どうする、新一？」

コナン「何が？」

阿笠「名前じゃよ、名前！」

哀「そうよね・・・さすがにその姿でコナンってワケにもいかないでしょうし・・・」

コナン「じゃあ、アタシ江戸川リアンがいい！」

阿笠「江戸川リアン・・・？」

哀「名字は変えないの？」

コナン「だって、アタシ江戸川乱歩好きだし、コナンの双子の妹だって事にすれば、歩美ちゃん達もすぐになじめるじゃない？」

哀「あ、なるほど・・・」

哀も阿笠も納得した。さてこれからは、話の設定上、こっちの名前でいく事にする。

阿笠「さて、ワシは毛利君に電話しておくか・・・コナンは体調をくずして、ここで寝込んでおる事にしておこう・・・」

リアン「ありがと、博士！」

阿笠「何だか孫娘ができた気分じゃわい！」

リアン「孫娘の前に、さっさとフサエさんに告白しなさいよね・・・」

「

女の子になっても、さすが阿笠の長年の親友である。  
思った事はズバッと言っようだ。  
そんなこんなで、連休はあっという間に過ぎた。



## エピソード1 コナン君、女の子になる（後書き）

ああ、ついに始まった・・・コナンが女になってしまう話が・・・  
ま、いいか！

コナン「ああ・・・オレがよりによって女かよ・・・」

哀「でも、けっこうおもしろそうじゃない？」

リアン「何が起るかわからないのが、お話なのよ。」

今回は「エピソード2 リアンちゃん、転校生になる」です。

## エピソード2 リアンちゃん、転校生になる

月曜日 帝丹小学校

歩美「ねえねえ、聞いた？今日このクラスに転校生が入ってくるんだってー！！」

元太「ホントかよ歩美？」

歩美「うん、さっき職員室で小林先生が言ってたもん！」

光彦「転校生なんて、コナン君や灰原さん以来ですね！そういえば、コナン君どうしたんでしょう？いつもならもうとっくに来てる頃なのに・・・」

歩美「時間にルーズな元太君と違って、早めに来るタイプなのにね・・・」

元太「オレのどこがシワシワなんだよ！」

歩美「それはルーズソックス！」

哀「（前にも同じ事言ってたわね・・・）（詳しくは単行本35巻参照）」

歩美「どんな子かなあ？」

元太「カワイイ子だったらいいなあ・・・」

光彦「いえいえ、まずは性格が一番ですよ！」

歩美「哀ちゃんはどうな子だと思う？」

哀「さあ・・・案外ガリ勉タイプのムッツリ君かもよ？」

コツコツコツ・・・ピタッ。

元太「おっ！」

歩美「来た来た！」  
ガラッ。

元太・光彦・男子陣一同・歩美・女子一同「カ、カワイー！！」

男子一同だけでなく、歩美達女子一同も思わず歓声を上げた。

さらさらの黒のロングヘアーに水色のワンピースを着たリアンは、とびっきりの美少女だったからだ。

しかし中身はコナンなので、いささか恥ずかしがっている。

小林「さあ、名前を黒板に書いて！」

リアン「はい。」

リアンはそう言うと、名前を漢字とローマ字表記で黒板にさらさらと書いた。

リアン「江戸川リアンです。どうぞよろしくお願いします！」

江戸川という言葉に、哀以外の全員が反応した。

小林先生が説明を始める。

小林「江戸川コナン君の双子の妹、リアンさんです。彼女はアメリカからの帰国子女で、留学生としてここに来ました。みんな仲良くしてあげてね！さて、リアンちゃんの席は……」

元太「先生、ここ、ここ！オレの隣が空いてる！」

元太がそう言い終わる前に、リアンは元太の隣に座った。

リアン「小嶋……元太君ね。あなたの事はコナンから聞いてるわ。よろしくね。」

元太「こ、こちらこそ……」

元太は嬉しそうだった。

なぜなら、以前哀が転校してきた時、哀は元太の横を通り過ぎてコナンの隣に座ったから、元太は不安だったのだ。（詳しくは単行本18巻参照）

そんなリアンを、哀は笑顔で見つめていた。

哀「（あんなに泣いていた工藤君が、もう明るくなってる……あの子達はやはり彼にとって大切な存在……あの子達が、彼の不安な気持ちを溶かしているのね……）」

そう、リアンは連休中夜通し泣いていて、そのたびに哀がなぐさめていたのだ。

女の子になってしまった事で、悲しくなってしまったのだろう。

そんなリアンを哀はなぐさめるだけじゃなく、一緒に泣いてあげたり、添い寝をしてあげていた。

哀にとって、リアンは妹のように見えた事だろう。

授業が終わって、放課後・・・

歩美「えーどーがーわーさん！一緒に帰ろう！」

光彦「家はどこなんですか？近くなんでしょう？」

元太「遠慮するな、オレ達が送ってやつから！」

リアンは静かに答える。

リアン「米花町2丁目22番地・・・そこが今アタシが住んでる場所・・・」

歩美「哀ちゃんと一緒なんだね。」

リアン「それとみんな、名前で呼んでいいわよ！コナンからあなた達の事は聞かされてるから。」歩美「じゃありアンちゃん！コナン君は今どうしてるの？」

リアン「コナンは今寝込んでるの。いつ来られるかはわからないわ。」

歩美「そう・・・そうだリアンちゃん、少年探偵団に入らない？」

リアン「少年探偵団・・・ああ、コナンから聞いてるわ。いろいろな難事件を解決したんですってね。」

歩美「全部コナン君のおかげなんだよ！」

光彦「ボク達はサポートなんです。」

リアン「そんな事ないわ、コナンが言ってたわよ、あなた達は心強いってね。」

女の子になった事で、普段言えない本音が言えるようになったらしい。

光彦「依頼は、元太君の下駄箱ですよ！ここに投函するんです。」

元太「先生には内緒だけだな！」

リアン「バレてるんでしょ？」

元太「いつもいつもスゴいんだぜ！謎を抱えたヤツらの依頼がドサ  
ーっと・・・」

そう言つて元太は下駄箱を開けるが、案の定何も入っていない。

元太「アハハ・・・いつもはもつと入ってるんだけど今日はたまた  
ま・・・」

リアン「いつも入ってないんでしょ？」

そう言うリアンに、歩美達は不思議そうな顔をした。

歩美「どうしてリアンちゃん知ってるの？」

リアン「え・・・そ、それは・・・」

リアンは言葉に詰まった。

哀「わ、私が教えたのよ・・・」

哀が慌ててフォローする。

歩美「フーン・・・そうだリアンちゃん、私達とカラオケに行かな  
い？」

リアン「カラオケ？」

その瞬間、哀は顔が真っ青になった。

なぜなら哀は前にコナンとカラオケに行つて、彼のあまりの音痴ぶ  
りに気絶しそうになったからだ。

哀は逃げようと、後ずさりしたが・・・。

リアン「逃げちゃダメよ、哀ちゃん？」

哀はリアンに見つめられた。

その顔は笑っているが、目は笑っていない。

結局、哀もカラオケにつき合わされる事になった。

## エピソード2 リアンちゃん、転校生になる（後書き）

リアン「次回はカラオケかぁ！楽しみだわ。」

哀「あ、私、ちょっと用事が・・・」

リアン「逃げちゃダメよ、哀ちゃん？」

哀「は、はい・・・」

次回は「エピソード3 リアンちゃん、カラオケと買い物に行く」です。

### エピソード3 リアンちゃん、カラオケと買い物に行く

カラオケボックスに着き、5人はそれぞれ歌いたい曲をリクエストした。

まずは歩美だ。

歩美「オールウェイズあゝいを胸に勇気を出してゝたとゝえそれがダメだとしてもねゝ」

歩美は倉木麻衣のAlwaysを元気に熱唱した。

続いては元太と光彦だ。

元太・光彦「ギリギリゝガケの上をいくようにゝフラフラゝしたっていいじゃないかゝよゝ」元太と光彦はなぜか、2人でB'zのギリギリC h o pを歌った。

次は哀の番だ。

哀「君にゝ出会わなけゝればよかったとゝ後悔する日さえゝあったゝそしてゝ今ゝこの世界からゝ星空に向かってゝ飛び出すゝやっとゝ会えるねゝ」

哀は得意の上原あずみの無色を歌いきった。

さて、次はリアンだが・・・。

リアン「アタシはコレね！高山みなみの思い出達ゝ思い出！」

哀はとうとう覚悟を決めた。

だが、実際には・・・

リアン「そつとゝ目を閉じれゝばゝ今も浮かぶよゝきゝらめくひざゝしとゝなつかしいゝ風景がゝ 時が流れてゝもゝボクのゝ心でゝなゝんにも変わらゝないゝまぶゝしいままゝ」

哀はその歌声に驚いた。

なんとリアンは音痴ではなくなっていたのだ。

それどころか、本物のような美声で歌っている。

4人はすっかり、リアンの歌声に聞き惚れてしまった。

リアン「思い出達ゝ思い出達ゝ思い出達ゝ」

その後もリアンは、ZARDの夏を待つ帆<sup>セイル</sup>のように、B'zの衝動、竹井詩織里の世界止めてなどを歌ったが、どれもこれも本物顔負けだった。

リアン「夏を待つセイルのように君の事をずっとずっとずっと抱きしめていたい」ただ自分の気持ちに真つ正直でいたいけどそれで人を傷つける事もあるね 1つに向かつてるよそこには君がいるから」

リアン「ボクにも何かを～変えられる～さりげない言葉で～ささやいて～あなたの声が～明日への～衝動！！ボクにも～誰かを～愛せると～その手を～重ねて～知らせて～希望とは～目の前に～ある道～どこかに～行けると～信じよう～あなたの全てがボクの～衝動！！ゴッフォォーイットゴッフォォーイットゴッフォォーイット愛情こそが衝動～ゴッフォォーイットゴッフォォーイットゴッフォォーイット愛情こそが衝動！！」

リアン「世界～止めて～そつと微笑んで～ずつと～そばにいるから～君を～照らす～まぶしい～夜明け～どうぞ～このまま～2人包んで～どうか～このまま～世界を～止めて～・・・」

歌い終わったリアンを、歩美が祝福した。

歩美「リアンちゃん、上手だね！」

リアン「ありがと！歩美ちゃん！」

光彦「プロ顔負けでしたよ！」

リアン「光彦君もありがとう！」

元太「音痴なコナンとは大違いだぜ！」

リアン「アハハ・・・元太君もありがとう・・・（そのコナンがアタシなんだけどね・・・）」

カラオケも終わり、5人はいつもの道で別れた。



しばらく歩いた後、哀が口を開いた。

哀「ねえ、工藤君・・・」

リアン「今はアタシ女よ、哀ちゃん？」

哀「どうしてそんなに歌が上手になったの？」

リアン「そうねえ・・・歩美ちゃん達に負けたくなかったから・・・じゃダメ？」

哀「なるほど、徹夜で特訓してたワケね。どうも夜中に姿が見あたらないと思ったら・・・」

リアン「ギクツッ！！（ヤバイ・・・哀ちゃんと一緒にデュエットがしたくて、カラオケボックスで徹夜特訓してた事がバレちゃう・・・！！！！）」

そう、リアンは夜中に部屋を抜け出し、1人でカラオケボックスに行き練習していたのだ。

音痴なのをいい加減直したかったし、何より哀と一緒にデュエットがしたかったのだ。

努力した結果、リアンの音痴は直り、それどころかとびきり上手になっちゃったのだった。

哀「隠さなくてもいいわよ。その代わり特訓しなくなったら私に言っ。協力するから。」

リアン「さ、さあ、夕食の材料買いに行きましょう！今日は確かお鍋よね！！」

そう言っと、リアンは足早にデパートの方へ走っていった。

哀「（工藤君、ごまかしたわね・・・）」

哀はクスクス笑うと、リアンの後を追っていった。

米花デパートに着いた2人は、食品売り場で鍋の材料をカートに放り込んでいた。

リアン「このお肉、今日は半額セールで安いわね・・・これにしましょ！」

哀「う、うん、そうね・・・」

リアン「そうだ、大根おろしって健康と美容にいいのよね・・・あ、コレなんか身がしまってるわね・・・コレなら使えるわ！」

哀は、リアンのテキパキぶりに圧倒されていた。

阿笠博士から、新一は中学から高2までずっと自炊していたと聞いてはいたが、ここまで家庭的とは思わなかったからだ。

哀「リアンちゃん、あなたいい奥さんになれるわ・・・」

リアン「それ、ホメ言葉になってないわよ哀ちゃん・・・」

哀「アハハ・・・」

お互い笑いながら買い物を終え、袋に荷物を詰め込んだ。

哀「フウ・・・コレで終わりね・・・」

リアン「あ、そうだ、忘れてた！」

そう言うと、リアンはある場所へと走っていく。

哀も慌てて追いかけた。

哀「どうしたの、リアンちゃん？」

哀の所に戻ってきたリアンは、嬉しそうに札を持っている。

「どうやら何かの引換券のようだが。」

リアン「本屋さんで、来週発売の推理小説予約してきたんだ！」

哀「女になっても推理物好きなのね・・・今度は何というタイトル？」

リアン「ウッフ、新明香織里の探偵左文字シリーズ、「松田左文字の華麗なる事件簿 上巻」！ついでに下巻の予約もしてきちゃった。」

哀は笑っている。

コナンだった時の記憶を忘れない方が、リアンにとっては好都合のようだ。

阿笠博士の家へ帰ってきた2人は、さっそく夕食の準備を始めた。

哀は材料を切り分け、リアンは大根をおろしている。

30分後、鍋の用意ができた。

リアン「手を合わせてください。いただきます!」

哀・阿笠「いただきます!」

リアンはおろした大根をおはちに入れる。

哀と阿笠のおはちにも入れた。

リアン「どう?アタシ特製の大根おろし!」

哀「あ、おいしい・・・」

阿笠「なかなかやるのお。」

リアン「ウフフ・・・」

リアンは、ほほえんでいた。

エピソード3 リアンちゃん、カラオケと買い物に行く（後書き）

リアン「楽しかったわ〜！」

哀「こういうのが、大切なのね。」

今回は「エピソード4 リアンちゃん、銭湯に行く」です。

## エピソード4 リアンちゃん、銭湯に行く

食事は終わった。次は風呂だ。

リアン「お風呂入ってくるね。」

哀「ねえ、せっかくだからお風呂屋さんに行かない？」

リアン「銭湯に？別にいいけど・・・」

哀とリアンは、米花温泉に向かった。

哀とリアンは、米花温泉に着いた。

リアンはスタスタ歩いていくが、その先を見た哀は慌てて彼女を止めた。

哀「何やってるのよりアンちゃん！あなた今女なのよ？」

リアン「へ？」

そう言ったリアンが見た先にあるのは・・・男湯だった。

リアン「あ・・・（しまった、今は女になってたの忘れてた・・・）

」

なんとかハプニングも起きず、2人は風呂に浸かった。

哀はリアンをジーンと見る。

リアン「フウ・・・いい気持ち・・・」

哀「もう完全に女になっちゃってるのね・・・」

リアンの体はもう、哀にも負けないほどのボディスタイルになっていた。

哀はリアンを露天風呂に誘い、2人で湯船に浸かった。

幸い誰もいなかったので、哀はリアンに話しかける。

哀「ねえ、リアンちゃん・・・」

リアン「何？哀ちゃん。」

哀「ううん・・・何でもない・・・」

銭湯から帰ってきた2人は、お約束のフルーツ牛乳を飲んでいた。

哀「ねえ、寝る時どうするの？」

リアン「そりゃ、1人で寝るよ。」

哀「そう・・・（てつきり、一緒に寝てって言ってくれと思ったのになぁ・・・）」

哀は少しガツカリした。

しかし、実際には・・・。

リアン「スースー・・・」

哀「何で私が彼女の隣で寝てるの・・・？」

そう、一緒に寝てと言ったのは、なんと哀の方だった。

暗いのが怖い哀は、ついリアンに頼んでしまったのである。

哀「恥ずかしい・・・ま、今は女同士だから大丈夫かな・・・」

そんなこんなで、何日か過ぎたある日、事件は起こった。

#### エピソード4 リアンちゃん、銭湯に行く（後書き）

リアン「何事もなくてよかったわね。」

哀「何言ってるのよ！次回はあなた、大ピンチなのよ？」

リアン「あ、そうでした・・・」

次回は「エピソード5 リアンちゃん、SOS!」です。

## エピソード5 リアンちゃん、SOS!!

リアン「じゃあ、アタシタ食の食材買いに行ってくるね。」

哀「1人で大丈夫？私もついてこうか？」

リアン「平気よ、イヤリング型携帯電話も探偵団バッジも持つてるし、自転車で行くから。」

そう言うのと、リアンは出かけていった。

リアン「あったあった、一度食べてみたかったのよ、黒カレー！」  
リアンはカートにカレーパックを放り込む。続いて手に取ったのは・・・。

リアン「そうそう、チョコレートってカレーと合うのよね。」

リアンが取ったのは、大きなチョコレートだった。

彼女は嬉しそうにカートに放り込む。

リアン「これで全部終了つと。あ、予約してた本取りに行かなきゃ。」

リアンはそう言うのと、本屋のある3階に走っていった。

しかし彼女は気づいていなかった。

背後に、自分を見張っている男がいる事など・・・。

店長「はいよ、探偵左文字シリーズ、「松田左文字の華麗なる事件簿 上巻」！」

リアン「ありがとー！」

リアンはウキウキ気分で、エレベーターに乗った。

それを見ていた男は、どこかに電話をかけながら、階段を足早に降りていった。

リアン「ルンルン ルンルン」



リアンはとても嬉しそうに歩いている。  
そんな彼女が、気づくはずもなかった。

自分の背後に、怪しい車が迫ってきている事に・・・

そして、次の瞬間・・・

リアン「キャッ!？」

リアンは持っていた買い物袋ごと、車の中に引きずり込まれてしまった。

リアン「な、何するのよ!? うっ・・・!!」

ハンカチに染み込まれたクロロホルムを嗅がされ、リアンは意識を失ってしまった。

リアン「・・・ん・・・」

次にリアンが目覚めた時には、すでに車内だった。

どうやら後部座席に寝かされているらしい。

口はしゃべれないようにさるぐつわをかまされ、手は縄によってグルグル巻きに巻かれて縛られている状態・・・

最悪な事に、足もグルグル巻きに縛られていた。

これでは逃げる事ができない。

リアンは状況を理解しようと、頭の中を整理した。

リアン「(そういえばアタシ、米花デパートに夕食の材料を買いに行つてて・・・そうだわ! 急に車の中に引きずり込まれて、ハンカチに染み込まれたクロロホルムで・・・!! アタシの横には誰も座ってないわね・・・どうやら眠らせてアタシを縛り上げた後、後部座席に寝かせて前の席に移動したのね・・・)」

リアンの予想通り、運転席と助手席に男が2人座っていた。  
どうやらリアンに薬を嗅がせたのは助手席にいる男らしい。

2人とも30代前半といったところか。

リアンは目を閉じて、まだ気絶しているフリをした。

もしかしたら、何か口走るかもしれない・・・

誘拐犯B「しかし、兄貴も頭がいいですねー！強盗の下見ついでに女の子を誘拐して、アジトに着いた後で親から身代金をせしめるなんて・・・」

誘拐犯A「ああ、オレの作戦に又カリはない・・・安心しな・・・」  
リアンは静かに2人の会話を聞いていた。

口ぶりから考えると、運転席側の男が兄貴分のようなのだ。

リアン「（強盗の下見ついで・・・？それじゃ、アタシは偶然さらわれたの？運が悪いわ・・・）」

誘拐犯B「ん？起きてるのか？」

リアン「（ヤバッ・・・！！）スースー・・・」

誘拐犯A「いや、まだ寝ているようだ・・・」

誘拐犯B「薬が効きすぎましたかね・・・？」

リアン「（危ない危ない・・・それにしても、クロロホルムの威力を知らないなんて・・・この人達誘拐の初心者ね・・・？それに、強盗の下見って言うてたけど、2人だけでできると思ってるのかしら・・・？）」

誘拐犯B「兄貴、早くアジトに行きましょう！」

誘拐犯A「そうだな、部下3人が待つてる事だし・・・」

リアン「（ウソ・・・あと3人もいるっていうの？アタシ、いったいどうなっちゃうの・・・！？お願い哀ちゃん・・・助けてえ・・・！！！！）」

哀「遅い・・・遅すぎるわ・・・」

そう思った哀は、なにかしら不安を感じた。

哀「ま、まさか・・・」

哀は、ターボエンジン付きスケートボードで米花デパートに直行した。

哀「これは、リアンちゃんが乗っていった自転車！！しかも力ギがついたままだわ・・・」

次の瞬間、哀の不安は現実になった。

哀「大変、急いで家に戻らなきゃ！！」

同じ頃、リアンに乗せた車は怪しげな倉庫の前で止まった。

誘拐犯A「着いたな・・・おいお嬢ちゃん、起きろ。」

アタシはゆっくり目を覚ました。

助手席にいた男がアタシを抱え、車外に連れ出した。

そのまま運ばれて倉庫の中に入っていくと、2人と同年代と思われる男3人が待っていた。

しばらく歩いた後、アタシは真ん中に突き飛ばされた。

リアン「うっ！！」

倒れたアタシの周りを、男達を取り囲む。

誘拐犯C・D・E「カワイイ女の子だな・・・」

アタシは男達によって柱にグルグル巻きに縛り付けられてしまった。

アタシは男達をにらみつけたが、ムダだと考え体勢を崩した。

リアン「んっ・・・んんっ・・・」

アタシは、ジタバタともがいた。

誘拐犯B「ムダだよ、いくらもがいてもムダさ。」

誘拐犯C・D・E「お嬢ちゃんに恨みはないが、オレ達も金が必要なんぞな。」

誘拐犯A「まあ、運が悪かったと思ってあきらめるんだな・・・」

リアン「（よく言うわよ・・・たまたまアタシをさらったくせに・・・）」

アタシは、男達をジーツとにらみつけた。

誘拐犯A「オレは気が強い女が好きなんだよ。フフッ。」

そう言うと、誘拐犯Aはアタシに近寄り、アタシのど元に手をか

け持ち上げた。

リアン「んんっ。」

アタシは、ビクツと体がふるえた。

誘拐犯 A 「  
 ^  
 ^  
 ^  
 .  
 .  
 .  
 」

誘拐犯達は、笑っている。

リアン「んゝゝゝゝゝ、んゝゝゝゝ・・・」

---

アタシは叫ぼうと思ったが、さるぐつわのせいでんぐんとしか声が出ない。

それでもアタシは、必死に叫んでいた。

誘拐犯A「さて、そろそろデパートを襲撃に行くか……」

誘拐犯 B「お嬢ちゃんが逃げ出さないように、しっかりと見張ってるよ。」

そう言う、4人はアタシと誘拐犯Cを残し、倉庫から出て行った。

誘拐犯C「お嬢ちゃん、逃げ出そうなんて思うなよ。」

誘拐犯Cは、アタシをにらみつける。

リアン「（逃げられるワケないでしょ．．．グルグル巻きにされてるのに．．．）」

アタシは、誘拐犯Cから目をそらし、うつむいた。

誘拐犯C「逃げないなら、さるぐつわを外してやってもいいぜ。どつする?」

アタシは、聞きたい事もあったので、コクンとうなずいた。

誘拐犯Cは、アタシに近寄ると、さるぐつわを外した。

リアン「ハアハア・・・あなた達、どういいうつもりなの？強盗なんて・・・」

誘拐犯C「フツ、オレ達は泣く子も黙る強盗団「極楽鳥」だ!! 知らないのかい、お嬢ちゃん?」

リアン「何その名前……センス悪いわ……」

アタシがそう言うと、誘拐犯Cはアタシに近づいてきて、アタシの

頬を叩いた。

バチン！！

リアン「うっ！！」

アタシの頬は、真っ赤に腫れた。

リアン「痛い・・・痛いよ・・・」

誘拐犯C「いいかお嬢ちゃん、今度ふざけた事ぬかしやがったらただじゃおかねぞ！！」

誘拐犯Cはそう言うと、再びアタシの口にさるぐつわをかませた。

リアン「んん・・・」

誘拐犯C「たく、ふざけたガキめ。」

同じ頃、哀は米花町を自転車で疾走していた。

予備の追跡メガネをかけ、スイッチを入れて。

哀「私とした事が・・・リアンちゃんを1人で行かせるなんて、まちがってた・・・ごめんなさい、リアンちゃん！今から助けに行くから、無事でいて！！」

その頃、誘拐犯A・B・D・Eは、デパートを襲撃しに行っていた。

そして、誘拐犯Cは、縛られているアタシを横目に酒を飲んでい

リアン「うん、うん・・・」

アタシは力なくもがいていた。

男はそんなアタシを見て、笑っている。

誘拐犯C「しかし、このお嬢ちゃんけっこう上玉だよなあ・・・」

そう言うと、男はアタシに近づいてきた。

リアン「んんっ!？」

誘拐犯C「アニキ達もない事だし、オレの好きにさせてもらうとするか・・・」

そう言うと、男はアタシの服に手をかけた。

リアン「んっ、んんっ、んっ!!!(何するのよ、やめてえっ!!!)」

アタシはジタバタもがいたが、男の手から逃がられない。

誘拐犯C「ハッハッハ!こりゃあいいや!!」

リアン「うっん・・・ううっん・・・(哀ちゃん、助けてえっ!!!)」

「

アタシは、泣きそうになった。

つと、その時・・・

ドカアアアアン!!

ものすごい威力で、ドアが砕け散った。

誘拐犯C「な、何!？」

リアン(この、圧倒的な破壊力は・・・)

哀「リアンちゃん!!」

リアン(哀ちゃん・・・来てくれたのね・・・)

誘拐犯C「な、何者だオマエは!!」

哀「灰原哀・・・探偵よ・・・」

誘拐犯C「ふ、ふざけるな!!」

男は哀に襲いかかるうとしたが、その前に哀に麻酔銃を撃たれて気絶した。

哀「リアンちゃん、大丈夫?」

哀はアタシに駆け寄り、さるぐつわと縄を解いてくれた。

リアン「哀ちゃん、ありがと!」

哀「さて、この男、どうする?」

リアン「アタシを襲おうとした罰よ、縛るときましょ!」

その後、哀とリアンの通報により、男は逮捕された。  
しかし、他の4人はすでに逃走していた。

エピソード5 リアンちゃん、SOS!!（後書き）

リアン「あゝ、危なかった・・・」

哀「そういえば、今度大阪に行くんでしょう？」

リアン「あ、そうだった・・・どうしよう・・・」

今回は、「エピソード6 リアンちゃん、服部平次に出会う」です。



## エピソード6 リアンちゃん、服部平次に出会う

リアン「あゝあ、どうしてよ、もう……」

哀「どうしたの？」

リアン「これよ、これ……」

そう言ってリアンが見せた手紙を、哀は受け取り、中身を読んだ。

『工藤、久しぶりやなあ！！さっそくなんやけど、今度、大阪に来てくれや！うまいモンなんぼでも食わしたるさかいな！！ 服部平次』

哀「そういう事ね……」

リアン「あゝもう、どうするのよー！！口調と髪型で、女の子だってバレちゃうじゃない！！」

哀「そうよねえ、いったいどうすれば……あ！いい方法があるわよー！！」

リアン「え？」

哀「ホラ、マスク型変声機があつたでしょ？あれを使えばいいのよ

！あと、帽子をかぶれば……」

リアン「なるほどね……」

リアンだけでは不安なので、哀もついていく事にした。

しかし、この選択が、結果的に正しかった事になる……

平次「ど、どないしたんや、工藤、そのカッコ・・・」

服部平次は、リアンの姿に啞然としている。

それはそうだろう、帽子にマスク姿では、どっかの怪しい人である。

リアン「カ、カゼひいちゃってさ・・・」

平次「声も何か変やで？」

リアン「（ギクッ！）」

予感的中。さすがは西の高校生探偵だ。

リアンは、冷や汗をたらしている。

哀「ね、ねえ、そんな事よりも、早く何か食べに行きましょうよ！」

哀が助け船を出した。

平次「それもそうやな。よっしゃ工藤、何から食べたい？」

リアン「うどん・・・」

平次「哀ちゃんは？」

哀「私もそれでいいわ・・・」

平次「ほな、行こか！」

数分後、平次はバイクをすっ飛ばし、大阪の街を駆け抜けていた。

平次の後ろに、リアンと哀がしっかりつかまっている。

リアン「服部、今回はアレ、使わないのか？」

哀「アレって？」

リアン「灰原、知らないのか？服部は前にオレ達を呼んだ時、大阪見物にパトカー使ったんだぜ。」

哀「パトカーを！？なんてバカな事を・・・怒られたりしなかったの？」

リアン「怒られるに決まってるじゃん！その後、死体が落ちてきてパトカーのボンネット壊れて、坂田刑事は始末書書かされたんだから・・・」

哀「へー・・・」

哀は平次をジーツと見た。

平次は冷や汗をたらしている。

平次「工藤、頼むからそれ以上言わんとしてくれ・・・あの後、オヤジにごつつ怒られたんやから・・・」

リアン「当たり前だろうが・・・」

哀「自業自得ね・・・」

平次「2人とも、冷たいわぁ・・・」

平次はななかば涙声だった。リアンと哀は笑っている。  
そんなこんなで、3人はうどん屋に着いた。

平次「どや？これがホンマのうどんや！ダシが透き通っててそこまで見えるやろ？」

哀「わー、ホント！薄味だけどおいしい！」

リアン「・・・」

リアンは黙ってハシを動かす。

平次「ほな次、どこ行こか？」

哀「そうね、うどんの次は大阪名物の・・・」

哀「おいしいー！おいしいわ、このタコ焼き！」

平次「あれ？工藤は食べへんのか？」

リアン「今、ダイエット中だから・・・」

平次「なんや、女の子みたいやなー・・・」

哀・リアン「（ギクッ！）」

平次「ま、そんなわけないわな！」

哀・リアン「（ホツ・・・）」

平次「よっしゃ、今度はお好み焼き食べに行くか！」

平次と哀は、お好み焼きをパクっている。

リアンは相変わらずあまり食べていない。

「そういえば平ちゃん、知ってる？なんでも、東京で強盗事件起こした4人組が、この辺りに潜伏してるって話・・・」

平次「ああ・・・確か名前は、「極楽鳥」ってゆうたかな・・・？」  
リアン「！！」

平次の言葉に、リアンの顔は引きつった。

なぜなら、その「極楽鳥」は、先日リアンを誘拐したあの強盗グループの事なのだから・・・

リアン「・・・」

哀「女将さん、それホントですか？」

「ええ、まだこの辺りにおるって話やけどね・・・」

リアンは、まだ表情が曇ったままだ。

平次「おばちゃん、おあいそ」

平次は代金を払い、3人は店を後にした。

平次「ほんで、後どこ行きたい？」

哀「買い物がしたいわ。」

平次「ほなら、銀行に行かんなあ。」

3人は、銀行に向かった。

平次「ほな、待つてろや。」

平次はそう言うと、受付に向かった。

「ごくろうさん、平ちゃん。」

平次「あ、どうも。おねが・・・」

平次がそこまで言った時・・・

ガシャーン！！

ガラスが砕け散り、4人組の男達が入って来た。

「強盗や！！」

誰かが叫んだ。

A「騒ぐんじゃねえ！！オレ達は強盗団「極楽鳥」だ！！」

B「死にたくなけりや、さつさとコイツに金を・・・」

それを聞いた平次は、頭をポリポリとかいた。

平次「アホなヤツらやなあ・・・この服部平次がおる前で強盗とは、ええ度胸しとるやないか！！」

C「な、なんだとお・・・」

平次「ハアーツ！！」

言うが早いか、平次は常時携帯していた木刀をひつつかみ、男達にかかっていった。

ドカツ！！

D「がはっ！！」

C「くうっ！！」

あつという間に2人を倒した平次。しかし次の瞬間、怒鳴り声が聞こえた。

A「動くんじゃねえ！！服部平次！！」

B「コイツらがどうなってもいいのか？」

平次「あ、ああっ・・・！！」

平次が見ると、哀とリアンが男達に羽交い締めに使われていた。

その時、リアンの帽子とマスクが脱げる。

リアン「キャッ！！」

平次「キャって・・・工藤・・・！？」

平次は、その瞬間に立ちつくした。

帽子が脱げたリアンは、さらさらのロングヘアをさらしていたからだ。

平次「お、女の子・・・」

平次は、とても驚いていた。

リアン「うう・・・」

平次「こら、オマエら！その子らをはよ離せ！！」

A「そうはいかん、コイツらは今からオレ達が逃げるための人質になつてもらう・・・」

平次「くっ・・・」

平次が身構えた、その時だった。

哀「ナメてんじゃ・・・ないわよ・・・」

哀が放った麻酔針が、男の首筋に当たった。

B「ふにや・・・」

A「お、おい・・・」

平次「たあーっ！！」

ドカアッ！！

そのスキに、平次がもう1人を木刀で殴り倒した。こうして、強盗団の残りのメンバーは逮捕された。しかし、平次にはまだ疑問が残っていた。

平次「工藤・・・なんで話してくれへんかったんや？女になつてもた事・・・」

リアン「だ、だって・・・女になっちゃったなんてわかったら、バカにされると思って・・・」

平次「アホやなあ・・・どんな姿になっても、オマエはオレの親友やで・・・」

リアン「平次君・・・」

リアンは、平次に抱きついた。

平次「なんか、カワイイ妹みたいやわ・・・」

リアン「平次君ったら・・・。。。。!?!」

平次はどさくさに紛れて、リアンの胸を触っていた。

リアン「こ、この・・・」

哀・リアン「エツチイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ!!」

パーン!!

平次はリアンと哀に顔をはたかれた。

それから3時間、2人は平次と口を聞こうとしなかった・・・

## エピソード6 リアンちゃん、服部平次に出会う（後書き）

リアン「まったくもう、平次君はぁ・・・」

哀「デリカシーのかけらもないんだから・・・」

リアン「今度同じ事したら、ボコボコにしてやるわ・・・」

哀「そういえば、今度あのキザな泥棒がこの辺りに来るんだって。」

リアン「も、もしアタシが女だとバレたら・・・」

哀「想像したくないわね・・・」

次回は「エピソード7 リアンちゃん、怪盗キッドと遭遇する」です。



## エピソード7 リアンちゃん、怪盗キッドと遭遇する「前編」

リアンと哀は、杯戸町に新しくできた遊園地、ハイド・ウエストランドに招待された。

というのも、あの怪盗キッドからこの遊園地のホテルで1週間だけ特別公開される宝石「イエローストラテジー」を奪うとの予告状が舞い降りたため、中森警部が2人を招待したのだ。

中森銀三「そうか、コナン君は来れないのか・・・残念だなあ・・・」

警視庁捜査2課警部の中森銀三は、コナンが来ない事を残念がっている。

哀は、なぜリアンに中森警部が期待しているのか最初はわからなかったのだが、リアンから聞かされて、やっとわかった。

リアンはコナンだった時、怪盗キッドの盗みをことごとく防いできたのだ。

ブラックスター

ブルーワンド

鈴木財閥の至宝「漆黒の星」や鈴木次朗吉の「大海の奇跡」、薪樹里の持つスターサファイアやイングラム公国のクリスタル・マザー、そしてロマノフ王朝のインペリアル・イースターエッグ・・・

これだけ活躍すれば、中森警部から一目置かれるのも当然である。

「へえ、いつになく気合い入ってるじゃねえか、中森警部・・・」  
怪盗キッドこと黒羽快斗は、近くのビルから双眼鏡でハイド・ウエストランドを見ていた。

黒羽快斗「ま、あれぐらいの警備の方が、この怪盗キッド様にとっては好都合だぜ・・・」

「やめなさい、黒羽君!!」

快斗「あ、紅子・・・」

快斗が振り向くと、そこには同級生の小泉紅子が立っていた。

小泉紅子「黒羽君、あなた忘れたの?」今宵、2人の緋色の少女が杯戸町の新遊園地に集う時、白き罪人に恐ろしき災い降りかからん  
つて出たの・・・」

快斗「ああ、いつもの邪神ルシユファアの予言だろ?心配するなつて!そんな予言ごときにやられるキッド様じゃねえよ!」

紅子「で、でも・・・」

快斗「そんなに心配なら、オマエも遊園地に来ればいいじゃねえか!」

紅子「ノノノノなっ・・・ノノノノ」

紅子は、赤面している。

快斗「いざとなったら、また前みたいに魔法で助けてくれんだろ?

期待してるぜ、紅子ちゃん!」

紅子「わ、わかったわよ!行けばいいんでしょ、行けば・・・」

紅子はホウキに乗ってその場を後にし、心の中でつぶやいた。

紅子「(黒羽君のバカ・・・私の気持ち、知ってるクセに・・・)」

そう、紅子は快斗の事が好きなのだ。

ところ変わって、こちらはハイド・ウエストランド。

園内ホテル「サンライズ・フルムーン」のパーティ会場に、リアン、哀、紅子、青子が集まっていた。

リアンと哀は、2人とも緋色のパーティドレスを着ている。

中森青子「カッワイー!哀ちゃんとリアンちゃん、とてもカワイイね!」

哀・リアン「あ、ありがとう・・・」

中森警部の娘、青子は、2人のあまりのかわいさにはしゃいでいる。青子の服装は、鮮やかなマリンブルーのワンピースだ。

その後ろで、紫のノースリーブジャケットを着た紅子が腕組みをしている。

紅子「・・・（私の予言に出てた緋色の少女って、あの子達の事ね・  
・それに、黒羽君によると、宝石を狙っている集団がいるみたいだし・・・・1人で調べてみようかしら・・・・）」

紅子は、持っていたジュースを飲み干すと、パーティ会場を後にした。

別の場所では、中森警部と茶木警視、そして白馬探が集まっていた。銀三「というわけで、今回も頼むぞ、白馬君。」

白馬探「お任せください、中森警部。今回こそキッドを捕らえてみせますよ！」

そんな3人の会話を、快斗は天井裏で聞いていた。

快斗「（フッフ・・・甘いぜ、白馬・・・）」

その頃、1人で単独捜査をしていた紅子は、扉越しに聞こえてくる会話を聞き、そこで立ち止まった。

スネイク「まったく、キッドのヤツ、余計な事をしやがって・・・このままじゃ、ヤツより先に宝石を手に入れる事ができねえぞ・・・」

レイリー「だったら、直接キッドから奪えばいいじゃないの・・・  
ついでに、命もね・・・」

紅子「（い、命！？）」

スネイク「フフフ、そうだな・・・ヤツには今まで何度も横取りを  
されてきたからな・・・」

スネイクとレイリーは、不敵な笑みを浮かべている。

紅子「（た、大変だわ！！黒羽君に知らせなきゃ・・・）」

紅子は、快斗にこの事を知らせようと、携帯を取り出そうとしたが、  
その時、扉に体が当たって音を立ててしまった。

スネイク「ん？誰かそこにいるのか？」

紅子「（い、いけない！！）」

スネイクとレイリーが扉を開ける前に、紅子は走り出していた。

紅子「ハアハア、ハアハア・・・」

紅子は、とにかく必死で走った。

紅子「ハアハア、ハアハア・・・」

しばらく走って、紅子は足を止め、後ろを振り返った。

スネイク達が追ってくる気配はない。

紅子「なんとか、まいたみたいね・・・早く黒羽君に連絡を・・・」  
しかし、その時・・・横から何者かの手が伸びてきて、紅子の口を  
塞いだ。

紅子「うつ！！」

紅子は何者かに引きずり込まれる。

紅子「むぐ・・・むぐう・・・」

紅子は必死にもがいたが、体を羽交い締めになされてしまった。

しかも、ハンカチで口を塞がれ、そのハンカチには睡眠薬が染み込まれていた。

紅子「うう・・・（黒羽・・・君・・・）」  
ドサツ・・・

紅子は気を失い、倒れ込んでしまった。

スネイク「よくやった、クロノス。」

紅子を襲ったのは、スネイクの仲間、クロノスだった。

スネイク「この小娘を運べ。」

クロノス「了解。」

クロノスは紅子を背中に抱えると、そのままスネイク達と共に立ち去っていった。

紅子「ん・・・」

しばらくして、紅子は目が覚めた。

紅子「！！」

気がついた紅子は、体を動かそうとするが、動かない。

そう、紅子は手足を縄でグルグル巻きに縛られて、柱にくくりつけられていたのだ。

紅子「んっっ、んんんっ！！」

さらに、口もガムテープを貼られて塞がれている。

紅子「うっん！うっん！！」

紅子は、必死にもがいてみたが、まったく身動きが取れなかった。

紅子「ううっん・・・」

紅子は、ガックリとうつぶした。

紅子「（私、いったいどうなったの・・・？そうだわ！確か、怪しいヤツらの会話を扉越しに聞いてて、その事を黒羽君に知らせよう

と走って、立ち止まった時、誰かに口を塞がれて・・・」

紅子は、状況をすぐに理解した。

紅子「（私、口封じにさらわれたのね・・・）」

紅子は、不意に1人の少年の姿を思い浮かべた。

いつも自信たつぷりで、何でもできると信じてる、キザなあの子の事を・・・

紅子「（黒羽君・・・私を助けて・・・！！）」

快斗「紅子・・・？」

快斗は、紅子の叫びに気づいたらしい。

快斗「紅子の身に何かあったのか・・・？」

快斗は、紅子の状況を察知した。

快斗「待ってろ、紅子・・・今助けに行くぞ！！」

快斗は、紅子を助けるために走り出した。

## エピソード7 リアンちゃん、怪盗キッドと遭遇する「前編」(後書き)

さて、今回は前後編です。はたして、快斗は紅子を救い、イエロー  
ストラテジーを手に入れられるのか？

そしてリアンと遭遇するのか！？

すべては次回「エピソード8 リアンちゃん 怪盗キッドと遭遇す  
る『後編』」で明らかに！！

## エピソード8 リアンちゃん、怪盗キッドと遭遇する「後編」

ところ変わって、こちらはハイド・ウエストランド内のホテル、サンライズ・フルムーン。

紅子がスネイク達に捕まっている事などまったく知らない哀とリアンは、食事をしながら談笑していた。

リアン「この料理、おいしい〜！」

哀「ホントね！」

青子「快斗も紅子ちゃんも、何やってんのかなあ？こんなおいしい料理ほっぱり出して・・・」

一方、その紅子は、見知らぬ部屋に監禁され、縄で柱にグルグル巻きに縛り付けられたままだった。

紅子「う〜ん！う〜ん！！う〜ん！！」

紅子はジタバタともがいているが、縄はビクともしない。

紅子「（ダメ・・・全然動けないわ・・・縛り付けられてなかったら、どこに閉じ込められてるのかわかるのに・・・！！）」

紅子は、辺りを見渡してみた。

スネイク達が戻ってくる気配はないが、なにかしらイヤな予感がする。

紅子がうつむいていると、向こう側からスネイク達の会話が聞こえてきた。

レイリー「スネイク、計画は順調よ。」

スネイク「しかし、予定外の事が起こったモンだな。」

レイリー「あの、赤みがかった小娘の事？」

クロノス「まあ、あの娘は隣の部屋に閉じ込めてあるから、簡単に



は逃げられんだろう・・・」

紅子は耳を澄ませる。

どうやら自分は、スネイク達がいる部屋の隣の部屋に監禁されているらしい。

スネイク「レイリー、状況はどうだ？」

レイリー「ええ、すでに数人の仲間を配置してあるわ。」

クロノス「いざとなったら、客を巻き添えにしても「イエローストラテジー」を手に入れるさ。」

紅子「・・・！！」

スネイク達の会話を聞いていた紅子は、ブルブルと体がふるえた。

スネイク「じゃあ、そろそろいくか・・・」

スネイク、レイリー、クロノスは、部屋にカギをかけ、出て行った。

紅子「うゝん、うゝん！！うゝん、うゝん！！」

紅子は、ムダとはわかっていても、暴れられずにはいらなかった。スネイク達の計画を知った今、のんきにここに閉じ込められている場合ではない。

紅子「うゝん、うゝん！！」

紅子は、なおも必死にもがいている。

ここに見張りが1人もいないのは、せめてもの救いだろう。

紅子「うゝん、うゝん！！（早くこの縄を解いて、脱出しなきゃ・・・このままじゃ、青子ちゃん達が危ないわ！！）」

紅子がジタバタともがいていると、ガチャガチャという音が聞こえた。

紅子「！！（ヤバイ！誰か戻ってきたの！？）」

紅子は、最悪の事態を考え、覚悟を決めた。

しかし、扉を開けて入って来たのは、スネイク達ではなかった。

快斗「紅子！！」

紅子「（く、黒羽君！！）」

そう、扉を開け入って来たのは、黒羽快斗だった。

快斗「紅子、大丈夫か？」

快斗は紅子に駆け寄ると、紅子の縄とガムテープを解いた。

紅子「ありがとう、黒羽君！あ、そうだわ！スネイクってヤツらが、イエローストラテジーを手に入れるために会場に向かっているわよ！」

快斗「なんだって！？それじゃ、青子達が危ない！！行くぞ、紅子！！」

紅子「うん！！」

快斗と紅子は、会場に向かって走り出した。

一方、会場ではパーティが予定通り行われていた。

リアン「哀ちゃん、そろそろイエローストラテジーの紹介よ！」

哀「楽しみね！！」

青子「ホント、快斗と紅子ちゃん、どこに行っちゃったんだろう・・・」

快斗と紅子は、必死に走っていた。

しばらくして、イエローストラテジーが公開された。

リアン・哀「キレイ!!」

青子「すごい!!」

リアン達が歓喜している中、中森警部達は警戒していた。

・・・と、その時・・・

ガッシャアアアアアアン!!

銀三「な、なんだ!？」

ガラスが割れる音がしたかと思うと、スネイク達が会場に侵入して来た。

スネイク「動くな!我々は「スネイク」だ!!」

レイリー「全員、手を上げな!!」

スネイクが拳銃を天井に向けてぶっ放すと、客達は手を上げた。

銀三「そこまでだ!!」

探「手を上げるのは、あなた達です!!」

中森警部と探が、スネイク達に拳銃を向けた。

スネイク「ちっ、警察か・・・」

レイリー「こうなったら・・・」

スネイクとレイリーは向きを変えると、突然予期せぬ方向に飛び出した。

銀三「な、何!？」

スネイクとレイリーは、リアンと哀の方に走っていくと、彼女達をその腕に抱えた。

リアン・哀「キャアアア!!」

銀三「し、しまった!!」

探「人質を取られた!!」

スネイク「動くなよ、刑事ども!!」

レイリー「この子達がどうなってもいいのかしら?」

スネイクとレイリーは、リアンと哀に拳銃を突きつけた。

リアン・哀「うう……」

スネイク「さあ、死にたくなかったら、イエローストラテジーを渡しな――！」

リアン「渡しちゃダメよ、中森警部――！」

哀「この人達、最後には全員殺す気だわ――！」

スネイク「黙れ、ガキども――！」

スネイクとレイリーは、リアン達の口をガムテープで塞いだ。

リアン・哀「んゝ、んゝ――！」

レイリー「さあ、どうする？」

探「な、中森警部……」

銀三「やむを得ん……イエローストラテジーを渡そう……」

中森警部は、イエローストラテジーをスネイクに手渡した。

スネイク「クツクツクツ……ついにキッドより先にビッグジュエルを手に入れたぞ――！」

探「宝石は渡した！その子達を放せ――！」

スネイク「そうはいかん……」

レイリー「この子達は、アタシ達が逃げきるまで人質よ――！」

その時、トランプのカードが数枚飛んできて、スネイク達の拳銃と、宝石をはじいた。

スネイク「ぐあ――！」

レイリー「な、何――？」

シュルルルッ――！！

パシッ――！！

スネイク「か、怪盗キッド――！」

そこには怪盗キッドが、イエローストラテジーを手にして立っていた。

怪盗キッド「さあ、降参したらどうですか？」

スネイク「ふざけるな！こっちにはガキの人質が……」

スネイクは腕を見たが、リアン達はいなかった。

紅子「その子達なら、ここよ――！」

スネイク達が振り返ると、紅子がリアン達を腕に抱えていた。

レイリー「あの娘、いつの間に縄を・・・」

スネイクとレイリーが辺りを見渡すと、仲間達が刑事達に拘束されていた。

スネイク「くそお、逃げるぞ、レイリー、クロノス!!」

スネイク達は、足早に逃げていった。

キッド「これもパンドラじゃなかったか・・・」

キッドはそう言うのと、宝石を探に投じた。

キッド「じゃあまたな!名探偵!!」

キッドは空を飛んでいた。

キッド「あのロングヘアの女の子・・・近いうちにまた会いたいモンだな・・・」

キッドはそう思いながら、帰路についた。

## エピソード8 リアンちゃん、怪盗キッドと遭遇する「後編」(後書き)

リアン「危機一髪だったわね。」

哀「そういえば、あなたまたカラオケに行くんでしょう?」

リアン「ええ!今度は採点もかねてね!」

今回は「エピソード9 リアンちゃん、またカラオケに行く」です。

## エピソード9 リアンちゃん、またカラオケに行く

朝、哀は寝ぼけまなこで目が覚め、頭をかきながらリビングへと降りていった。

哀「博士、おはよ・・・」

阿笠「おお、哀君！リアン君はもう起きとるぞ。」

哀「え、もう？」

哀は驚いた。リアンはいつもなら、泣き込んだりカラオケボックスに行つてカラオケの徹夜をしたりで、哀が起こさなければ遅刻すんぜんまで寝ているのだ。

その彼女がもう起きているのだから、哀が驚くのもムリはない。

哀「リアンちゃん、おはよ。」

リアン「あつ、哀ちゃん！おはよ！」

哀「めずらしいわね、あなたが早起きなんて・・・という風の吹き回し？」

リアン「失礼ねえ、アタシだってたまには早く起きるわよ・・・」

哀「いつも遅刻すんぜんまで寝てて、巻き添えをくいそうになる私の身にもなつてほしいんですけどね・・・」

リアン「アハハ・・・」

哀「で？こんなに朝早く起きたからには、何か用事があるのよね？」

リアン「うん、もちろん！杯戸町のジャンカラに行くのよ！」

哀「杯戸町のジャンカラ？」

ちなみにジャンカラとは、尼崎を初めとして日本の各地に実際にあるカラオケ店の事である。

リアン「そうよ！この前行つて、音がすごくよかったのよ！」

哀「それで、また夜中に行つたのね？」

リアン「ゲッ！しまった・・・」

哀「まあ、いいわ！私もつき合つたげるから、カラオケ。」

リアン「おやおやあ？この前は逃げようとしてませんでしたっけ」

？」

哀「あ、あれは、まだあなたが音痴のままだと思ってたからで・・・今は、その・・・」

哀は、あせっている。

リアン「まあ、いいわ！朝ごはんまだだったわよね？」

哀「そ、そうね・・・」

リアン「じゃあ、アタシが作るわ！博士、キッチン借りるわよ！」

そう言うのと、リアンはキッチンへと歩いていった。

数分後、リアンが作った朝食がテーブルに並んだ。

メニューは、クラブハウスサンドイッチ、野菜たっぷりサラダ、そして味噌汁である。

リアン「手を合わせてください。いただきます！」

哀・阿笠「いただきます！」

哀は、まずサンドイッチを口に入れた。

哀「あ、これおいしい！」

阿笠「どれもこれもプロ並みじゃ！」

リアン「当たり前でしょ？アタシは1人暮らししてたんだから・・・」

阿笠「ところでリアン君・・・晩ごはんは肉料理も入れてはくれんかのぉ・・・」

リアン・哀「絶対ダ・メ・で・す！！！」

リアンと哀の声が、見事にハモった。

この分だと、阿笠は肉料理にありつくのは夢のまた夢かもしれない。それからしばらくして、リアンは出かける準備を始めた。

哀も、出かける準備を始める。

リアン「じゃあ哀ちゃん！行こうか！」



哀「うん！」

阿笠「楽しんでくるんじゃないぞ！」

リアン・哀「行ってきまーす！」

リアンは哀を後ろに乗せ、自転車に乗って出かけていった。

哀「ねえ、リアンちゃん、ちょっといい？」

リアン「なーに？哀ちゃん。」

リアンは自転車をこぎながら、哀の質問を待つ。

哀「その・・・風とか、気にならないの？」

リアン「どうして？」

哀「ど、どうしてって、あなた・・・風で服やスカートがなびくじやない！誰かに見られたりするのよ？」

リアン「どうしてそんな事気にするの？別にいいじゃない！」

哀「ハア・・・」

哀はハアーツとため息をついた。

どうやらリアンは、銭湯の時もそうだったが、どうも女になっている自覚が足りないらしい。

数分後、2人は杯戸町のジャンカラに着いた。

リアン「子供2人でお願います！」

「はい、ごゆっくりね！」

リアンと哀は、2階の209号室に着き、中に入った。

哀「それでリアンちゃん、何歌うの？」

リアン「そうねえ・・・哀ちゃんは？」

哀「愛内里菜の「I Can't stop my love for you」とか、上原あずみの「無色」とか・・・」

リアン「じゃあ、名探偵コナンのテーマ曲オンリーだね！」

リアンと哀は、次々に歌いたい曲を入れた。

リアン「じゃあ、哀ちゃんからだから、アタシ注文とってるね。何がいい？」

哀「シーフードスパゲティ・・・それとアップルジュース・・・」

リアン「わかったわ。じゃあアタシも注文してつと！」

数分後、リアン達が歌っているところに、従業員が料理を運んできた。

料理は、シーフードスパゲティ、アップルジュース、スパイシーチキンカレー、レモンジュース（もちろん、後で追加もするが）。

その後、リアン達は休憩もはさんで、歌を歌い続けた。

哀が歌ったのは、Mysterious Eyes、胸がドキドキ、恋はスリル、ショック、サスペンス、I can't stop my love for you、願い事ひとつだけ、Winter Bells、START、迷宮のラヴァーズ、Secret of my heart、青い青いこの地球に、光と影のロマン、明日を夢見て、Thank You For Everything、悲しいほど貴方が好き、ジューンブライド、あなたしか見えない、無色、Still for your love、氷の上に立つように、星のかがやきよ、TRUTH A Great Detective of Love、Growing of my heart。

リアンが歌ったのは、風のららら、Feel Your Heart、運命のルーレット廻して、ギリギリchop、君と約束した優しいあの場所まで、destiny、謎、STEP BY STEP、Free Magic、夏の幻、Start in my l

if e、夢みたあとで、君がいない夏、君という光、世界止めて、忘れ咲き、眠る君の横顔に微笑みを、O v e r t u r e、衝動。

要するに、歴代のオープニングとエンディングをすべて歌った事になる。その他にも、哀は愛のテーマ、君がいればを、リアンはコナンのテーマ、想い出達、想い出を歌った。

そして、歴代の劇場版テーマ、Happy Birthday、少女の頃に戻ったみたいに、ONE、あなたがいるから、always、Everlasting Time after time、花舞う街で、Dream x Dream、夏を待つ帆のよう<sup>セイル</sup>に、ゆるぎないものひとつは、2人で歌った。

2人が要した時間は、約4時間だった。

リアンと哀は部屋を出て、フロントで代金を支払った。その時、奥から従業員達が出てきた。

「おめでとございます！一週間後に開かれる、歌姫コンテストへの出場資格、獲得です！！」

リアン・哀「歌姫コンテスト・・・？」

従業員が言うには、ジャンカラグループが毎年行っている大会らしい。

リアンと哀は、帽子をかぶる事を条件に、出場を引き受けた。

そして当日。会場には多くの観客が詰めかけ、出場者の気迫はムンムンである。しかし、リアンと哀は、負けるはずはないと思っていた。

リアン達の予想は当たり、2人は次々と参加者を打ち倒して、決勝戦まで駒を進めた。

2人が決勝で歌ったのは、B'zのゆるぎないものひとつ。

決勝戦も難なく制覇し、2人は優勝する事ができた。

でも、アイドルデビューは気持ちが悪く落ち着いたらと事で、2人は誘

いを断った。

そして、その帰り道。

リアン「楽しかったね、哀ちゃん！」

哀「そうね、優勝もできたしね。」

リアン「ねえ、せっかくだから、歌いながら帰りましょ！」

哀「うん！」

リアンと哀は、ゆるぎないものひとつを歌いながら、帰路についた。

リアン「笑いながゝらゝ別れてゝ胸の奥は妙にブルー言いたい事は言えずゝ あなたの前じゃゝいつでもゝ心と言葉がゝ裏腹になっちゃうゝ 何も始まらないで今日が終わりゝカゝラスは歌いながら森へゝ帰るゝ 自分がイヤでゝ眠れないゝこんな事なんべん繰り返すのゝ？ゆるぎないものひとつ抱き締めたいゝよゝ 誰もがそゝれを笑ったとしてもゝ 燃えさかる想いだけを伝えましょゝ 命の証が欲しいならゝ歌おうマイライフゝ」

哀「神様ならたぶんねゝそんなに多くのゝ事ゝ求めちゃいないよゝ 欲望からゝ自由になれないゝボクは手当たりしだいゝ不幸せうんじゃうゝ 誰かにけしかけられてばかりいてゝ1人じゃ迷子のようにうろたえるゝ 立ち止まってゝ考えろよゝ本当に欲しい物は何だろう？ゆるぎないものひとつ抱き締めたいゝよゝ 誰にもそゝれが見えないとしてもゝ まっすぐやさしく生きてゆきましょゝ 光のように闇を突き抜けてゝ歌おうマイライフゝ」

リアン・哀「どこかに逃げたり隠れたりゝしないでいいよねゝ 魂よゝもつとゝ強くあれ！！ゆるぎないものひとつ抱き締めたいゝよゝ 誰もがそれを笑ったとしてもゝ 絶望の真ん中を見つめましょゝ 命の証が欲しいならゝ 思い切りあなたを抱き締めたいゝよゝ 土砂降りの雨を駆け抜けてゝ 歌おうマイライフゝ 2度ゝとないゝマイライフゝ・・・」



エピソード9 リアンちゃん、またカラオケに行く（後書き）

リアン「楽しかった」

哀「ホントね」

リアン「次は図書館に行くのよね。」

哀「また事件が起こらない事を祈るわ・・・」

リアン「何それ・・・」

今回は「エピソード10 リアンちゃん、図書館に行く」です。

## エピソード10 リアンちゃん、図書館に行く

7月のある日、リアンは哀と共に、杯戸図書館に来ていた。その理由は、夏休みの宿題に読書感想文を出されたからだ。そんなワケで、2人は読む物を探しに杯戸図書館に来ていたのである。

リアン「『サムライ娘』『怪盗ガール』『奇跡のバット』・・・」

哀「どれもこれもくだらない本ばかりね・・・」

リアン「こんなの読んで感想文書けて言われてもねえ・・・」

哀「しょうがないじゃない、今の私達は大人向けの本は読めないんだから・・・」

リアン「それはいいけど、何よこのいびつな並べ方は・・・ちゃんと並べなさいよね！」

哀「しょうがないじゃない、ここは児童書のコーナー・・・子供が出し入れするんだから・・・」

リアン「そうね・・・ん？」

リアンは何かに気づき、下の扉を開けた。

哀「外国からの輸入本？」

リアン「あら？何？この本・・・みんなケースに逆に入ってたまま、

ビニールコーティングされてるわ・・・」

せがわいじ  
瀬川礼治「コラコラ！それは子供の見る本じゃないよ・・・」

リアン・哀「あ、ごめんなさい！」

ピシャ。

ファンファンファン・・・

哀「あら？パトカーの音・・・」

リアン「何かあったのかしら？」

哀「もしかして事件だったりして・・・」

リアン「アタシちよつと行ってくる!!」

ダッ!

哀「あ、ちよつ、リアンちゃん!!」

リアン「あー!そのエレベーターちよつと待つてー!!」

バツ!

ビーンッ!!

哀「定員オーバーだわ・・・」

リアン「定員は7名か・・・」

哀「ここにいる人と私達を入れて、ちようど8人・・・私達がオーバーね・・・」

リアン「しかたないわ、階段から降りましょ!!」

リアンと哀が1階に降りていくと、目暮と瀬川がいた。

哀「あ、目暮警部!」

リアン「何かあったんですか?」

目暮「実はな・・・」

目暮警部の話によると、この杯戸図書館に勤務している中田達男さんが、おおといの夜から行方不明になっているらしい。

瀬川さんによると、中田さんは昨日から欠勤しているが、無断で休む人ではないとの事。

アタシと哀ちゃんは、外は捜さないの?と目暮警部に聞いてみたが、一応念のためだという。

聞けば、中田さんは几帳面な人で、帰る前にはいつも奥さんに電話をしていたというのだ。

それがおとといの夜はなかったという事は、勤務中にさらわれたか、まだ図書館内にいるかの2つの可能性がある。



そして、まだここにいるのなら、殺されている可能性が高い……！！

アタシと哀ちゃん、警部の真剣な発言にビクツとなった。人目につかない場所すべて捜したが中田さんは見つからず、警部達は引き上げていった。

その夜……

ギッ……

アタシと哀ちゃんは、トイレにある用具箱の中に隠れていた。

リアン「さてと……もう誰もいないわよね。で、哀ちゃん。なんであなたまでいるワケ？」

哀「だって、あなたの考えてる事なんて見え見えだもの……死体を捜すんでしょ？」

リアン「ま、まあそうだけど……」

哀「1人じゃ危ないわ。私も一緒に探すよ。」

リアン「ありがと、助かるわ。」

哀「でもさあ、人目につかないトコは昼間警部達が捜したのよね？」

リアン「ええ。でも、なんか妙なのよね、この図書館……アタシがコナンの時に解決した、『米花図書館麻薬殺人事件』とあまりに状況が似すぎて……」

ウイイイン……

哀「な、何の音？」

リアン「まずい、エレベーターだわ……誰か上がってくる……！」「サッ……！！」

アタシと哀ちゃんは、トイレに隠れた。

チン！

ガーッ・・・

エレベーターの中から出てきたのは、館長の瀬川だった。

哀「（館長の瀬川さん！？）」

リアン「（どうしたのかしら、こんな時間に・・・）」

瀬川は3階の部屋に入っていた。

アタシ達は、耳を澄ませる。

ガラッ・・・

瀬川が開けたのは、妙な輸入本が入っていた棚。

瀬川「フッ・・・中田もバカなヤツだ・・・コレの中身さえ見なきゃ、死なずに済んだものを・・・」

リアン・哀「！？」

瀬川「警察も警察だ、同じ事が前にもあったというのに、疑いもせず帰っていったわ・・・まさか、この図書館にヤツが眠っているとも知らないで・・・クツクツクツ・・・ヒヤアッハッハッハッ・・・」

リアン「（やっぱり死体はあったんだわ・・・前と同じく、この図書館の中に・・・殺されたのは中田さんで、殺したのは瀬川館長・・・ん？ケースの中の本をカバンの中に移し替えてる・・・）」

哀「リアンちゃん、暗くてよく見えないわ・・・」

ギッ！

瀬川「！？だ、誰だ！！誰がいるのか！！」

リアン・哀「（ヤッバー！！）」

アタシ達は急いで、トイレに隠れる。

案の定、瀬川は階段まで行くと、こちらに引き返してきた。

ヌッ・・・

瀬川「気のせいか・・・」

ギッ！

瀬川「！！」

リアン「（バカ！！）」

哀「（むぐ・・・）」

カツカツカツ・・・

瀬川「そこか！！」

バツ！！

瀬川「・・・」

死角の位置で、アタシ達はふるえていた。

リアン「（当分ここから出ない方がよさそうね・・・）」

それから数分後、ようやく瀬川は帰った。

哀「リアンちゃん、これからどうするの？」

リアン「あの妙な輸入本から見つけましょ！見つけるコツは、もうわかってる・・・」

それからわずか数分で、アタシ達は本を見つけた。

パカ！

リアン「前の事件では、麻薬だけしか入っていなかったけど、今回は拳銃や、取引禁止になってる昆虫まで入ってる・・・前のヤツよりさらにタチが悪いわね・・・」

哀「リアンちゃん、あの館長、戻ってこないかしら？」

リアン「大丈夫よ。明かりはつけてないし、なるべく物音を立てずにやっているからね・・・さて、次は死体だわ・・・」

アタシ達は、4階に来ていた。

哀「リアンちゃん、本当にこのエレベーターの中に死体があるの？」

リアン「ええ。その証拠は、昼間アタシ達が乗った時鳴った定員カーバーのブザーよ。」

哀「え？」

リアン「よく考えてみて。アタシ達は今子供で、しかも女の子・・・2人合わせてもせいぜい3〜40キロだわ。それと、一緒に乗って

た6人の乗客の内、2人も子供よ。この4人を合わせて、体重はいくらかしら？」

哀「ああ〜っ！！そうよ！せいぜい100キロでおとな1人半！他の4人の大人と、荷物の重さがあっても、ブザーが鳴るには大人1人分足りないわ！！」

リアン「そう！つまりこのエレベーターには、最初から1人が乗っていたのよ・・・アタシ達乗客の死角・・・エレベーターの天井にね！！」

エレベーターの天井から、中田さんの変わり果てた姿が現れた。

哀「ひ、ひどい・・・」

リアン「前と同じく、絞殺されてから天井に突き落とされたのね・・・残酷な殺し方だわ・・・さあ、早く警察に電話するわよ！！」

哀「う、うん・・・」

リアン「あれ？あれ？つながらないわ・・・」

哀「な、なんで!？」

「それは、私が電話線を切ったからだよ・・・」

リアン・哀「えー!!」

アタシ達は、声の主に驚いた。

その声の主は、帰ったはずの瀬川館長だったのだから!!

リアン・哀「ど、どうして・・・!!」

瀬川「私実はね、帰ったフリをして君達を監視していたんだよ。幸い、君達が女の子で助かった・・・ゆっくり殺してあげるからねえ・・・」

瀬川は、ジリジリとアタシ達に近づいてくる。

リアン「(く・・・こうなったら・・・)このおー!!」  
ドスッ!!

瀬川「ぐわ!？」

リアン「哀ちゃん、こつちよ!!」

哀「は、はい!!」

アタシは瀬川の足を思い切り踏みつけると、哀ちゃんを連れて逃げ出した。

瀬川「おのれ小娘ども・・・逃がさんぞ・・・」

アタシ達は、図書館内を走り抜けていた。

哀「リアンちゃん、玄関には行かないの？」

リアン「ムダよ。おそらく、館長がカギを閉めてるわ・・・だけど幸い、こつちにはイヤリング型携帯電話がある・・・もう警部には連絡したから、あと30分もすれば・・・」

瀬川「小娘ども、待てえ!!」

哀「ゲッ!!もう追いついてきた!!」

リアン「とにかく、あと20分間アイツから逃げ切るわよ!!」

瀬川「ハアハア、ハアハア・・・どこに行った・・・ん?ここか!

」

ガチャ!!

哀「あ!!」

リアン「しまった・・・」

瀬川「フッフ・・・こんなバリケード張ったところで、何の役にも立たんわ・・・さあ、覚悟してもらおうか・・・」

哀「あ・・・あわわ・・・」

リアン「フッ・・・」

瀬川「ム?小娘、何がおかしい？」

リアン「往生際が・・・悪いのよ!!」

ドオン!!

瀬川「フン、どこを狙って・・・」

リアン「イヤ、狙い通りよ・・・」

瀬川「何!？」

ドシー!!

瀬川「う、うわあああ!!」

ズウン!!

瀬川は本棚に押しつぶされた。

瀬川「ぐああ・・・オマエ達、何者・・・だ・・・」

哀「灰原哀・・・」

リアン「江戸川リアン・・・」

リアン・哀「探偵よ!!!」

その後、警察が到着し、館長は逮捕された。

アタシと哀ちゃんは、事情聴取を受けてから、仲良く家に帰った。  
しかし、その時アタシの事を監視していた怪しい人達がいた事に、  
アタシは気づきもしなかった・・・

## エピソード10 リアンちゃん、図書館に行く（後書き）

リアン「イヤー、ずいぶんご無沙汰だったよねー。」

哀「作者さんが入院中だったのが、大きな理由よねー。」

リアン「そういえば、次回はまたアタシが大ピンチらしいわよ?」

哀「またかよ・・・」

次回は「エピソード11 リアンちゃん、ストーカーに狙われる!」です。

## エピソード11 リアンちゃん、ストーカーに狙われる!!

リアン「遅刻だぁー!!」

リアンと哀はターボエンジンつきスケボーで、米花町を疾走していた。

哀「だから、『もっと早く起きなさい』って言ったのに・・・」

哀はリアンにしがみつきながら、あきれたように言う。

リアン「だって、探偵左文字の小説、やっと続きが読めたんだもん

！まだ大丈夫だと思って、夜中までのめり込んで・・・」

確かにリアンはこのところハプニング続きで、なかなか買った小説の続きが読めなかったのだが・・・

哀「その結果がこれ？あんまり笑えないわね。」

哀の冷静な言葉に、リアンは苦笑いした。

リアンと哀は帝丹小学校に着くと、スケボーを持って学校に駆け込んだ。

しかしリアンは、自分を監視する男がいた事に気づかなかった。

歩美「リアンちゃん、この式難しいよ・・・」

リアン「ああそれはね、こうやって解くのよ。」

リアンは歩美に数式の解き方を教えている。

どうやら、授業開始までには間に合ったようだ。

光彦「そっいえば、知ってます？最近、謎のストーカーが出回ってるって話・・・」

リアン「何それ？」

哀「ああ、それなら博士に聞いてるわ。なんでもカワイイ美少女を



専門に狙う、最低の集団だつてね。」

歩美「カワイイ女の子かぁ・・・」

元太「それなら、リアンちゃんは真っ先に狙われるな。」  
ズルッ！

リアンはこけた。

リアン「な、なんでアタシが？」

光彦「だってリアンちゃん、クラス1の美少女じゃないですか。」

哀「確かに、一理あるわね。」

リアン「哀ちゃんまで・・・もう・・・」

放課後、リアンはゲタ箱で靴を出していた。

リアン「あら？」

リアンはゲタ箱の中の物を引っ張りだした。

リアン「アタシに手紙？ひよつとして、ラブレター？」

リアンになってから、こういうワケか男子にはモテている。

元々美少年なので、女になればよけいに美少女になってしまうのだから、モテて当たり前なのだが・・・

リアン「やっぱり・・・」

リアンは中身を読むと、クスリと笑った。

哀「どうしたの、リアンちゃん？」

リアン「あ、何でもないのよ。あ、そうそう。今日もアタシがタコはんの材料買って帰るから、待っててね。」

哀「ええ、わかったわ。」

リアンはすぐに学校を出ると、指定された場所を目指して走ってい

った。その後ろを、哀は心配そうに見つめていた。  
哀「（リアンちゃん・・・もしかして・・・）」

リアン「ハア、やっと着いた・・・ラブレターの送り主さーん！来たわよー！」

すると、男が3人ほど現れた。3人とも、ニヤニヤしている。

「お嬢ちゃん、来てくれたんだね。」

リアン「当たり前よ！どういっつもりなの？『少年探偵団の2人の女の子達をひどい目にあわせたくなければ、君1人で杯戸工場に来い』なんて・・・あきれてものも言えないわね。ストーカー集団さん！！」

「ハッハッハッ、やはりバレていたか・・・」

リアン「当然よ。」

「前々から君達少年探偵団は、目障りだと思っていたんだ。君達のせいで、オレ達は安心して仕事もできやしない。」

リアン「女の子をつけ回したり、いじめたりする事が仕事だなんて・・・笑わせるわね！」

「まあ、君をこのまま帰すつもりはないけどね。」

「痛い目にあいたくなかったら、おとなしくしな！！」

リアン「ハアッ！！」

リアンはサッカーボールを蹴り飛ばした。

ドン！ドン！

「がつ！」

「ぐはっ！」

男2人が倒れる。

「お嬢ちゃん、なかなかやるねえ。しかし、私にはそんな手は通用

しないよ。」

グオッ！！

リアン「えっ・・・キャアッ！！」

リアンは男に押し倒された。

リアン「放しなさ・・・むぐっ！！」

男はリアンの口をガムテープで塞いだ。

リアン「んむうっ！むぐう！！」

リアンはジタバタともがいた。

「騒いだってムダだよ。お嬢ちゃんがここにいる事など、誰も知るすべはない。」

リアン「うーっ、うーっ！」

「さて、お嬢ちゃんの体をいたたくよ。」

リアン「うぐっ・・・！！（誰か・・・助けて・・・！！）」

リアンは歯ぎしりした。

「ハッハッハッ・・・ぐえっ！！」

リアンを押し倒していた男が、サッカーボールに吹っ飛ばされた。

リアン「（このサッカーボールは・・・）」

哀「リアンちゃん！！」

哀が工場の中に駆け込んできた。

伸縮サスペンダーで男達を縛ると、リアンのガムテープをはがした。

ピリリ・・・

リアン「イタタ・・・哀ちゃん、ありがとう・・・」

哀「リアンちゃん、なんで？どうして相談してくれなかったの？自分がストーカー達に狙われているって・・・」

リアン「だ、だって・・・あなたと歩美ちゃんを危ない目にあわせたくなくて・・・それで・・・」

哀「バカ！あなたは1人じゃない！私達という仲間がいるじゃない・・・それに今のあなたは非力な女の子なんだから・・・自分1人だけで解決しようとしなくていいよね・・・」

リアン「哀ちゃん・・・」

「姉ちゃん、怒るんはそこまでにしたり。」

リアンがパツと哀の後ろを見ると、なんと平次が立っていた。

リアン「平次君！どうして・・・？」

平次「オマエに用があつてやな、東京まで出て来たんや。ほんでじいさんの家に向かつとつたら、この姉ちゃんが血相変えて走つて来よつたさかい、事情聞いて一緒に来たんや。」

リアン「そうだったんだ・・・」

その後、リアン達の通報により、ストーカー達は逮捕された。

リアンを狙った理由は、少年探偵団の力を弱めるためだったらしい。

警視庁で事情聴取を受けたリアン達は、阿笠邸に帰ってきた。

リアン「で、アタシに話つて何？」

平次「オマエの体力の事や。自分、女になって体力落ちてるやろ？」

リアン「う、うん・・・まあ・・・」

平次「これまでも、何度もピンチになった。このままじゃアカンと、オレは思つたんや。」

哀「それで、服部君どうするの？」

平次「決まつとるやろ。オマエらに、剣道の修行、つけたるんや！」

リアン・哀「ええっ！？」

## エピソード11 リアンちゃん、ストーカーに狙われる!! (後書き)

リアン「今回はアタシ、大ピンチだったよね。」

哀「今までにも充分大ピンチだったと思うけど・・・」

リアン「アハハ・・・そんなワケで、平次君に修行をつけてもらう事になったアタシ達!」

哀「いったい、どうなるのかしらね?」

次回は、『エピソード12 リアンちゃん、鉄刃に剣術を習う』です。

## エピソード12 リアンちゃん、鉄刃に剣術を習う

平次「オレがオマエらに剣道の修行、つけたる!!」

リアン・哀「ええ〜っ!!?」

平次「なんやねん、うれしくないんか？」

哀「き、気持ちは山々なんだけど・・・」

リアン「平次君と本気で戦ったら、アタシ達無事じゃ済まないよ・・・」

平次「アホやなあ、誰がオレ自身とやるて言っただけ？」

リアン・哀「は？」

平次「オレの知り合いに、沖田総司っていうんがあるん、知ってるやろ？」

リアン「う、うん・・・前に聞いた事があるけど・・・」

哀「京都泉心高校の沖田？」

平次「そや。その沖田がな、かつて織田信長御前試合の準決勝で、死闘の末に負けたヤツがおるって言うんや。オレもソイツには最近、剣道の大会で世話になってる。ソイツに稽古つけてもらおうと思うてな！」

リアン・哀「なんか・・・すごい不安なんだけど・・・」

リアンと哀は平次に連れられ、スゴ腕の剣術使いがいるという家までやって来た。

リアン「うわ〜、でっかい家ねえ・・・」

哀「まるで西洋のお城だわ・・・ホントにここにその人がいるの？」

平次「ああ、なんたってソイツはな・・・」

「鉄グルーブの御曹司・・・かつて、日本剣道選手大会において全試合でわずか13秒足らずの時間で相手を仕留め・・・その後継続

く織田信長御前試合においても、数々の強敵を下し優勝を納めた、天才少年剣士・・・」

「平次、いい加減その紹介は止めてくれねえか？」

大きな扉から、トンガリ頭の青年と、ポニーテールの女の子が出てきた。

平次「おお、お待たせ。」

哀「服部君、この人がそうなの？」

平次「そうや、オレの剣の同志、鉄刃やくろがね やいば！！」

鉄刃「よう、よろしくな！！」

リアン「ええっ！！あの鉄刃様なの！！」

リアンのキラキラした顔に、平次と哀は違和感を覚えた。

哀「ど、どうしたの、リアンちゃん！！」

リアン「だって鉄刃様といえば、英雄よ英雄！！アタシ、彼の大ファンなんだもん！！」

哀「（そういえば、コナンの時も左文字が好きだったっけ・・・）」

刃「あゝ、なんか照れるなあ・・・でもな、お嬢ちゃん。オレにはもう、決まった相手がいるんだ。」

哀「それって、後ろにいる女の子？」

刃「そ！オレの婚約者、峰さやかフィアンセか！！」

峰さやか「刃！3人も人がいる前で、そんな事言わないでよ！」

刃「なんだよ、ホントの事じゃねえかよ！！」

さやか「だ、だって・・・恥ずかしいんだもん・・・」

さやかはどんどん顔が赤くなっていた。

平次「オマエら、もう結婚の約束したんか！？」

刃「そ！来年18歳になったら、結婚すんだ！！オヤジ達も許してくれたしな！！」

さやか「うう・・・」

さやかは顔が真っ赤になっていた。

まさに、ユデダコだ。

刃「今オレ、すんげー幸せなんだ！さやかと一緒になれてな！」

刃とさやかが婚約したのは、ちょうど刃が学校に現れ、2人で一緒に火星へ冒険に行った後の事だった。

さやかの口から、「好きです」と告白されたのだ。むろん、刃も断る気はさらさらなかった。

3年前に旅立ったその日から、刃はさやかを選んでいたのだから。

刃「ま、こんなトコで立ち話もなんだから・・・家に入ろうぜ!!」

リアン「うわゝ、中も広いわね・・・」

刃「そろそろ着くぜ!」

しばらく歩いていた一行は、1つの部屋の前で止まった。

さやか「着いたわ、ここよ!」

刃とさやかが、大きな扉を開けた。

ギギイイ・・・

部屋の中には、大きな剣道場が広がっていた。

刃「調子はどうだ?」

刃は、茶髪でロングヘアの女の子に話しかけた。

「ぜんぜん相手にならないわ・・・弱すぎよ・・・」

刃「ソイツらが弱いんじゃないわ、オマエが強すぎるんだよ! 諸刃・

・・・」

哀「諸刃? って事は・・・」

刃「ああ、コイツがオレの妹、鉄諸刃だ!!」くろがね もろは

鉄諸刃「お兄ちゃん、この人達誰?」

刃「ああ、オレと剣の修行がしたいって、申し出てきたヤツらだよ・

・・・色黒のヤツは服部平次。オマエも知ってるだろ、諸刃!」

諸刃「ええ、確か、服部平次・・・沖田総司と戦った事もあるって・

・・・」

平次「そや。ほんでこの2人の子が、今日教えてもらいに来た、江戸川リアンちゃんと灰原哀ちゃんや!」



哀「よろしく！」

リアン「よろしくね、諸刃ちゃん。」

諸刃「よろしく！リアンちゃんと哀ちゃん。ところで、そっちのポニーテールの子・・・『江戸川』って事は、コナン君の親戚？」

哀「（何、この子？工藤君を馴れ馴れしく名前で呼んで・・・）」

哀は、なぜかムカムカしていた。

リアン「親戚も何も、アタシは双子の妹よ。」

諸刃「フーン。彼、彼女いないんでしょ？」

リアン「え、ええ、まあ・・・」

諸刃「私14歳だけど、コナン君フリーなら立候補しちゃおうかな？」

リアン「え！？」

ピキッ・・・

哀の心の中で、何かが切れた。

哀「ちよつと！！」

諸刃「あら、哀ちゃん。何？」

哀「あなた、江戸川君とつき合おうと思ってるのなら、私に勝つてからにしないさい！！」

諸刃「は？あなた、コナン君の何なのよ？」

哀「え、江戸川君の・・・ガールフレンドよ！！」

リアン「え！？（な、なんでえ・・・？）」

これには、さすがのリアンも驚いたようだ。

諸刃「じゃあ、コナン君をかけて、私と勝負する？哀ちゃん。」

哀「望むところよ！！」

哀と諸刃は、にらみ合っている。

刃「も、諸刃？」

さやか「あ、哀ちゃん？」

平次「おい、どないすんねん、工藤？」

平次が小声で、リアンに耳打ちする。

リアン「アタシ、知らない・・・」

かくして、灰原哀VS鉄諸刃の、女の戦いが始まった。

諸刃「ウフフ・・・コナン君を名字でしか呼べない人に、コナン君のガールフレンドになる資格はないわ!!」

哀「あなたこそ・・・江戸川君のガールフレンドには、私みたいな知的な子の方が似合うのよ!!」

平次「なーんか、妙な事になってんな・・・」

リアン「・・・」

諸刃「行くわよ!!」

哀「来なさい!!」

諸刃「ハッ!!」

ドン!!

諸刃は哀に向かってきた。

ビュ!!

哀「キャッ!!」

哀の竹刀が、バキッと折れた。

哀「し、竹刀が・・・」

諸刃「ただの竹刀も、気合いで振り抜けば刃と化すわ・・・そう、刃お兄ちゃんの木刀のようにね。これはすべて、刃お兄ちゃんとさやかお姉ちゃんに追いつくために身につけた技・・・」

哀「あわわわ・・・竹刀竹刀・・・」

諸刃「どう？ただ知的なだけでは、コナン君の彼女は務まらないのよ?」

哀「そんな事・・・ない・・・江戸川君は・・・」

諸刃「だったら、実戦で教えてあげるわ・・・」

その後も、諸刃の追撃は続いた。

哀は、しだいにキズだらけになっていく。

哀「ハア・・・ハア・・・」

諸刃「さあ、ケガをしないうちに、降参しなさい!!」

哀「イヤよ!江戸川君は・・・江戸川君は・・・誰にも渡さないんだからあ!!」

哀は諸刃に突っ込んでいくが、あっさり弾かれた。

哀「うう・・・(負けられない!ここで私が負けたら、工藤君が・・・工藤君がとられちゃう!!)」

諸刃「しかたないわね・・・」

諸刃は、竹刀を振り上げた。

諸刃「覚悟お!!」

諸刃は竹刀を振り下ろす。

哀は、目を閉じた。

ガッ!!

諸刃「な!?!」

哀「え?」

諸刃の竹刀を寸前で止めたのは、リアンだった。

リアン「そこまでよ・・・哀ちゃんはまだ動けないわ。ここからは、アタシが相手よ!!」

リアンが竹刀を振りかざした。

哀「リアンちゃん・・・」

諸刃「フツ、いいわ・・・行くわよ!!」

諸刃は勢いよく突っ込んできた。だが、リアンはあっさりそれを受け止める。

諸刃「ウソ・・・」

リアン「ハアアア・・・」

諸刃「ヤ、ヤバ・・・」

リアン「ハッ!!」

リアンの攻撃を、諸刃は飛び上がってかわした。

さやか「あ、あれは刃の横一文字!!」

刃「諸刃の負けだな・・・」

さやか「え?」

平次「見てみい・・・動きのとれん空中では、どんな攻撃も避けられへんのや!!」

諸刃「し、しまっ・・・」

リアン「ハアッ!!」

ドドドドドドド!!

諸刃「かはっ・・・」

ドサッ!!

諸刃は倒れ込んだ。

平次「ウ、ウソやる・・・? あれは沖田の得意技、五段突きやないか!!」

刃「五段じゃねえよ。ほら、見てみる・・・諸刃は眉間、喉、<sup>のど</sup>胸、両肩に加えて、両膝にも攻撃を受けている・・・あれはいわば、七段突きだ!!」

さやか「あ、あの一瞬で七ヶ所も・・・」

平次「どうやら、オマエの修行は、もう必要なさそうやな・・・」

刃「ああ・・・そうみたいだな・・・」

諸刃「強いわ、あなた・・・私の負けよ。勝負してくれて、ありがとう!!」

リアン「こちらこそ! また、戦いましょ!!」

リアンと諸刃は、握手を交わした。

そして、帰り道・・・

平次「・・・にしてもオマエ、ようあんな技できたなあ・・・」

リアン「ああ、あれね・・・沖田の五段突きがカッコよくて、アタシもあんなのやりたいって思って練習してたら、偶然できたのよ・・・」

平次「沖田以上の天才やな・・・」

リアン「あ、そうだ、哀ちゃん!」

哀「え？」

リアン「あの時、アタシの事守ろうとして、戦ってくれたんでしょ？」

哀「う、うん・・・」

リアン「うれしかったわ。ありがとう！」

哀「うん!!」

哀は、真っ赤に赤面した。

リアン「よし、今日はアタシが腕によりをかけて、ごちそう作ってあげるわ!!」

哀・平次「やったあ!!」

3人は笑いながら、阿笠邸へと帰った。

## エピソード12 リアンちゃん、鉄刃に剣術を習う（後書き）

リアン「いい修行になったわね。」

平次「それにしても、ホンマ強かったなあ・・・」

哀「服部君と戦っても、勝てるんじゃない？」

リアン「平次君、アタシと勝負しよっか？」

平次「え、遠慮しとくわ・・・」

次回は、「エピソード13 リアンちゃん、ビリヤードをする」です。

声の設定

鉄刃：山口勝平

峰さやか：三石琴乃

鉄諸刃：穴戸留美

イメージソング：名探偵コナン・迷宮の十字路クロスロードオリジナル・サウンドトラックより

### エピソード13 リアンちゃん、ピリヤードをする

服部平次は、阿笠邸で哀や阿笠と一緒に、リアンが作った夕食を食べていた。

平次「うまーっ！ー！リアンちゃん、これごっつう美味いで（うまいで）ー！！」

平次は、リアンの手料理にご満悦の様子。

リアン「ありがと、平次君！」

リアンもとてもうれしそうだ。

平次「さすが、中学の頃から自炊してただけあるわ！」

哀「ホント！」

リアン「だったら、どうしてアタシ達より年配の博士は自炊がヘタなのかしらね？」

リアンは阿笠をチラリと見た。

阿笠「ハ、ハハ・・・」

平次と哀も、顔を見合わせて苦笑いする。

それから数分たって、リアン達は夕食を食べ終えた。

平次「プハーツ、ごっそーさん！！」

平次は背伸びして、アクビをした。

リアン「じゃあ、哀ちゃん。アタシ、先におフロ入ってくるわ。」  
哀「うん。」

平次「あ、ちよっと待って！」

リアン「何？アタシと一緒にフロ入りたいの？」

リアンが平次を見つめた。

平次「えー！！イヤ・・・それはその・・・」

平次はドギマギする。

リアン「いいわ。今夜だけ・・・特別よ。」  
そう言うと、リアンは走っていった。

リアン「フウー・・・いい気持ちね・・・」

平次「そ、そやな・・・」

けっきょく、リアンと一緒にいる事となった平次。

平次はさつきから、目をそむけている。

リアン「ねえ、平次君。」

平次「は、はい！！な、何や？」

リアン「アタシのこの体見て、どう思う？」

平次「ど、どう思うって・・・女の子らしい体やなあって事ぐらいしか・・・」

リアン「クスクス・・・スケベね、平次君・・・」

平次「な・・・」

リアン「じゃ、アタシ先に上がるわ。」

ザパア！

平次「！！！！」

平次はリアンの体をマジマジと見つめてしまった。

平次「×　　　　ゝ！！！！」

平次は言葉にならない声を上げると、フロの中に沈んだ。

リアン「キャアア、平次君すっかりしてゝ！！」

リアンはバスローブを羽織ると、平次を引きずりながらやって来た。  
哀「ど、どうしたの服部君？」

リアン「アタシの裸を見て、鼻血出して失神しちゃった。」

哀「ア、アハハ・・・そう・・・」

それから哀もおフロを終わらせ、4人は就寝した。



そして翌朝

リアン「平次君、昨日はよく眠れた？」

平次「微妙やなあ。」

リアン「そう。」

哀「そういえばリアンちゃん、今日はずいぶんとオメカシしてるわね。」

哀は、リアンのドレス姿を見てそう言った。

平次「そういや、そやな。どないしたんや？」

リアン「今から、ビリヤードをしに行くのよ。」

哀「ビリヤードかあ・・・」

平次「オレらも行つてええか？」

リアン「いいわよ、一緒に行きましょう。」

ビリヤード場『グリーンマロン』

リアン、哀、平次は、ビリヤード場にやって来た。  
シュッ！

カンカンカン！

スポッ！

哀「お見事！！」

リアン「エヘッ。」

平次「それにしても、お客さん少ないなあ・・・」

リアン「支配人の蓮羅さん、『アメリカンフロンティア』ってバーのオーナーに法外な利子を迫られて、困ってるって話よ。」

その時、ガラの悪そうなヤツらが入ってきた。

「ケツ、相変わらずだな、蓮羅のヤツ。」

「まだ手放す気ねえのかよ。」

平次「なんや、アイツら？」

リアン「さっき言った、アメリカンフロンティアの従業員よ。ま、従業員っていうのは肩書きだけで、けっこう悪い事してるらしいけどね。」

「いつその事、ヤツを脅してこのビリヤード場を・・・」  
スコン！

「がっ！？」

男が振り向くと、リアンと哀がボールを持って立っていた。

リアン「うるさくて集中できないんだけど。」

哀「邪魔するんならヨソ行ってくれない？」

「な、なんだとこの小娘共・・・」

「まあ待て、そんなにカリカリすんな。」

「お、王道オーナー・・・」

アメリカンフロンティアのオーナー、王道企おうどうが男達たからの後ろから現れた。

王道企「フム・・・（なかなかカワイイお嬢ちゃん達だ・・・ニヤリ。）おい、その色黒！」

平次「オレか？」

王道「君、このお嬢ちゃん達の保護者か？」

平次「ああ、そうや。」

王道「君達が気に入った。ワシのバーで、ビリヤード勝負でもしないか？」

平次「ああ、ええで。」

王道「（ククク、かかったな・・・）」

『アメリカンフロンティア』

リアン達は王道に連れられ、彼の所有するバーにやって来た。

王道「今から君とビリヤード勝負をしたい。掛け金は千円からどうだ？」

平次「ああ、オッケーやで。ちょうど、こづかいもたんまりある。」

王道「よからう。ルールはナインボールだ。」

平次「9個の球を順番に落とすアレやな？」

王道「その通り。さあ、君から始めていいぞ。」

平次「ほな、遠慮なく。」

カン！

キュン！

手玉がポケットに近づく。

平次「あー！入るなあー！！」

スポッ！

平次「くそー！！」

王道「運が悪いな。」

シュッ！

スポッ！

9の球がポケットに入った。

平次「くつ、もう一回やー！！」

王道「よからう。(ニヤリ。)」

その後もゲームは続いたが、平次は次々に負けていった。

平次「なあ、1つ聞いてもええか？」

王道「なんだ？」

平次「なんでアンタ、あの店におつたんや？」

王道「あの店を買収するためだよ。」

平次「な、何！？」

王道「あの店はいいい金になる。だから法外な利子をふっかけて、さ

っさと買収しようと思ったのさ。」

平次「な、なんやと・・・」

平次の脳裏に、ビリヤード場に来る前にリアンが言っていた言葉がよぎった。

リアン『グリーンマロンはね、アタシが子供の頃から通ってる行きつけなんだ。アタシの思い出の場所なの・・・』

平次の頭に、怒りがこみ上げてきた。

王道「さあ、もう後がないぞ？」

平次「王道！！」

平次は、キューを王道に向けた。

平次「賭け率を上げる。負けた相手は、勝った相手のいう事を何でも聞く！！」

王道「ほう。それで、君の要求は何だね？」

平次「オレが勝ったら、もうあの店に手を出すな！！」

王道「フン、よかるう。その代わり、もしワシが勝った時は、そのお嬢ちゃん達をいただかせてもらおう。」

平次「な、何！？」

王道「なかなかカワイイからな。我がバーのメイドとして働かせようと思つてね。」

平次「くっ・・・ええやろ。」

そして、平次と王道の戦いが始まった。

平次は相変わらず、うまくいかない。

対して王道は、ワザと平次にプレッシャーを与えるようなプレーを見せている。

平次「くそ・・・」

王道「ホラホラ、どうした。そんなんじゃ、彼女達を守れんぞ？」

平次「う、うるさい！！」

平次は汗をかいていた。

王道「ククク、お嬢ちゃん達はいただきだな。」

平次「ス、スマン・・・2人とも・・・」

王道「さて、これでトドメだ・・・」

リアン「待ちなさい!!」

リアンと哀が、球を持って立っている。

王道「なんだ？お嬢ちゃん達は掛け金なんだ。掛け金が動いちゃイカんだろ？」

哀「そう言つてられるのも、今のうちよ。」

リアン「あなたは、イカサマをしているわ!!」

平次「イ、イカサマ!？」

王道「バカバカしい。どこに証拠が・・・」

リアン「ここにあるわよ!」

そう言つと、リアンは球を空高く放り投げた。

ガシャン!!

客の1人が、壊れた球を拾い上げる。

「な、なんだこの球!?磁石が入ってるぞ!!」

王道「うっ!!」

哀「そう、それも強力なネオジム磁石よ。」

平次「ど、どういう事や？」

リアン「つまり王道さんは、手玉や球、ポケットに磁石を仕込んでおいたのよ。それも、平次君の手玉には球と反発するように細工してね。そして、ポケットには場所ごとに球を吸引する磁石を仕込み、平次君の手玉を誘導したのよ。」

王道「チッ、バレたからには無事に帰さん!オマエ達、ソイツらを捕まえる!!」

リアン「そうはさせないわ!!」

リアンはキューで球を弾き、王道の手下達を気絶させた。

王道「な、なんてコントロールだ・・・」

リアン「何てったつて、ビリヤードは小学校の頃からやってた・・・」

王道「小学校の頃？」

リアン「いつけない、今も小学生だったわ。テヘッ」

リアンの笑顔に、平次や王道達は見惚れた。

王道「天然ボケに、その絶世の笑顔・・・ますますメイドにふさわしい・・・やれー!!」

手下達が、いつせいに襲いかかってきた。

平次「そうはさせへん!」

平次がリアンの前に立ちふさがった。

平次「この子には、指一本触れさせへん!!」

平次は、片っ端から男達をキューでなぎ倒した。

そして、王道だけが1人残された。

王道「!!!」

平次が、キューを王道に突きつけた。

平次「チェックメイトやな?」

王道「く、くそう・・・」

こうして、王道を始めアメリカンフロンティアの従業員達は逮捕された。

### エピソード13 リアンちゃん、ビリヤードをする（後書き）

リアン「まったく、最低な人達ね。」

哀「ホントね、イカサマして金儲けをしていたなんて・・・」

リアン「平次君も平次君よ！アタシ達を掛け金にするなんて・・・」  
哀「どうやら、お仕置きが必要みたいね・・・」

次回は、「エピソード14 リアンちゃん、ボーリングに行く」です。

## エピソード14 リアンちゃん、ボーリングに行く

阿笠邸の地下室で、1人の少女が何かをやっていた。  
トポトポ・・・

シューウウウ・・・

ボウン！！

リアン「キャア！！ゴホゴホ・・・」

リアンは、試験管からビーカーに何かを移した。

リアン「でーきた！完璧ね・・・ウフフフ・・・」

地下室に、彼女の不適な笑いがこだました。

江古田高校

青子「快斗ー！リアンちゃんから招待状が来たの！」

快斗「へー、それでどこに行くって？」

青子「米花町のボーリング場だつて。」

紅子「私も、同じ招待状をもらったわ。」

快斗「そっぴや、オレもだ・・・よし、夕方に行ってみつかー！」

米花ボーリング



快斗、青子、紅子がボーリング場に着くと、リアン達や少年探偵団はすでに着いていた。

さらに、刃達の姿もある。

むろん、ムサシ達や鬼丸もいる。

リアン「待ってたよ、快斗さん達！」

快斗「こんにちは、リアンちゃん！」

哀「江戸川リアン貸し切り、死のボーリング大会へようこそいらっしやいました。」

青子「し、死のボーリング大会!？」

平次「そや。今からボーリングをするんやけど、各ゲームで最下位になった者には、リアンちゃん特製ジュースを飲んだり、特製料理を食べる罰ゲームが待ってるんや。」

紅子「それで、死のボーリングってワケね。おもしろいじゃない。」

青子「お、おもしろいつて紅子ちゃん・・・」

リアン「最下位になった人から、ゲーム脱落となります。そして最後まで無事に生き残った上位3人には、アタシからのとっておきのプレゼントを差し上げます!!」

快斗「なになに、プレゼントって何ー？」

リアン「それは後のお楽しみです。それじゃあ、皆さんクジを引いてください。」

クジを引いた結果、

一番 灰原哀

二番 江戸川リアン

三番 中森青子

四番 阿笠博士

五番 吉田歩美

六番 服部平次

七番 小泉紅子

八番 小嶋元太

九番 鉄刃

十番 黒羽快斗

十一番 鉄諸刃

十二番 円谷光彦

十三番 峰さやか

十四番 鬼丸猛

十五番 宮本ムサシ

十六番 佐々木小次郎

十七番 柳生十兵衛

という順番になった。

リアン「それでは皆さん、準備はオツケー？ア―ユーレディー・・・  
ゴー！！！！」

哀・歩美・光彦・元太・平次・阿笠・快斗・青子・紅子・刃・諸刃・  
さやか・鬼丸・ムサシ・小次郎・十兵衛「イエーッ！！！！」

まず最初は、哀だ。

哀「灰原哀、行きまーす！えいつ！！」

哀は勢いよくボールを投げた。

ゴロゴロゴロ・・・

ドカーン！！

7本のピンが倒れた。

哀「やったあー！！」

リアン「次はアタシの番ね。」

リアンは颯爽と身構える。

リアン「ハアッ！！」

シュルルル・・・

ドッカーン！！！！

10本のピンがすべて吹っ飛んだ。

リアン「ま、こんなモンよ。」

歩美「リアンちゃんスゴイ！」

青子「今度は青子の番だよー！」

青子は思いつきり投げた。

ガコン！

ボールは溝にハマった。

快斗「ハハハッ、ガーターでやんの、青子！」

青子「ムスッ・・・」

阿笠「もつと優しく投げるのじゃよ、青子君。こつやって、そーつと・・・」

コロコロコロ・・・

ドカーン！！

結果、6本倒れた。

阿笠「ほらな。」

青子「なるほど・・・」

青子はメモした。

その後、歩美は3本、平次は8本、紅子は6本、元太は4本、刃は全部、快斗は9本、諸刃は7本、光彦は2本、さやか、鬼丸は5本、ムサシはガーター、小次郎は1本、十兵衛は6本倒した。

その結果から予想できたと思うが、ムサシが最初の脱落者となった。

ムサシ「年には勝てん・・・」

リアン「じゃあ、ムサシさんこれ飲んでください。」

ムサシ「う・・・うむ。」

ムサシは覚悟を決め、それを一口飲んだ。

ゴクゴク・・・

ムサシ「ゲボアー！！」

ドサッ・・・

ムサシは倒れた。

宮本ムサシ - 脱落。

ムサシの無惨な姿を見た哀達は恐怖を感じ、絶対に最下位にはなるまいと必死になった（イヤ、まだムサシは死んでないのだが・・・）。

しかし、世の中そんなに甘くはないのである。  
続いての被害者は、小嶋元太となった。

元太「ぶへえ!!」

いまだかつて一度もお腹を壊した事のない元太さえも、あえなく脱落した。

続いて、佐々木小次郎が犠牲者となった。

小次郎「ぶほあ!!」

佐々木小次郎、死す（イヤ、だから死んでませんよ）。

続いて、吉田歩美。

歩美「これ、辛いね・・・」

どうやら、歩美はまだマシなものに当たったようだ。

小嶋元太、佐々木小次郎、吉田歩美・脱落。

十兵衛「おお、これはなかなか美味でござるな。」

中には、もろ普通に何事もなくワサビ入りチョコレートを食べる人もいた。

光彦「リアンちゃん、灰原さん・・・後は任せました・・・」

円谷光彦、リアンと哀に遺言を残す。

鬼丸「刃・・・オマエとまた、勝負がしたかった・・・」

鬼丸、刃に遺言を残す。

しつこいようだが、両名とも死んでません。

さやか「わーい、ケーキだ。おいしー」

中には良いものもあるようだ。

阿笠「リアン君、肉料理ありがとう。」

阿笠には、罰ゲームもまったく応えず。

柳生十兵衛、円谷光彦、鬼丸猛、峰さやか、阿笠博士・脱落。

諸刃「あ、これいけるわね。」

諸刃は、普通に七味たっぷりのおいしそうに食べている。

紅子「うう・・・これ辛い・・・」

紅子には、激辛カレーは多少応えたらしい。

青子「辛・・・あ、これ、新発見の味かも?」

青子は、手料理のレパートリーが増えてうれしそうだ。

刃「おいしいな、これ。」

野生育ちの刃には、猛毒でさえおいしいのだろうか。

鉄諸刃、小泉紅子、中森青子、鉄刃・脱落。

そして、最後に灰原哀、江戸川リアン、服部平次、黒羽快斗が残った。

リアン「（主催者のアタシが、負けるワケにはいかなからね・・・）」

哀「（この勝負、負けれない！！）」

平次「（最後に笑うんは、このオレや。）」

快斗「（絶対勝って、リアンちゃんからご褒美をもらうんだ）」

リアン「それでは最後の勝負！！準備はオツケー？」

哀・平次・快斗「おう！！！！」

最終決戦が始まった。

哀「えいつ！！」

リアン「シツ！！」

平次「たああ！！」

快斗「おりゃあ！！」

ストライクが続き、4人とも一步も譲らない展開だ。

そして、ついに最後の投球となった。

現在の得点は、

灰原哀 - 280

江戸川リアン - 280

服部平次 - 280

黒羽快斗 - 280

4人とも同点である。

ボーリングゲームの最大得点は300点であるため、この最後の投球ですべてが決まるのだ（すべてのボーリング場がそうであるのかは定かではない）。

4人とも、汗をたくさんかいている。

最初は灰原哀だ。

哀「えいつ！！」

哀は9本倒した。

哀「やったあ、後1本だわ!!」

次はリアン。

リアン「あ、しまった!!」

リアンはガーターになってしまった。

三番手の平次。

平次「くっ!!」

平次は5本だった。

最後の快斗。

快斗「よっしゃ!!」

快斗はストライクを出した。

この時点で、リアンの負けが決まってしまった。

リアン「アタシの負けね・・・いさぎよくこれを飲むわ。」

リアンは青汁を飲み干した。

リアン「プハーツ、おいしかった。」

江戸川リアン - 脱落。

2回目の投球だ。

哀「やった、スぺアだわ!!」

平次「ウソ、ガーターや!!」

快斗「よっしゃ!!またストライク!!!!」

哀はスぺアだったため、もう一回投げ、9本倒した。

最終得点の発表

灰原哀 - 298

服部平次 - 285

黒羽快斗 - 300

黒羽快斗の優勝となった。

快斗「やったー!!優勝だあ!!」

リアン「おめでとう、快斗君。」

快斗「リアンちゃん、早くプレゼントちょうだい!!」

リアン「はい、これよ!開けてみて!!」

快斗「うん」

パカッ・・・

快斗「ギャッッ！！！」

ドサッ・・・

快斗は倒れた。

哀「リ、リアンちゃん、何を入れてたの？」

リアン「オ・サ・カ・ナ・よ。青子さんに、快斗君が罰ゲームになったら、絶対に魚を出してほしいって言われたのよ。彼の魚嫌いを、今度こそ直すためだつてね。」

平次「ハハハッ、黒羽も災難やなあ・・・」

リアン「次は、2位の哀ちゃんね。」

チュッ・・・

リアンは、哀の頬にキスをした。

哀「あ・・・」

リアン「ウフフ」

哀「リアンちゃん・・・ありがと・・・」

哀は、顔を赤らめた。

平次「あのー、オレは・・・？」

リアン「平次君には、これよ。」

リアンは平次に、3枚の色紙を渡した。

リアン「ムサシさん達に頼んで、サインをしてもらっておいたの。どうかなあ？」

平次「サンキュ！リアンちゃん。オレの一生の宝物にするわー！」

その後、リアン達はみんなを起こし、みんな満足して家に帰った。余談ではあるがその後、1人の少年が魚の夢にうなされ続けたという話は、ここだけの・・・ナ・イ・シヨ

#### エピソード14 リアンちゃん、ボーリングに行く（後書き）

リアン「楽しかったわね、ボーリング大会！」

哀「1人だけスツゴクカワイそうな人がいたけどね。」

リアン「気にしない、気にしない」

哀「鬼ね、あなた・・・」

リアン「快斗君は、いったい何を期待してたのかしらね？」

哀「さしずめ、あなたのキスだったのかもよ？」

リアン「それはゴメンだわね。」

次回は、『エピソード15 リアンちゃん、三重で忍びになる』です。



## エピソード15 リアンちゃん、三重で忍びになる（前書き）

今回の章は、少年サンデーに連載中の『あいこら』のキャラクターとのコラボレーションです。

## エピソード15 リアンちゃん、三重で忍びになる

哀「ふああ・・・」

哀が眠い目をこすってリビングに降りてくると、リアンがキッチンで朝食を作っていた。

リアン「あ、哀ちゃん！おはよ！」

哀「おはよう。で、どうしてこんな朝早くから起きてるの？どこかに行くの？」

リアン「ああ、ちょっと三重にね・・・」

哀「み、三重！？」

リアン「そ、三重。」

哀「あなた今何時かわかってる？朝の6時よ！！」

リアン「だから、博士の朝食先に作っておくんじゃない。アタシも出なきゃいけないし・・・」

哀「はあ！？もう出るの！？」

リアン「うん、朝7時45分の新幹線で行くのよ。じゃ、後よろしくね・・・」

哀「待つて、私も行く！！」

リアン「へ？」

哀「私もあなたについていく！！」

リアン「あのねえ・・・」

哀「ダメなの？」

リアン「う・・・」

リアンは少し考えたが、振り向いた。

リアン「いいわ、ただし・・・」

哀「た、ただし・・・？」

リアン「命の保証はできないわよ。」

哀「えええゝ！？い、命の保証ゝ！！？」

リアン「うん。」

哀「うんって・・・あなた、何しに行く気なのよ？」  
リアン「えーっとね・・・忍者に会いに行くの。」  
哀「に、忍者・・・」

1 時間後、阿笠が起きてきた。

阿笠「ん？何じゃ、誰もおらんのか？」

そうつぶやいた阿笠は、テーブルにある置き手紙に目をやった。

『哀ちゃんと2人で三重に行ってきます。明日には戻るので、自由  
にしてください。 リアン』

阿笠「ほう、こりゃあい。規制されてた肉がやつと食える。」

阿笠は、さっそく朝食を食べ、料理について考え始めた。

しかし、彼は知らなかった。

リアンが、ある物を仕掛けている事に・・・

三重

リアンと哀は、三重へとやって来た。

リアン「着いたわ、三重よ！」

哀「新幹線に乗ったのなんて、久しぶりだね。乗り換え続きで、疲れただけ……」

リアン「哀ちゃんは来なくても良かったのに……」

哀「そういうワケにはいかないでしょ。あなた1人を行かせるワケにはいかないわよ。」

リアン「お目付役がいなくなったら、博士何するかわかったもんじやないわよ？」

哀「それはそうだけど……」

リアン「ま、その分帰ったらたつぷり……ね。」

リアンは、ニヤリとした。

哀「リ、リアンちゃん怖いんですけど……」

リアン「さて、そろそろ行きましょ。葉隠町の山に行けば、1人が2人いるはずだね。」

哀「そ、そうね……」

## 葉隠町・葉隠山

リアン「ここが葉隠山……」

哀「なんか、怖いね……」

リアン「まあ、ここは忍者の里だからね……さあ、探しましょ……」

その時、リアンの足が何かに引つ掛かった。  
ビシッ！

リアン「あ！」

リアン・哀「キャアアア！」

リアンと哀は、網に絡め取られ、木につるされてしまった。

リアン「なっ・・・」

哀「何なの、これ？」

「あら、誰かが網にかかったらしいわね。」

リアン・哀「！！」

木の影から、忍者服を着た少女が現れた。

「あらあら・・・よく見たら、けっこうカワイイ子達じゃない。」

哀「ね、ねえリアンちゃん・・・イヤな予感がしない・・・？」

リアン「う、うん、哀ちゃん・・・これってヤバいんじゃない？」

「リアンちゃんと哀ちゃんっていうんだ。いい名前ね・・・」

リアン・哀「う・・・」

リアンと哀は、スゴくイヤな予感がした。

『リアンちゃんと哀ちゃん・・・2人とも、とてもおいしそうね・・・』

リアン・哀「ま、まさか・・・」

『ちょうどおながが空いてたのよ。釜ゆでになってもらいましょ。』

ブライン・・・

リアン「イヤだ、イヤだっ！！」

哀「釜ゆでになるのなんかイヤだよっ！！」

ジタバタ・・・

『ウフフ・・・おいしくいただきかせてもらっわね。』

リアン・哀「誰か助けてっ！！！！」

「（2人を降ろしてあげよう。）・・・ん？」

リアンと哀は、抱き合ってガタガタとふるえている。

リアン・哀「イヤだ・・・釜ゆでなんかイヤだよー!!」

ズテッ!!

少女はこけた。

「んなワケないでしょ、バカ!どうして私が女の子2人を釜ゆでに  
しなきゃいけないのよー!!」

哀「だ、だって・・・忍者はどんなものでも料理して食べちゃうん  
でしょ?」

リアン「だから・・・アタシ達も食べられちゃうんじゃないかなっ  
て・・・」

「・・・（ど、どこでそんなウワサを聞いてきたの・・・）とり  
あえず、今からあなたを降ろしてあげるわ。」

リアン・哀「え?私達を食べるんじゃないの?」

「だからちがうってば!!」

少女の家に案内されたリアンと哀は、お茶をこちそうになっていた。

「私が入れた緑茶だけど、どうぞ。」

リアン・哀「あ、これおいしい。」

「そう、よかった。」

「おお、桐乃。お客さんかね?」

「あ、おじい様。」

リアン・哀「おじい様?」

鳳桐乃「そう！私のおじい様で、秋水流忍術開祖の後継者よ。ちなみに私は孫娘の鳳桐乃。よろしくね。」

「桐乃の祖父です。今日はどちらから来なさったので？」

哀「東京の米花町から来ました！」

桐乃「へへ、東京から・・・」

リアン「アタシ、江戸川リアンと言います！こっちは灰原哀。」

桐乃「そうですか。遠いところをよくぞおいでくださいました。まあ、こんな田舎町で何のおもてなしもできませんが、ごゆっくりおくつろぎください。」

そう言つと、老人は奥へと消えていった。

哀「なんか、妙に貫禄がある人ですね。」

桐乃「ええ、私の忍術の師でもあるからね。ところで、あなた達は何の用でこの三重に？」

リアン「この辺りに忍者がいるっていうから、少しその忍術を教えてもらいたいなーって・・・」

桐乃「あら、だったら私が教えてあげてもいいよ。」

リアン「本当ですか？ありがとうございます！」

桐乃「ええ。カラオケで私に勝てたらね・・・」

ジャンボカラオケ広場・三重店（本当にあるのかは定かではない。）

桐乃「ここで私とカラオケ対決して、勝つ事ができたら忍術を少しだけ教えてあげるわ。」

リアン「いいですよ。じゃあ、アタシからいきますね。」

桐乃「ええ、どうぞ。」

桐乃は歌が上手なので、この勝負には自信があった。

しかし、彼女はリアンの歌声に驚かされる事になるのだった。

リアン「勇気と希望と君の愛を胸にきくらく未来とずっと夢を見てどんな時も笑顔絶やさずいよう 恐れず次の扉を開けば不安によく似た真実の光が心にあふれる100もの扉」

桐乃「なっ・・・」

桐乃はリアンの歌声に驚いた。

『出ました！100点！！』

桐乃「ウ、ウソ！？」

リアン「へっへ」

哀「私達、この前ジャンカラグループが主催したカラオケ大会で見事優勝したペアなんですよ！」

桐乃「え、じゃああの時のペアがあなた達なの？ボウシかぶってたから、強く印象に残ってたけど・・・」

リアン「どうしました？怖じ気づきましたか？」

桐乃「くっ・・・まだ勝負はこれからよ！！」

その後も桐乃はリアンと勝負を続けたが、けっきょく完敗してしまっ

た。桐乃「ま、負けた・・・ハチベエ君にも負けた事のないこの私が、小学生の女の子に負けた・・・ガク・・・」

リアン「やったー！勝ったー！！」

桐乃「まあ、勝負は勝負だからね。簡単な忍術を、いくつか教えてあげるわ！」

リアン・哀「ありがとうございます！」

ところ変わって、鳳家



桐乃「じゃあ、まずは分身の術からね。これが一番簡単な術なのよ。忍法、分身の術!!」

バババババ!!

リアン「スゴい!!」

桐乃「次はあなたがやってみて!」

リアン「はい!忍法、分身の術!!」

バババババ!!

桐乃「お見事!次は敵を引っ捕らえる術よ!忍法、縄縛りの術!!」

桐乃が出した縄が、練習用の人形に巻き付いた。

桐乃「次はリアンちゃんの番よ。」

リアン「はい!忍法、縄縛りの術!!」

リアンの出した縄は、哀に巻き付いた。

哀「うえ〜ん、なんで私を縛るのよ!!」

桐乃「リアンちゃん、やるわね・・・」

桐乃はそう言くと、哀の縄をほどいた。

桐乃「次は、敵に捕まってしまった時の対処法よ。」

そう言くと、桐乃は口笛を吹いた。

ピュ〜!

すると、忍者が3人現れた。

「忍法、縄縛りの術!!」

3人が叫ぶと、縄がリアン、哀、桐乃を個別に縛った。

桐乃「今度は、この縄から脱出する術よ。忍法、縄抜けの術!!」

桐乃がそう叫んだ瞬間、桐乃は縄から抜けた。

桐乃「さあ、今度はあなた達の番よ。」

リアン・哀「は、はい・・・」

桐乃「速く縄から抜けないと、今度こそ釜ゆでにしちゃうわよお〜?」

リアン・哀「イヤッッ！！！」

桐乃「じよ、冗談だつてばぁ・・・」

リアン「じゃあ、アタシからいきます。忍法、縄抜けの術！！」

リアンが叫ぶと、リアンは縄からスルリと抜けた。

桐乃「お見事！」

リアン「今度は哀ちゃんよ、がんばって！」

哀「う、うん・・・あのさ、抜けられないと食べられちゃうって事はないよね？」

リアン・桐乃「だから冗談だつて言つたでしょ！！」

リアンと桐乃の声がハモった。

哀「安心した・・・忍法、縄抜けの術！！」

哀は少し時間がかかったが、ほどなく縄から脱出した。

桐乃「お見事、よくやったわ！！」

そして、その後・・・

桐乃「リアンちゃん、哀ちゃん。おめでと。あなた達、忍者として素質があるわ！」

リアン・哀「ありがとうございます！」

桐乃「さっきの縄抜けの術は、縄で縛られた時なんかに使うといいわ。ただし、ガムテープとか手錠からは抜けられないから、気をつけてね。」

リアン・哀「はい。じゃあ、私達帰ります！」

桐乃「待って。どうせだつたら、空の景色を見ながら帰りたくない？」

リアン・哀「は、はい。」

桐乃「じゃ、私が米花町まで送つてあげる！」

リアンと哀は桐乃の背中に乗り、空の旅を満喫しながら米花町へと

帰った。

## 阿笠邸の近く

桐乃「じゃあ、この辺りで降ろすわね。また会いたくなったら、いつでも来てね！」

リアン・哀「さよならー！桐乃さん！」

桐乃「じゃあ、またねー！」

桐乃は飛び去っていった。

哀「いい人だったね。」

リアン「そうね。さーて、後は・・・」

リアンはニヤリと笑った。

哀「こ、怖い・・・」

リアン「ただいまー！！」

阿笠「ああ、早かったな。明日帰るんじゃないかったか？」

哀「知り合った人に送ってもらったんです。ところで、博士・・・」

リアン「今日の昼ごはんは何を食べたの？」

阿笠「ファミレスでステーキ定食を・・・」

哀「じゃあ・・・」

リアン「あとしばらく肉料理はなしね。」

阿笠「は、はい・・・」

阿笠はその後、リアンと哀の監視によって、しばらく肉料理はお預けになった。

哀れ、阿笠博士の肉料理の夢は、わずか1日でついていたのだった。

## エピソード15 リアンちゃん、三重で忍びになる（後書き）

哀「忍者に会えてよかったね。」

リアン「うん、いろいろな忍術も習えたしね。」

哀「それにしても博士・・・私達がちゃんと監視してないと、何するかわからないわね。」

リアン「お昼に食べたステーキ定食、1280円はしたそうよ。」

哀「1280円！！私とリアンちゃんがやつの事でやりくりしてるのに！！！」

リアン「博士には、しばらく肉料理ガマンしてもらわないとね。」

平次「博士も災難やなー。そっぴやリアンちゃん、なんか手紙が来てたで。」

リアン「あら平次君、まだいたの？」

哀「あら、ホントだわ。げ、芸能プロダクションから？」

リアン「なんか、イヤな予感がするんだけどなあ・・・」

次回は、「エピソード16 リアンちゃん、アイドルになる!？」です。

## エピソード16 リアンちゃん、アイドルになる！？

今日は帝丹小学校の一学期終業式。

早々と学校が終わり、リアンは阿笠邸に帰ってきた。

リアン「ああ、疲れた・・・ん？なんか、いろいろ入ってるわね・・・」

郵便受けからいろいろ取り出したリアンは、その中にある一枚の手紙に目がいった。

リアン「『江戸川リアン様』って・・・アタシ宛？」

手紙の差出人は、『小雨エンタープライズ』という芸能プロダクションからだった。

リアン「えっと、何々・・・」

『拝啓 江戸川リアン様

私は、小雨エンタープライズ社長の小雨丈一郎と申します。

先日、ジャンカラグループ主催のカラオケ大会であなた様のご活躍を見て、ぜひとも我が芸能プロダクションに加入いただけたらと思っております。

つきましては、来週の金曜日に当社ビルの77階で、あなた様の面接を行いたいと思います。

引き受けてくださるのであれば、下記のメールアドレスにご連絡ください。

お待ちしております・・・

敬具

小雨エンタープライズ社長 小雨丈一郎

住所 南杯戸町7丁目213-1

アドレス k o s a m e . m . c . 3 7 6 5 . 2 1 8 9 @ d o c o

mo.ne.jp」

リアンはしばらく手紙を見つめていたが、ニコツとほえんだ。

リアン「ちょうど夏休みに入るし、受けてみようかしら・・・」

リアンはそう思い、メールを打った。

するとその数分後すぐに返事が来て、来週の金曜日に行く事となった。

そして、当日

リアンは精一杯のおめかしをして、南杯戸町の小雨エンタープライズ・ビル前にやって来た。

リアン「どうして、面接の時間をこんな夜中にしたのかしら・・・」

そう、リアンが指定された時間は、夜中の0時だったのだ。

当然の事ながら、哀や阿笠、泊まっている平次はすでに阿笠邸で寝ていた。

リアン「ま、いっか・・・そのために眠気覚ましのコーヒーを飲んできたワケだし・・・」

リアンはそう言うと、ビルに足を踏み入れた。

小雨丈一郎

「お待ちしております、江戸川リアン様・・・」

リアン「よろしく願います。」

小雨「それでは、今から面接を始めましょう。」

リアン「はい。」

小雨「まずは、グラビアの撮影から始めよう。さあ、やるよ。」

リアンは、小雨が用意した服を着て、撮影を始めた。  
まずはドレスからだ。

パシャ！

続いて、セーラー服、ウエスタンガール、水着、果ては忍者服と次々に着がえた。

パシャ！

パシャ！

パシャ！

しばらく撮り続けて、ようやく撮影は終わった。

小雨「はい、撮影終了。」

リアン「フウ・・・疲れました・・・」

小雨「じゃあ、私は写真をまとめてくるから、ジュースでも飲んで待っていてくれ。」

リアン「はい。」

その後、リアンは2時間近く小雨を待っていたが、いつこうに彼は戻ってこない。

リアン「遅いわね、小雨さん・・・」

そんな事を言いながらジュースを飲んでいると、面接室のドアが開いた。

リアン「あ、小雨さん！」

小雨は黙っている。

リアン「小雨さん？」

次の瞬間、小雨はポケットからハンカチを取り出した。

リアン「ま、まさか・・・」

小雨はハンカチに何かを染み込ませた。

リアン「（ヤ、ヤバイ！！逃げなきゃ・・・）」

リアンは逃げ出そうとしたが、素速く体をつかまれてしまった。



リアン「あ・・・うつ!!」

リアンはハンカチで口を塞がれた。

リアン「んうう・・・（ク、クロロホル・・・ム・・・）」

リアンはバタリと倒れ込んだ。

リアン「ん・・・」

リアンがようやく目を覚ますと、手足がロープで縛られ、ソファーに寝かされていた。

リアン「!!うぐ、うぐぐ・・・!!ダメだわ、動けない・・・」

小雨「目が覚めたか？」

リアン「!!」

リアンが振り向くと、小雨がそこに立っていた。

リアン「こ、小雨さん!この縄ほどいてくださいよ!何するつもりなんですか!!」

小雨「フフフ・・・ハッハッハッ!!私が小雨か・・・本物だと思っっているのか？」

リアン「ま、まさか・・・偽者!？」

「そうだよ、私は小雨ではない・・・ここに侵入した強盗さ・・・」

リアン「ご、強盗・・・!!小雨さんはどこの!？」

「私は金目当てでここに忍び込んだのだが、その小雨とかいうヤツに顔を見られてね・・・少しの間倉庫で眠ってもらっているよ・・・ところで・・・」

男はリアンを見た。

リアン「な、なんですか？」

「こんな所に夜中にいるという事は、相当の売れっ子アイドルなんだろう？」

リアン「イ、イヤ・・・まだアタシは駆け出しの・・・」

「フン、だまされないぞ。オマエはかなり稼いでいると見た。その

おこぼれ、オレにも少し分けてもらっぞ・・・」

リアン「ヤ、ヤダぁ・・・だ、誰かぁっ!!」

「黙っている。」

男はそう言つと、リアンの口にガムテープを貼りつけた。

リアン「んゝ、んゝ!!」

男はリアンを抱きかかえた。

「さあ、しばらくの間オレと一緒に来てもらっぞ・・・」

男はニヤリと笑みを浮かべる。

リアンはガタガタとふるえていた。

リアン「（だ、誰か助けてえゝ!!）」

「そこまでや!!」

「な、何!？」

リアン「（え?）」

2人が振り向いた先には、服部平次が立っていた。

リアン「（へ、平次君・・・!!）」

平次「その子、放してもらおうか?」

「フン、そうはいくかよ・・・」

男は拳銃をリアンに突きつけた。

リアン「う!!」

平次「くっ・・・」

平次は後ずさった。

「いいか?追つてくるなよ!!」

男はリアンを抱え、外に飛び出した。

「!!」

男が飛び出した先には、哀が待ちかまえていた。

パシュ!

プスッ!

男は倒れ込んだ。

その後、哀と平次が通報した警察が駆けつけ、男は逮捕された。  
そして小雨丈一郎も、倉庫の中から無事に助け出されたのだった。

哀「まったく・・・何かしに行くのなら私達にも一声かけてよね！」

平次「そやで、リアンちゃん。オレらが気づかんかったら、あのまま連れ去られてたかもしれないんやからな！」

リアン「ごめんなさい・・・」

小雨「まあ、今回はここまでだけど、また今度手紙を出すから、今度はお友達と一緒においで！」

リアン「ありがとうございます！」

リアンは哀、平次と一緒に阿笠邸に帰った。

そして、リアンはアイドルへの第一歩を無事踏み出したのだった。

## エピソード16 リアンちゃん、アイドルになる！？（後書き）

哀「リアンちゃん、アイドルを目指すの？」

リアン「もっちょろん！」

平次「元の体に戻る気は？」

リアン「今のトコ、ありませーん！」

平次「ハアア・・・」

哀「それより、これ何？」

平次「麻雀の牌みたいやな・・・」

哀「でも、誰がこんな物を使って・・・」

リアン「はい、アタシです！」

平次「何いゝっ！？リアンちゃんが麻雀ゝ！！？」

リアン「そうよ！」

哀「ああ・・・どんどんリアンちゃんが壊れていく・・・」

今回は、『エピソード17 リアンちゃん、麻雀を教わる』です。

エピソード17 リアンちゃん、麻雀を教わる（前書き）

作者は麻雀の牌がうまく書けないため、記号やアルファベット、漢字で牌を書いています。

牌の記号・アルファベット・漢字は以下の通りです。これ以降も出す予定ですので、一応覚えていてください。

萬子 わんず

筒子  
びんす  
『一』 イーワン  
『二』 リャンワン  
『三』 サンワン  
『四』 スーワン  
『五』 ウーワン  
『六』 ローワン  
『七』 チーワン  
『八』 パーワン  
『九』 チューワン

(イーピン) (リヤンピン) (サンピン)  
(スーピン) (ウーピン)

(ローピン)      □  
(スーピン)      □  
(ウーピン)      □  
(チャーピン)      □  
(チューピン)      □

索子 そうず

[illegible]

風牌  
ふおんぱい  
東  
ト  
西  
シヤ  
南  
ナン  
北  
ペイ

東 トン  
さんげんばい  
三元牌  
ハク 白  
ハツ 發  
チュン 中  
ナン 南  
ペイ 北

さんげんぱい  
三元牌

白 (ハク)  
發 (ハツ)  
中 (チュン)

西<sup>シヤ</sup>  
南<sup>ナン</sup>  
北<sup>ペイ</sup>

北↑

北↑

リヤソウ    サンソウ  
 I    I  
 チューソウ    山  
 —    I  
 —    I  
 —    H  
 —    I  
 —    I  
 —    I  
 —    チーソウ  
 —    パーソ

## エピソード17 リアンちゃん、麻雀を教わる

服部平次は雀荘で、大阪から呼んだ同級生達と麻雀を打っていた。

雀荘『杯戸』

平次「ウーン・・・（ここはやっぱり）（リャンピン）『切りか？イヤ待て、それやったらフリテンになってまう・・・』（イーピン）『やと出目がほとんどないし・・・』」

ヒョコ！

ピン！

パタ。

『（ウーピン）』の牌が倒れた。

平次「コラ、哀ちゃん！！またオレの牌を勝手に！！」  
バン！

平次「クソッ、見えてもうたもんは切るしかないな・・・」

古谷「つたく、女の子なんか帰らせるや・・・シラケてまうで・・・」

新野「ええやないか！今日は服部調子ええし・・・ハンデやハンデ・・・」

パン！

哀「ロン！！」

新野「え？」

平次「チ、清一色一盃口ドラ（チンイツイーペーコードドラ）・・・ば、倍満や！！」

哀「やったね、服部君！！」

平次「おっしゃ、1人勝ち」

ガタ・・・

古谷「あれ？新野帰るんか？」

新野「ああ・・・今日はついてないし・・・」

そう言つて、新野は帰つて行つた。

三野「おい、メンツどないする？」

平次「そやなー・・・」

哀「じゃあ、私がやってあげよつか？」

古谷「おつ、やるか嬢ちゃん!!」

リアン「ダメよ!」

リアンが平次の後ろに現れた。

リアン「ったく・・・哀ちゃんちつとも帰つて来ないと思つたら、こんな所に連れ込んでたつてワケね、平次君？」

平次「リ、リアンちゃん!？」

リアン「哀ちゃんは女の子よ!麻雀なんて教えないでよね!!」

今はリアン（コナン）も女の子だと思ふのだが・・・

まあ、それはおいといて・・・

平次「イ、イヤ、オレはこの子に大人の遊びを教えるためにやな・・・」

リアン「さ、帰るよ哀ちゃん!!」

グイツ・・・

哀「あつ・・・」

平次「お、おい・・・」

三野「そうや!リアンちゃんもやってかん?1時間ほどでいいからさ・・・」

リアン「イヤです!!こんな暗くてダサイシケた大人の遊びなんて、絶対にやりません!!」

そして、1時間後・・・

リアン「ローン」

三野「え？また？」

リアン「見て見て！今度は字ばかりでキレイよ、キ・レ・イ」

平次「ゲ・・・」

平次達3人は、リアンの役を見て青ざめた。

『白』『白』『白』『發』『發』『發』『中』『中』『中』『中』『東』

『東』『東』『南』

平次・三野・古谷「ダ、大三元四暗刻字一色・・・ト・・・トリプ

ル役満！！！」

リアン「また勝っちゃったねー」

哀「う、うん・・・（スゴイ鬼ツモ・・・）」

その後も平次達3人はリアンと麻雀を打ったが、けっきょく一度も倒す事ができなかった。

そして、数日後・・・

ゲームセンター『HAIDOO』

「よお、平次君！珍しいなー、君がウチの店に来るなんて・・・」  
実は服部平次、ちよくちよく東京に出てきては、同級生達と遊びに行っているのだ。

むろん、このゲーセンも例外ではなかった。  
要するに、この辺ではよく顔を知られているのだ。



平次「しゃーないやろ？小学生の女の子にボロ負けした事思い出すって、誰も麻雀につき合ってくれないんやから・・・」

「それで哀ちゃん連れて『脱ぎ脱ぎ麻雀』ってか？」

平次「よーし、来た来た来たー！！」

哀「よーし、ここは『鳥』<sup>イソウ</sup>を切って黙テンよ！！」

平次「アホか！『西』<sup>シヤ</sup>を切って、手を伸ばすんやー！！」

リアン「ちよつと、平次君？」

平次「ゲツ・・・」

リアン「何やってんのよもー・・・」

平次「あ、だからこれは・・・」

リアン「ここは『（パーソウ）』切りで、ドラ『H』<sup>ウーソウ</sup>待ちの即リーに決まってるでしょ？」

ピッ！

リアン「よーし、来い来い！！」

平次・哀「（来るワケねーよ、自分で暗刻<sup>アンコ</sup>ってんのに・・・）」  
ピコッ！

『H』『ツモ』

リアン「ツモー リーチ一発ツモ混一色ドラ4（ホンイツドラフォー）！キヤー、裏ドラものっちゃったー」

『イヤーン』

リアン「よーし、最後の1枚ねー！！」

「誰だあゝ？リアンちゃんに麻雀なんて教えたのは・・・」

平次・哀「知らん知らん・・・」

後にリアンは、小五郎達すらもおびやかす麻雀キラーに成長するのであるが、それはまた別のお話・・・

## エピソード17 リアンちゃん、麻雀を教わる（後書き）

哀「リアンちゃん、あなた麻雀を教わったというより、自分で覚えてたって感じね・・・」

リアン「そうねー、平次君もあのゲームのコンピューターも弱すぎるったらありやしない・・・」

哀「あなたが強すぎるのよ・・・」

リアン「何か言った？」

哀「いーえ、何も。」

リアン「そういえば、最近杯戸山で夜中に幽霊が出るんだってさ。」

哀「そ、それで？」

リアン「今度2人で見に行かない？」

哀「イヤよ、私は・・・」

リアン「でもさー、1人でいると何かが起こるよ・・・ウッフッフ・・・」

哀「キャーッ！！わかりましたよ、行きますよ・・・行けばいいんでしょ、行けば・・・」

リアン「それでよろしい」

今回は、『エピソード18 リアンちゃん、オバケを見る』です。

## エピソード18 リアンちゃん、オバケを見る

今日リアンと哀は、杯戸山に遊びに行っていた。

なんでも、夜な夜な何かが出没するというウワサを歩美達から聞いたリアンが、自分達もぜひ一度見ようと哀を巻き込んだのだ。

哀「ねえリアンちゃん・・・やっぱり帰ろうよ・・・」

リアン「ここまで来て、何言ってるのよ！せつかく歩美ちゃん達から、『杯戸山で何かが出る』って情報を聞いたのよ！？アタシ達で、絶対にその『何か』を見るんだから！！」

哀「で、でも、もし変な魔物とか出てきて、食べられちゃったらヤダし・・・」

リアン「バカねえ・・・この世にそんなのいるワケないじゃない・・・魔女とかだったら、いるかもしれないけど・・・」

哀「でもでもでも！！私、けっこうカンするどいんだよ？」

リアン「それは組織の人間に対してだけでしょ？」

哀「ちがうもん！私も靈感、強いんだもん！！」

リアン「・・・もう、しょうがないわね・・・」

哀「リアンちゃん！わかってくれたのね！」

リアン「もうしばらく探ってみましょう。帰るのはそれからでも遅くはないでしょ？」

哀「ヤダあゝっ！！」

リアンと哀は、森の中を歩いていた。

哀は、怖くてリアンにしがみついている。

リアン「哀ちゃん・・・あまり服引つ張らないでくれるかな？」

哀「だってだってだって、怖くて仕方ないんだもん!!」

リアン「あのねえ・・・」

その時、ガサツと音がした。

ガサツ!!

哀「キャアアアアッ!!」

哀はリアンに抱きついた。

哀「オバケオバケオバケオバケオバケ・・・」

リアンは、音のした方へと歩いていった。

哀「リ、リアンちゃん!？」

リアンは、音の主を抱き上げた。

リアン「ホラ、見てみなさいよ・・・ただのカワイらしいヘビさんよ・・・」

哀「あ、あれ・・・？」

その時、また音がした。

哀「キャアアアアッ!!こ、今度こそオバケえ!!」

リアン「哀ちゃん、よく見てよ。この子はただのリスさんよ・・・」

哀「は、はれ・・・？」

リアン「オバケの正体なんて、しよせんこんなもんよ・・・」

リアンがそう言った時、また何かの音が聞こえた。

ガサガサ・・・

哀「こ、今度は何!？」

リアン「なんか変な感じね・・・アタシちよつと見てくるから、動いちやダメよ!!」

哀「ちよ、ちよつとリアンちゃ・・・」

リアン「大丈夫!!すぐに戻ってくるから・・・」

そう言つと、リアンは音が聞こえた方に走つていった。

哀「ちよつとリアンちゃん!私を1人にしないでえっ!!」

哀は1人、取り残されてしまった。

ポツン・・・

しばらくたって、哀はガタガタとふるえ出した。

哀「リアンちゃん・・・早く帰ってきてえ・・・私1人じゃ、怖いよあ・・・」

哀がそうつぶやいた時、右の方から何かの音が聞こえてきた。  
ガサツ！

哀「リ、リアンちゃん？」

森の奥から出てきたのは、大きなヘビだった。

さつきリアンが抱き上げたヘビとは種類がちがい、ウツバミ蟒蛇ぐらいの大きさをしている。

哀「お、大きい・・・」

哀がつぶやくと、ヘビが哀の方をにらみ、舌をチロチロさせだした。

哀「へっ・・・？」

哀は次の瞬間、このヘビが何をするつもりなのかすぐにわかった。

このヘビは、哀を襲う気だ！！

哀「（ヤバい！逃げなきゃ・・・）」

哀は走り出そうとしたが、ヘビの方が速かった。  
ぐるぐるぐるぐる！！

哀「キャアアアア！！」

哀はヘビに巻きつかれ、グルグル巻きにされてしまった。

哀「うゝん、うゝん！！うゝん！！」

哀はジタバタともがいたが、ヘビに体を締めつけられ身動きがとれない。

そうこうしているうちに、ヘビは大きく口を開けた。  
ガバア！！

哀「助けてえ！！リアンちゃん！！」

ヘビが哀を飲み込もうとした、その時だった。  
リアン「哀ちゃん！！」

なんと、リアンが間一髪駆けつけたのだ。

哀「リアンちゃん・・・」

すると突然、ヘビは哀を放した。

大方、リアンの方が美味だと思ったのだろう。

ヘビはリアンに向かっていった。

哀「リアンちゃん、逃げて!!」

しかしリアンは、冷静さを保っている。

ス・・・

リアン「秋水流忍法、片結び!!」

リアンが叫んだ瞬間、ヘビは片結び状態になった。

ヘビは慌てて逃げていった。

リアン「哀ちゃん、大丈夫?」

哀「リアンちゃん、ありがとう!!」

哀はリアンに抱きついた。

哀「ところで、その後ろにいるのは誰?」

哀はリアンの後ろを指さした。

リアン「ああ、彼がウワサのオバケだって。」

哀「x ㇿ!!!」

ドサッ・・・

それから一週間、哀は恐怖で寝込んだという。

## エピソード18 リアンちゃん、オバケを見る（後書き）

哀「あゝ、怖かった・・・もう、リアンちゃんったら・・・オバケなんか連れて来ないでよね・・・あら？テーブルに書き置きがある！なにになに・・・」

『灰原哀ちゃんと阿笠博士へ』

アタシ、江戸川リアンは、阿笠博士のお世話でほんと疲れてしまいました。』

哀「うんうん・・・」

『よって、アタシは・・・』

哀「うんうん・・・」

『アタシは・・・』

哀「うんうん・・・」

『家出させていただきます。今までお世話になりました。』

江戸川リアン』

哀「えええっ！リアンちゃんが家出っ！！？」

今回は、『エピソード19 リアンちゃん、家出する！？』です。

## エピソード19 リアンちゃん、家出する！？

ある日の朝

哀「ふああ・・・」

哀は眠い目をこすり、階段を降りてきた。

哀「・・・あら？」

哀が辺りを見回すと、いつもと何か感じがちがう事に気がついた。

哀「リアンちゃんがない！！」

そう、リアンがいなかったのだ。

哀「もしかして、まだ部屋で寝てるんじゃない・・・」

哀はそう思ったが、その考えは打ち砕かれた。

テーブルの上に、置き手紙が置いてあったのだ。

哀は手紙を手にとった。

哀「なにになに・・・」

『阿笠博士と灰原哀ちゃんへ』

アタシ、もう博士のお世話をするのに疲れました。

アタシ、家出します。

今までお世話になりました。

江戸川リアン』

哀「なーんだ、家出かぁ・・・って・・・」

次の瞬間、哀は素っ頓狂な声を上げた。

哀「えええええっ！！！！リアンちゃんが家出えっ！！！！？」

哀の大きな金切り声で、まだ自室で寝ていた阿笠が起きてきた。

阿笠「哀君、どうしたんじゃない？」

哀「あ、博士！た、大変よ！！リアンちゃんがこんな物を！！」

哀から手紙を受け取った阿笠は、手紙を読み、ため息をついた。

阿笠「ハア・・・まさかこんな事になってしまうとは・・・リアン



君は本当に心がデリケートなんじゃなあ・・・」

哀「どういう事、博士？」

阿笠「ウム・・・実はじゃな・・・昨日の晩・・・」

その日、阿笠は学会で夜が遅かった。

そのためリアンが阿笠の分のごはんを用意して待つ事になり、哀は先に寝ていた。

リアン「どう？博士。」

阿笠「まあまあじゃな。それより、リアン君。たまには肉料理も作ってくれんか？リアン君の手料理は君が新一だった頃から食べてるが、いつも肉料理じゃなかったじゃろ？たまには肉料理も食べたいんじゃが・・・」

リアン「ダ・メー！そんな事したら、アタシが哀ちゃんに怒られちゃうよ！！それに、野菜料理や魚料理は健康的で、ダイエットにも最適なのよ！博士には少しでも長生きしてほしいんだもん！！」

阿笠「フン、ついに心まで女に成り下がったか？」

リアン「！！」

阿笠「日本警察の救世主とまで呼ばれた君が、幼児化した上、挙げ句の果てには女性化・・・情けないのう・・・」

阿笠はつい言っではいけない一言を言ってしまった。

その瞬間、リアンは涙を流した。

リアン「ひ、ひどい・・・博士はアタシの辛い状況、理解してくれてると思っていたのに・・・ひどすぎるよ・・・もう、博士なんか知らない！！うえゝん！！！！うえゝん！！！！」

リアンは泣き叫ぶと、階段を駆け上がって2階に消えた。

阿笠「あの後、よくよく考えてみて自分がまちがっていた事に気づいてな・・・謝ろうと思つてリアン君の部屋に行つたんじゃが、内側からカギがかかつておつてのお・・・今日の朝謝ればいいと思つて、そのまま寝たんじゃが・・・」

哀「それがこんな事になつちゃつたつてワケね・・・情けない・・・早く彼女を探さなきゃ・・・」

哀がそう言つて携帯の電源を入れた時、携帯がふるえた。

哀「メールだわ・・・」

差出人はリアンで、送信時刻は4時44分だった。

哀はメールを読んだ。

『哀ちゃんへ』

このメールが届く頃には、もうアタシはあなた達のそばにはいないでしょうね。

勝手な事をしてごめんなさい。

くれぐれもアタシを探さないでください。

リアン』

哀「・・・（これ、メチャクチャマズい状況じゃない・・・どうしよう・・・そうだわ！服部君に相談してみよう！！）博士、私ちょっと出かけてくる！！」

哀は部屋で服を素早く着替えると、阿笠邸を飛び出した。

哀は東京駅まで走っていた。

哀「（リアンちゃんが家を飛び出したのがメールを送信した後なら、おそらく5時前後・・・そして今は8時30分・・・女の子1人で行ける場所なんてたかが知れてるし、今のうちに見つけ出さなくちゃっ！！）」

哀は必死に走り続けた。

それから30分近くたって、哀は東京駅にたどり着いた。

哀「急がなきゃ・・・」

哀は急いで平次の番号をプッシュした。

3時間ほどたって、平次が東京駅にやって来た。

平次「哀ちゃん!! リアンちゃんが家出したって、ホンマか!？」

哀「う、うん・・・博士がつい言っちゃいけない一言を言っちゃって・・・」

平次「たく、アホやなあ、博士は・・・そんなやから、フサエさんに告白でけへんのや!!」

哀「それは関係がないような気がするんだけど・・・」

平次「まあ、ええわ。とにかく、早う探そ。」

哀「ええ、そうね。」

それから哀と平次は30分ほどリアンを探し回ったが、彼女の姿はどこにも見当たらなかった。

しばらく歩き回っておなかも空いてきたので、哀と平次はハンバーガーショップで昼ごはんを食べる事になった。

平次「こんなに探し回って、いつこうに見つからへんとは・・・」

哀「いったい、どこ行っちゃったのかしら・・・」

その時、哀の携帯がふるえた。

見ると、阿笠からメールが来ていた。

哀「なにになに・・・」

『阿笠じゃ。』

どうやらリアン君は、ワシが新開発した追跡者探知装置を持ってっているようじゃ。

その装置はシール式の発信機を相手に取りつける事によって、相手の居場所がすぐにわかってしまうんじゃ。

おそらく、哀君の体のどこかにシールがついていると思うが・・・とにかく、気をつけてくれ。』

哀が服を少しめくると、平次が哀の背中にシールがついているのを見つけた。

平次「あつたで！発信機や！！」

哀「まさか、寝てる間にこんな物をつけられていたなんてね・・・」

平次「哀ちゃん、予備の追跡メガネがあつたやろ？それで探されへんのか？」

哀「持ってきてるけど、ダメだわ。それを見越して、彼女バツジの電源を切ってるみたい・・・」

平次「手がかりゼロか・・・どないすりやええねん・・・」

「あの、どうしたんですか？」

ハンバーガーショップに食べに来ていた客の1人が、哀達に話しかけてきた。

哀「あ、実は私達、行方不明になった友達を探しているんです。」

平次「黒髪でロングヘアーで、メガネかけてるんやけど・・・」

哀「これがその子の写真です。」

哀は携帯に写されたリアンの写真を見せた。

「ああ、この子だったら、アタシここに来る前に見かけたわよ。」

平次「それ、ホンマか！！」

「うん、杯戸町の方に走ってったと思うけど・・・」

平次「杯戸町か・・・ありがとうな、姉ちゃん！！」

哀と平次は勘定を終えてから、再びリアンを探して走り出した。

## エピソード19 リアンちゃん、家出する！？（後書き）

哀「さて、家出しちゃったリアンちゃんを探す私達！！」

平次「だんだん追いついてる気いはするんやけど、やっぱアイツも探偵やからなあ・・・」

哀「そうこうしてるうちに、ようやくリアンちゃんを発見する！！」

平次「ようやくと見つけたと思ったら、今度はリアンちゃんがさらわれてしもたぞ！！」

哀「早く助け出さないと、リアンちゃんが危ないわ！！」

次回は、『エピソード20 リアンちゃん、拉致される！！』です。

## エピソード20 リアンちゃん、拉致される！！

一方、阿笠邸を飛び出したリアンは、杯戸東公園のベンチで1人泣いていた。

リアン「クスン、クスン・・・博士のバカ・・・もう二度とあの家になんか戻らないんだから・・・」

リアンは立ち上がると、ターボエンジン付きスケートボードに乗り、鳥矢町へと向かった。

哀と平次は、リアンの目撃情報を頼りに杯戸東公園にたどり着いた。しかし時すでに遅く、もう彼女の姿はなかった。

平次「くそっ、また先読みされたか・・・」

哀「いつか追いつけるわ！探しましょ！！」

哀と平次は杯戸東公園にいた人達に聞き込みをし、次の場所である鳥矢町へと向かった。

### 鳥矢自然公園

リアンは一足早く、鳥矢自然公園に来ていた。

リアン「フウ・・・しばらく動き回ったから、のどが乾いちゃったわ・・・あそこのコンビニで、何か買っていこう・・・」

リアンは、近くにあったコンビニに走っていった。

そんな彼女を、遠巻きに見ている怪しい男達がいた。

A「ふうん、けっこうカワイイ女の子がいるじゃないか・・・」

B「なあ、あのお嬢ちゃんをいただこうぜ。」

C「賛成だな。」

D「よし、じゃああの子を監視だな。」

リアンは飲み物を買ひ、コンビニを出た。

リアン「グビグビ・・・」

リアンはジュースを飲み干すと、ゴミ箱にボトルを捨てた。

そして公園を出ようとした瞬間、リアンは2人の男に囲まれた。

リアン「え？」

D「お嬢ちゃん、君力ワイイね。」

C「ちよつと一緒に来てくれないかな？」

リアン「あ・・・あ・・・」

リアンは次の瞬間、男達は何をするつもりなのか予想がついた。

次の瞬間、リアンは駆け出していた。

男達2人が、容赦なく後を追う。

リアン「ハアハア、ハアハア・・・」

リアンはコンビニの裏手にある路地裏に逃げ込んだ。

そして、リアンは向こう側に逃げようとしたのだが、それは無理だった。

向こう側からも、2人の男が迫ってきたのだ。

そして、リアンはとうとう前後の逃げ道を塞がれてしまった。

リアン「あ・・・あ・・・キヤアアアッ！むぐつ・・・」

リアンは叫び声を上げようとしたが、男の手で口を塞がれる。

そのまま2人の男に抱えられ、向こう側に止めてあった車の中に放り込まれた。

すぐに逃げ出そうとしたが、男達3人に羽交い締めになれ、手足をロープで縛られる。

リアン「んっ！んむうっ！んむうっ！！！！」

声を出したくても、1人の男に口を手で塞がれ、声にならない。

リアンがもがいていると、リーダーらしき男がリアンがさつき立ち寄ったコンビニで何かを買ってきた。

それは、ガムテープだった。

リアン「あっ・・・モゴォ!!」

声を上げるヒマもなく、リアンは口にガムテープを貼りつけられる。その後、縄の上からガムテープで手足と体をキツく縛られてしまった。

これでもう、頼みの綱の縄抜けの術も使えない。

リアン「んむうっ!!んんむうんっ!!」

もがくリアンを乗せたまま、車はフルスピードで走り出した。

リアン「んっ!んんっ!んんん!!」

男達4人に拉致されたリアンは、車の中でもがいていた。

リアン「んむうっ!!」

B「まったく、うるさいお嬢ちゃんだなあ・・・」

A「ちよつと黙らせるか・・・」

男はそう言つと、リアンの口のガムテープをはがした。

ピリリ・・・

A「なんだよ、うるさいな・・・」

リアン「あなた達、アタシを放してよ!!どうしてこんな事するの?」

A「フン、それは簡単だ・・・オレ達は、大学を卒業してから、ずっと退屈な日々を送ってたんだよ・・・」

B「こんな退屈な日々は、もうウンザリだ・・・」

C「それで、少し世間を騒がせてみようと思つてね・・・」

D「その第1歩として、お嬢ちゃんを誘拐し、身代金をいただく・・・」

A「お嬢ちゃんには悪いが、しばらくおとなしくしてもらつよ。」



・・」

リアン「ヤダァ・・・むぐっ・・・」

リアンは口をハンカチで塞がれた。

リアン「ううゝー！！んん・・・」

リアンは暴れたが、ほどなく睡眠薬によって眠らされてしまった。

リアン「ん・・・」

それからしばらくして、やっとリアンは目が覚めた。

リアン「んっ・・・」

リアンはなんとか起き上がると、辺りを見回した。

リアン「（ここ、どこなの・・・？）」

C「オレ達のアジトにようこそ、お嬢ちゃん。」

リアン「！！」

リアンが前を見ると、あの男達3人がいた。

リアン「んんむう、んんううんむむうん！！」

『あなた達、この縄ほどきなさいよ！！』と言おうとしたリアンだったが、口に大きな布でさるぐつわをされていたので、声にならなかった。

リアン「んむうううっ・・・！！」

リアンはジタバタともがいた。

D「うるさいお嬢ちゃんだな・・・」

男はそう言つと、リアンの顔を殴った。

バシッ！！

リアン「ううっ！！（キャッ！！）」

リアンの頬が腫れる。

リアン「ううっ・・・」

リアンは涙を流した。

その頃哀と平次は、鳥矢自然公園内でリアンを探していた。

平次「どこにもおらへんな・・・」

哀「どこに行つたのかしら・・・」

「君達、誰か探しているの？」

哀と平次が振り向くと、1人の女性が立っていた。

哀「ええ・・・行方不明になった女の子を探しに・・・」

哀が言うと、女性は考え込んでからこう言った。

「そういえば、少し前に見かけたわ。あっちの方に走っていったよ。」

平次「そうですか、おおきに。」

哀と平次はお礼を言うと、言われた方に走っていった。

女性は、フツと笑ってから、一瞬で姿を消した。

リアンはまだ、男達4人のアジトに監禁されている。

リアンはムダな事とはわかっていても、暴れられずにはいられなかった。

リアン「んっ！んんっ！んんんむうっ！！！」

リアンは必死に叫んでいる。

いつか気づいてくれる人がいるだろうと。

しかし、彼女のその必死な行為は、男達をますます不機嫌な状態にしていた。

D「うるさい・・・うるさすぎる・・・」

C「ここまでうるさいお嬢ちゃんだとは、計算外だったな・・・」

B「兄貴、どうする？」

A「もう1回眠らせるか・・・」

リーダーの男はそう言うと、ハンカチにクロロホルムを染み込ませた。

そして、リアンの口のさるぐつわを外す。

リアン「あっ・・・ううっ!!」

大声を出す前にリアンの口はハンカチで塞がれた。

リアン「んう・・・」

リアンは気を失い、倒れた。

B「よし、後はこのお嬢ちゃんを・・・」

そこまで言った時、ガレージがトントんと叩かれた。

C「ん？」

D「なんだ？」

男達は、何事だとガレージまで歩いていった。

そして、その瞬間何が起こったのか、男達には記憶がない。

なぜなら、男達4人は一瞬のうちに気絶してしまったのだから。

リアン「ん・・・」

次にリアンが目を覚ました時、彼女は見知らぬ場所にいた。

リアン「ここ、どこ・・・？あれ？」

リアンの口にかまされていたさるぐつわは外され、手足の縄もほどけている。

リアン「どういう事？」

リアンは辺りを見回した。

「あら、目が覚めたの？」

リアンが声のする方を見ると、1人の女性が座っていた。

リアン「（だ、誰なの？この女の人・・・）」

リアンは、しばらく沈黙していた・・・

## エピソード20 リアンちゃん、拉致される!!（後書き）

リアン「突然アタシの前に現れ、4人組の男達からアタシを助け出してくれた、謎の女性・・・この人はいったい何者なの？ん？よく見てみたら、この女の人・・・手袋してるし、猫がヒザの上に乗っているし、目が赤いし、オマケに鼻が大きいわ!!まさか・・・まさかこの人・・・ま・・・魔女なの・・・!!!?」

次回は、『エピソード21 リアンちゃん、魔女に弟子入りする!』です。

## エピソード21 リアンちゃん、魔女に弟子入りする！？

リアン「ん・・・」

次にリアンが目を覚ました時、彼女は見知らぬ場所にいた。

リアン「ここ、どこ・・・？あれ？」

リアンの口にかまされていたさるぐつわは外され、手足の縄もほどけている。

リアン「どういう事？」

リアンは辺りを見回した。

「あら、目が覚めたの？」

リアンが声のする方を見ると、1人の女性が座っていた。

リアン「（だ、誰なの？この女の人・・・）」

リアンは、女性を見つめていて、ある事に気がついた。

リアン「（突然アタシの前に現れ、4人組の男達からアタシを助け出してくれた、謎の女性・・・この人はいったい何者なの？ん？よく見てみたら、この女の人・・・手袋してるし、猫がヒザの上に乗っているし、目が赤いし、オマケに鼻が大きいわ！！まさか・・・まさかこの人・・・ま・・・魔女なの・・・！！？）」

「どうしたの？お嬢ちゃん。」

リアン「あ、あの・・・助けてもらったアタシがこんな事言うのも何なんですけど・・・どうやって犯人達を倒したんですか？」

「それはね・・・『魔法』よ。」

リアン「ま、魔法・・・！？じゃあ、やっぱり・・・お姉さんは・・・魔女！！！！」

シュルルルル・・・

ポウン！！

その瞬間、女の人は消え去り、代わりに緑色のカエルがそこに立っていた。

「あーあ・・・いつかはこんな日が来るだろうと思ってたけど・・・

好奇心にかられて、お嬢ちゃんを助けるんじゃないかな。．．．  
リアン「ああああ．．．！ご、ごめんなさい！！アタシ、どんなでもない事しちゃったみたいで．．．カエルさん、本当にごめんなさい！！」

「あらあら、この姿がカエルだってわかるなんて．．．マジョミア、この女の子ひよっとしたら魔女の素質があるのかもよ？」

リアン「へ．．．？」

リアンが声のする方を見ると、妖精らしき者がいた。

マジョミア「そうね．．．これも何かの運命だわ。よし、この子に決めましょう。」

リアン「え？え！？ど、どういう事ですかあゝ！！？」

リアンは、しばらく状況が理解できなかった。

それから30分ぐらいたって、ようやくリアンは状況が理解できた。  
リアン「じゃあ、お姉さん達は魔女界からこの世界にやって来たんですね！」

マジョミア「そうよ、お嬢ちゃん。アタシはマジョミアっていつて、このMAHO堂のオーナーなの。そしてこっちが、アタシのパートナーで妖精のナナ！」

ナナ「ナナよ。よろしくね。」

リアン「アタシは江戸川リアンっています．．．」

マジョミア「江戸川リアン．．．いい名前ね。さっそくだけど、本題に入るわ。リアンちゃんは、どうしてアタシがこの姿になったのかわかる？」

リアン「はい。何かの呪いなんですよね？」

ナナ「そう。魔女は自分の正体を言い当てられちゃうと、こんな風に魔女ガエルになってしまう呪いをかけられているのよ．．．」  
リアン「魔女ガエル．．．」

マジョミア「そして、魔女ガエルを元に戻せるのは、その魔女の正体を見破った者しかムリなのよ・・・お嬢ちゃんには、いきなりでビックリすると思うけど、魔女になってもらわなきゃいけないの・・・」

リアン「それなら、お安いご用ですよ！ちようど何かしたいなーって思っていました・・・」

マジョミア「そう・・・だったら話は早いわ！ついて来て・・・」  
そう言うのと、マジョミアは奥の扉を開け、リアンを誘導した。

ナナ「よっしょっと！」

コト・・・

マジョミア「この中に魔女見習いタップが数個入っているから、1個取り出して！」

リアン「はい！」

パカッ！

リアン「よっしょっと・・・」

スッ・・・

リアン「取れました！」

マジョミア「では次に・・・」

ドゥ、ソゥ

リアン「あ、カワイイですね、これ。音が出ます！あら？真ん中のこのボタン、何かしら・・・」

ピッ！

カアッ！！

リアン「キャアッ！？」

マジョミア「あ！」

ナナ「リアンちゃん、その服はね・・・」  
スポッ！

マジョミア・ナナ「へ．．．？」

シューン．．．

リアン「プリーティーウィッチーリアンっちー」

マジョミア・ナナ「．．．！！！」

リアン「それで、この服がどうかしましたか？」

マジョミア「お、教えてもないのに、魔女見習い服をいとも簡単に着ちゃったわ．．．この子．．．」

ナナ「やっぱり、素質があるのかもよ？」

マジョミア「それじゃ、タップでドミソド、ドファラドと弾いてみて！」

リアン「はい！」

ドミソド、ドファラド

シュポン！

パシッ！

リアン「わあ、スゴい！！マジョミアさん、ナナさん！この楽器どう使うんですか？」

ナナ「ウソ．．．それを一目見ただけで、楽器だとわかるなんて．．

．」

マジョミア「それはポポルトポロンっていつて、魔女が魔法を使うための楽器よ。それを振ると音楽が鳴るから、『プルカプルリカリルナポポルト』って呪文を唱えて！！」

リアン「はい！」

シュッ！

~~~~~

リアン「プルカプルリカリルナポポルト！イチゴのショートケーキよ、出てきてえ！！」

ポンッ！

リアン「わあ、いい！おいし」

マジョミア「ケーキが食べ終わるまで出っ放しになるだなんて．．．あなた、予想以上の魔力の持ち主なのね．．．」



リアン「え？魔力って何ですか？」

ナナ「魔力っていうのはね、魔女や魔女見習いが魔法を使うためのエネルギーなのよ。人間界でいうと、スタミナみたいなものかなあ？そして魔力には個人差があつて、それによつて魔法の効力がちがうのよ！」

リアン「そうなんですか・・・」

マジョミア「普通、なりたての魔女見習いなら、そう長く魔法は続かないものなんだけど・・・リアンちゃんの魔力は、かなり高いわよ！」

リアン「え？そうなんですか？」

ナナ「ええ！おそらく、元々持つてた魔法の潜在能力が相当高かつたんでしょね・・・」

リアン「ハア・・・」

マジョミア「それよりリアンちゃんには、早めに9級の魔女見習い試験を受けてもらわないとね・・・」

リアン「9級？魔女にも試験があるんですか？」

ナナ「そうよ！1人前の魔女になるには、9級から1級の試験に合格しないとダメなのよ！」

リアン「ホエ・・・魔女も楽しやないんですね・・・」

マジョミア「そうそう！9級になれば、ナナみたいな妖精をパートナーにできるわよ！」

リアン「えゝっ！ナナさんみたいなパートナーを！？」

ナナ「そうよ！」

リアン「うわあゝ！スゴく楽しみですゝ！早く試験受けたいなゝ！マジョミアさん！試験はいつあるんですか？」

マジョミア「笑う月の出る晩の日にだけ、MAHO堂から魔女界に行ける扉が開くのよ！ちょうど、明日の晩ね・・・」

リアン「やったゝ！アタシ、がんばりますね！！」

マジョミア「じゃあ、今日はもう遅いから、家に帰りなさい。」

リアン「はい。」

ナナ「あ、そうだね！ホウキの乗り方は・・・」

ゴォッ！！

リアン「マジョミアさん、ナナさん！また明日会いましょうね！」

！

バヒュン！！

ナナ「教えてもないのに、ホウキまで乗りこなせるなんて・・・」

マジョミア「ナナの言う通り、あの子なら良い魔女になれそうなのがするわね・・・」

リアン「~~~~~」

## エピソード21 リアンちゃん、魔女に弟子入りする！？（後書き）

リアン「ひよんな事から魔女見習いになっちゃったアタシ！成り行きとはいえ、前々から憧れてた魔女になれて、アタシ今とっても幸せ！見習い試験は大変そうだけど、持ち前の力で乗り切ってみせるわ！次回のChangin' Detectiveは『エピソード22 リアンちゃん、見習い試験を受ける』だよ！魔法よ世界を平和に変えて！！」

## エピソード22 リアンちゃん、見習い試験を受ける

阿笠邸

リアンが阿笠邸に戻ってくると、そこには彼女を探し疲れた哀と平次がいた。

リアン「哀ちゃん、平次君。」

哀・平次「！！」

リアンが声をかけると、哀と平次が走ってきた。

哀「リアンちゃん！バカバカバカあ！！どこ行ってたのよ！！」  
ポカポカポカポカ・・・

哀はリアンをポカポカと叩いた。

リアン「あ、あの・・・」

平次「哀ちゃん、オマエの事ごつつ心配してたんやで？」

リアン「ご、ごめんなさい・・・途中で変な4人組の男達に誘拐されちゃって・・・」

哀「そうだったの・・・」

平次「ま、無事で何よりや！」

哀「で、今までどこ行ってたの？」

リアン「それはね、まほ・・・」

哀・平次「まほ・・・？」

リアン「（ヤバッ！！）イヤ、ちょっと遠くまでさあ・・・」  
哀「そう・・・」

リアンの部屋

リアン「危なかったあ・・・マジョミアさん達に言われた事、す

っかり忘れてた・・・」

マジョミア『リアンちゃん、今から家に帰るワケだけど・・・絶対  
に人前で魔法を使っちゃダメよ!』

リアン『え?何ですか?』

ナナ『あなたが魔女だという事がバレれば、マジョミアと同じよう  
になっちゃうのよ。』

リアン『ウソ・・・』

マジョミア『マジよ。だから人前では魔法使っちゃダメよ。』

リアン『は、はい・・・』

マジョミア『それより、明日の夜には9級試験があるから、遅れな  
いようにね。』

リアン『はい。』

リアン『危ないところだった・・・』

翌日

帝丹小学校

マリア「ああ、リアンちゃん、帰って来たんやね!」

たくま「心配したんだぜ?」

リアン「ごめ〜ん・・・」

光彦「ちゃんと帰ってきたんだから、いいじゃないですか!」

元太「だな!」

哀「そういえば、歩美ちゃんは?」

マリア「しばらく田舎に帰ってるんやって・・・」

リアン「里帰りってワケね・・・」

たくま「しばらくはこっちに帰ってこれないらしいぜ。」

リアン・哀「マジですか・・・」

その夜・・・

リアン「哀ちゃん、じゃあアタシちよつと出かけてくるから・・・」

哀「は、はぁ・・・」

リアン「じゃあね！」

ダッ！！

哀「なんか・・・怪しい・・・」

マリア「リアンちゃんの様子がおかしい？」

哀「うん。女同士で頼れそうな1人の歩美ちゃんもいないから・・・」

「

マリア「残るはウチっちゅうワケやな・・・」

哀「お願いできる？」

マリア「任しとき!!」

マリアと哀は、リアンをこっそり尾行していた。

哀「そ〜っと、そ〜っとね・・・」

マリア「いちいち声出すなや・・・」

哀「(MAHO堂・・・?)」

マリア「(こんなお店があつたんやなぁ・・・)」

哀「(あ!リアンちゃん中に入っていく!)」

マリア「(何があるんやろ・・・?)」

哀とマリアは、こっそりと中をのぞいた。

マジョミア「リアンちゃん、準備はいい？」

リアン「はい！」

ナナ「じゃあ、着替えて！」

リアン「はあい！」

ポン！

パン！

スポッ！

リアン「プリティーウィッチーリアンっちー」

哀・マリア「（ああ・・・！！！！）」

マジョミア・ナナ「じゃあ、行きましょうか！」

リアン「はい！」

シュウウウ・・・

リアンは消えた。

哀「ま、まさかリアンちゃん・・・」

マリア「魔女・・・！？」

## 魔女界

リアン「ここが魔女界・・・アタシの住んだ国とあまり変わらないんだ・・・」

マジョミア「アタシ達の世界では『人間界』って呼ばれているけどね・・・」

リアン「そうですか・・・」

ナナ「着いたわ！ここが試験会場よ！」

リアン「ここが？ただの屋台じゃないですか・・・」

マジョミア「そうか、リアンちゃんの世界ではこれは屋台っていうのね・・・」

ナナ「この人達が試験官魔女、モタとモタモタよ！」

モタ「ここにちゅあはあ、お嬢ちゃーん！」

モタモタ「私達が試験魔女のモタとモタモタよあー！」

リアン「こ、こんにちは・・・」

モタ「それじゃあ、9級試験を始めまーす！」

モタモタ「9級試験の問題はあ、魔法で課題の物を出す事よあー！」

リアン「わかりました！」

モタ「じゃあ、このグラスにジュースを入れてねー！」

リアン「わかりました！」

シュツ！

リアン「プールカプルリカリルナポポルト！このグラスにジュースを注いでー！」

リアンの魔法で、ジュースが見事に出た。

モタ「合格ー！！」

モタモタ「お見事ー！！」

リアン「よっしゃあー！！」

モタ「それと、お供の妖精よー！」

モタモタ「リリよー！かわいがってあげてねー！」

リリ「リリー！」

リアン「リリ、よろしくね！」

マジョミア「じゃあ、帰りましょー！」

ナナ「9級試験、見事だったわね！」

マジョミア「この分じゃ、魔女になるのもそう遠くはなさそうね・・・」

・

リアン「そうですね・・・」

ガチャ！



リアン「ああー!!」

なんと、哀とマリアがそこに立っていた。

哀・マリア「リ、リアンちゃんって・・・」

リアン「あ・・・」

哀・マリア「リアンちゃんって・・・」

リアン「ちよっ・・・」

哀・マリア「魔女!!」

リアン「ヤバイ・・・これってヤバすぎるよぉー!!」

## エピソード22 リアンちゃん、見習い試験を受ける（後書き）

リアン「ねえ、哀ちゃんとマリアちゃんは、何か叶えたい願いとかある？」

哀「私は、リアンちゃんともっと仲良くなりたいかなあ・・・」

マリア「ウチは、たくまとタコ焼き屋兼漫才コンビになりたい！」

リアン「よし！だったら、哀ちゃん達も魔女になっちゃえー！！」

哀・マリア「ええー！！」

リアン「次回のChangging Detectiveは、『エピソード23 みんなで一緒に魔女になる！！』だよ。魔法よ世界を平和に変えてー！！」

## エピソード23 みんなで一緒に魔女になる!!

哀・マリア「リ、リアンちゃんって・・・」

リアン「あ・・・」

哀・マリア「リアンちゃんって・・・」

リアン「ちよっ・・・」

哀・マリア「魔女!!!」

リアン「ヤバイ・・・これってヤバすぎるよぉ!!!」

マリア「ど、どないしたんや?」

リアン「完全に言われちゃったよ!!!これでアタシは魔女ガエルよ・・・」

マジョミア「アハハハハ!!あなたは魔女ガエルにはならないわよ!!」

ナナ「リアンちゃんはまだ『魔女見習い』でしょ?」

リアン「あ、そうでした・・・」

哀「それよりリアンちゃん、この人達は?」

リアン「小さい方が妖精のナナさんで、緑の方が魔女のマジョミアさん・・・」

マリア「魔女?想像してたんと全然ちがうな・・・」

リアン「アタシが魔女だと見破っちゃったから、魔女ガエルになっちゃったのよ・・・」

哀「じゃあ、私がリアンちゃんの事魔女みな・・・」

ナナ「ダメッ!!」

マジョミア「今度こそ、魔女ガエルになっちゃうわよ!!」

哀「あ・・・ごめんなさい・・・」

ナナ「でも、どうする?この2人、リアンちゃんの正体を言っちゃうかもよ?」

哀「そんな事、絶対に言わないわ!!!」

マリア「リアンちゃんが魔女ガエルなんかになったら、かわいそう

やもん!!」

マジョミア「そうはいかないわよ!人間、いつ何時ポロツと言い出すかわからないわ!!リアンちゃんが魔女ガエルになったら、アタシが元に戻れない・・・なくなる上はあ・・・!!」

リアン「まさか・・・魔法で消しちゃうとか言っくんじゃないでしょうね・・・!」

哀・マリア「そんなっ!!」

マジョミア「誰がそんな事言った・・・?」

哀・マリア「は?」

マジョミア「あなた達2人にも、魔女見習いになってもらっわ!」

ナナ「見習いタップも、ちゃんと2つ残ってるしね!」

哀「だったら、私も魔女見習いになるわ!!」

マリア「ウチもなる!!」

リアン「やったあ!!じゃあ、これでアタシ達は魔女見習い仲間ね!!」

マジョミア「じゃあ、この中から見習いタップを1つずつ出して!

!」

スッ・・・

哀「取れました・・・」

マジョミア「リアンちゃん、手本を見せてあげて!」

リアン「はい!!」

ポン!

カアッ!

スポッ!

リアン「プリーティーウィッチーリアンっちー」

哀・マリア「おおっ!!」

リアン「それじゃあ2人ともいつてみましょっか!!」

マリア「まずはウチからや!!」

ポーン!

スポッ!

マリア「プリティウィッチーマリアっちー」

哀「私も!」

ポーン!

スポツ!

哀「んしょ、んしょ・・・」

ナナ「・・・え?」

ポンツ!

マジヨミア「1回で着られたのはリアンちゃんとマリアちゃんだけだったか・・・」

哀「もう1回!」

ポーン!

モゾモゾモゾ・・・

マジヨミア「手伝ってあげて!」

リアン・マリア「そーれっ!」

スポン!

哀「・・・ん・・・」

リアン・マリア「セーフ・・・」

哀「ハア・・・」

マジヨミア「ハアじゃないでしょ!!バカ!!早く着替えられるように練習しておくのよ!!」

哀「ハイ・・・」

マジヨミア「次は魔法の使い方よ!リアンちゃん!」

リアン「はい!」

ド、ミ、ソ、ド

ポンツ!

リアン「魔女界の楽器、ポポルトポロンよ!」

シュツ!

リアン「プルカプルリカリリルナポポルト!トマトジュースよ、出てきてえ!!」

ポウン!

リアン「おいし」

哀・マリア「おおっ!!」

リアン「次は2人の番よ!」

哀・マリア「じゃあ、私達も!」

ド、ミ

ソ、ド

ポンッ!

パシッ!

リアン「2人とも、アタシのポロンとちがうわ・・・」

ナナ「キャンディポロンと、フワフワポロンよ!」

マジョミア「哀ちゃんの呪文は、『レイレイシャイニーフワフワフ  
ー』よ!」

哀「レイレイ、シャイニー、フワフワフー!」

マジョミア「マリアちゃんの方の呪文は、『スィールクジェルクロ  
リポプキャンディ』よ!」

マリア「スィールルク?」

マジョミア「スィールクジェルクよ!!」

マリア「スィールクジェルク・・・次、何やったっけなー・・・」

マジョミア「ロリポプキャンディよ!!」

マリア「スィールクジェルク・・・ロリポプキャンディやねえ・・・  
もう覚えたでえっ!! ほなウチは、大好物の湯豆腐でも出したるか  
!!」

シュッ!

マリア「スィールクゝジェルクゝロリポプゝキャンディ! 湯豆腐よ、  
出てこーい!!」

ボウン!

シュウウウ・・・

マリア「アカン・・・これじゃ『湯豆腐』やのうて『豆腐の湯』や・  
・・・」

マジョミア「着替えも呪文も1回で完璧にできたのは、今のところ

リアンちゃんだけか・・・」

哀「私もやってみていいですか？」

マジヨミア「初めは簡単な方がいいわよ・・・物を動かすとか、そういうのね・・・」

哀「はい！」

シュツ！

哀「レイレイシャ〜イニーフ〜ワフ〜ワフー！何でもいから、動いちゃえ〜！！」

ポワア・・・

ギギツ・・・

リアン・哀・マリア「・・・え？」

ズドッ！！

リアン・哀・マリア「キャアア〜ッ！！！！」

マジヨミア「哀ちゃんの魔法が未熟だったのが、不幸中の幸いね・・・」

ナナ「ねえ、マジヨミア？この際、使っちゃいけない魔法とかキチンと教えた方がいいんじゃない？」

マジヨミア「そうね・・・」

マリア「使ったらアカン魔法？そんなもんあんの？」

マジヨミア「確かにあるわ・・・次に言う魔法は、かけたら必ず自分にハネ返ってくるから使っちゃダメよ・・・まず、死んだ人を生き返らせる魔法よ・・・」

リアン「もし、生き返らせちゃったら・・・？」

マジヨミア「自分の命がなくなると思いなさい！！」

哀「ヒエ・・・」

マジヨミア「次に、ケガを治す魔法よ・・・」

マリア「じゃあ、子犬のケガとか直したらアカンの？」

マジヨミア「使えば、必ず自分に何か起こるから、やめておいた方がいいわ・・・」

リアン「それよりマジヨミアさん、次の試験はいつあるんですか？」  
マジヨミア「2週間後の土曜日よ！リアンちゃんはもう、8級を受ける事ができるけど・・・どうする？」

リアン「2人が9級受かるまで、待ちます！」

マジヨミア「ウフフ・・・リアンちゃんは友達思いなのね・・・」

哀・マリア「リアンちゃん・・・ありがとう・・・」

マジヨミア「それじゃあ、3人ともお店の手伝い、がんばってね！」  
「！」

リアン・哀・マリア「はっ！っ！っ！」



### エピソード23 みんなで一緒に魔女になる!!（後書き）

リアン「いよいよ新装開店、MAHO堂!!」

マリア「売って売って売りまくって、マジョミアを早う元の姿に戻したるんや!!」

哀「でも、お店に仕入れに来る人って誰なのかしら？」

??「それは私よぉ!!」

リアン「誰?この人・・・」

哀「次回のChanginɡ Detectiveは、『エピソード24 リアン達、MAHO堂を開く』よ!!」

リアン「魔法よ世界を平和に変えて!!」

## エピソード24 リアン達、MAHO堂を開く

リアン達が魔女見習いになって、1週間がたった。

今彼女達は、MAHO堂を手伝っているところだ。

リアン「ありがとうございます！……」

ナナ「なかなか儲かってるわね！」

マジョミア「あの人の所もこうだったらいいのにね！」

マリア「あの人？」

マジョミア「マジョリカっていつてね、美空の方でMAHO堂や  
てるんだけど……なかなか儲からないのよね！」

ナナ「やっぱり、雰囲気陰気だからかしら……」

哀「ここは明るめに改装しましたからね！」

リアン「そういえば、ここに仕入れに来てる人って誰なんですか？」

マジョミア「ああ、それはね……」

「ああああ」

マジョミア「あ、来たわ。」

「皆さん！こんにちは！私が魔女界の間屋魔女！デラよお」

マジョミア「この人が魔女界の間屋魔女、デラ。本名、『マジョ  
デラ』よ。」

デラ「あら、マジョミア……この子達あなたの魔女見習い？」

マジョミア「そう。江戸川リアンちゃん、灰原哀ちゃん、東尾マリ  
アちゃんよ。」

リアン・哀・マリア「初めまして！」

デラ「初めまして。」

マジョミア「今日は集金？」

デラ「そうねー、いつもより多めに魔法玉の注文があつたから……  
・こんなもんでどうかしら？」

リアン・哀・マリア・ナナ・マジョミア「ゲッ！！高っ！！」

マジョミア「何とか持ち合わせはあるわ。じゃあ、これで……」

デラ「それじゃあね」

ポン！

リアン「消えた・・・」

哀「消えたわね・・・」

マリア「マジヨミアさん、あの人っていつもあなん？この値段はちよつと・・・」

マジヨミア「あの人はいつもあんなもんよ！少々値段が高くてね・・・」

ナナ「それに、毎回妙な所から歌を歌いながら登場するのもちよつとね・・・」

マリア「相当底意地悪いな、あのおばはん・・・」

リアン・哀「お、おばはん・・・？」

マジヨミア「・・・どうやら聞かれてないようね・・・」

マリア「・・・え？」

ナナ「あの人、地獄耳なのよ・・・『くが欲しいな』って言うたら、必ず聞きつけてくるからね・・・」

マリア「ごめんなさい・・・」

マジヨミア「ああ、大丈夫よ。さすがにこれだけ時間が経てば、大丈夫でしょ・・・」

ナナ「それより、もう少し商品増やした方がいいんじゃない？」

マジヨミア「そうねー。もうちよつと増やさないと、売り上げも伸びないからねー。」

リアン「そうですね・・・どんな物を作ればいいですか？」

ナナ「そうね、ネックレスや指輪とかを増やせばいいと思うわよ。」

リアン「よっしゃー！！」

哀「がんばろうー！！」

マリア「やったるでえー！！」

そして、2週間後・・・

ナナ「だいぶ繁盛してきたわねー。」

マジョミア「この仕事にもそろそろ慣れた？」

マリア「うん、慣れた！」

リアン「マジョミアさん、そろそろ試験がある日ですよね？」

マジョミア「そうね、ちょうど明日の晩よ。」

リアン「明日の晩か・・・哀ちゃん、マリアちゃん！がんばってね  
！！」

哀・マリア「うん、がんばるわ！！」

そして、翌日

ナナ「いよいよ哀ちゃんとマリアちゃんの9級試験ね。」

マジョミア「なるべく一発で受かってね。」

哀「任せといてください！」

マリア「当たって砕けるや！」

リアン「マリアちゃん、砕けちゃダメでしょ・・・」

マリア「あ、そやったそやった・・・テヘッ。」

ナナ「じゃあ、3人とも着替えて！」

ポーン！

カッ！

スポッ！

リアン「プリーティーウィッチーリアンっちー」

哀「プリーティーウィッチー哀っちー」

マリア「プリーティーウィッチーマリアっちー」

マジョミア「じゃあ、行くわよ！」

## 魔女界

モタ「それじゃあ、9級試験を始めます！」

モタモタ「9級試験の問題はあ、魔法で課題の物を出す事よあ、！」

哀・マリア「お願いします。」

モタ「哀ちゃんはメロンジュースを出してね。」

モタモタ「マリアちゃんはこの花瓶に花を咲かせてね。」

哀・マリア「はい！」

哀「レイレイシャ、イニーフ、ワフ、ワフー！メロンジュースよ、出てきてえ！」

ポン！

モタ「見事なメロンジュースねえ！合格！」

哀「やったあ！」

マリア「ウチもや！スィールク、ジェルク、ロリポップ、キャンデー！花瓶に花よ、咲けえ！」

ポン！

モタモタ「お見事！マリアちゃんも合格！」

マリア「よっしゃあ！」

リアン「やったね、2人とも！」

哀・マリア「うん！」

モタ「次の試験は1ヶ月後よ！」

モタモタ「楽しみに待っててね！」

## エピソード24 リアン達、MAHO堂を開く（後書き）

リアン「みんな9級に受かって、次はいよいよ8級試験！」

哀「その前に、マジヨミアさんに教わった新魔法、試してみましようよ！」

マリア「マジカルステージやね！」

リアン「やってみますか！」

哀「3人が力を合わせれば、どんな危機も乗り越えられるわ！」

マリア「当たって砕けるー！！！」

リアン・哀「だから砕けちゃダメだって・・・」

哀「あら？あれっていつも早起きしてる女の子・・・」

リアン「次回のChangling Detectiveは、『エピソード25 早起き少女と心の花束』よ！魔法よ世界を平和に変え

えて！！！」

## エピソード25 早起き少女と心の花束

リアン「哀ちゃん、マリアちゃん！9級合格、おめでとう！！」  
哀「ありがとう！！」

マリア「って言いたいトコなんやけど、普通パーティーっていうたらお料理とかいっぱいあるやろ？」

マジョミア「せっかくみんな9級に合格したんだから、マジカルステージで料理を出してもらおうと思ってね・・・」

リアン「マジカルステージ？」

哀「何ですか？それ・・・」

ナナ「9級から使える魔法でね、3人が力を合わせて使う魔法なのよ！」

マジョミア「そう！3人の心が1つになれば、2級上の魔力を発揮する事も可能よ！！」

マリア「・・・ちゅう事は、7級の魔法が使えるっちゅうワケやな！」

マジョミア「みんな！さっきアタシが教えた通りにやるのよ！！」

リアン・哀・マリア「はい！！！」

リアン「プルカプルリカ和やかに・・・」

哀「レイレイシャ〜イニー華やかに・・・」

マリア「スィールク〜ジェルク〜清らかに・・・」

カアアア・・・

リアン・哀・マリア「マジカルステージ！！豪華なパーティー料理を、お願い！！！」

ポワアアア・・・

ドオオオ・・・

ナナ「スゴイじゃない、初めてにしては上出来よ!!」  
リアン・哀・マリア「いただきまーす!!」  
リアン「うーん、おいし」  
哀「自分達が出した料理だと、満足感がちがうわね!」  
マリア「9級になって、見習い服も様になってきたしな!」  
リアン「でも、魔法玉がずいぶん減っちゃったわ・・・」  
マリア「あ、ホンマや・・・」  
ナナ「レベルの高い魔法を使ったんだから、当然魔法玉も減るわ!」  
マジョミア「マジカルステージは魔法玉を大量に消費するから、ここぞと言つときに使うようにしてね!」  
リアン・哀・マリア「はい!!」

翌日

帝丹小学校

リアン「まだ誰も来てないみたい・・・これなら練習できそう・・・」  
ガラッ。  
リアン「ん?」  
「フウ・・・」  
リアン「鈴菜・・・ちゃん?」  
和泉鈴菜<sup>いずみ すずな</sup>「あ・・・リアンちゃん、おはよう!」  
リアン「お・・・おはよう・・・」



哀「へー・・・毎朝？」

リアン「そうなの・・・」

マリア「あの花飾ってるの、小林先生かと思うてたわ・・・

リアン「鈴菜ちゃん、園芸部なんだって・・・。」

鈴菜「ウフフ・・・」

リアン「ウフフ・・・」

翌朝

ギユ・・・

キュツキュツ・・・

ガラッ。

鈴菜「ん？」

リアン「おはよう・・・」

鈴菜「おはよう！今日も練習？」

リアン「今度の日曜、アイドルのオーディションで楽器の演奏があるから、ちよつとでも練習しときたいの・・・この時間しか、音楽室空いてないし・・・」

鈴菜「でも知らなかったな・・・リアンちゃんがバイオリンやってたなんて・・・」

リアン「アタシも早起きするまで気づかなかったわ・・・鈴菜ちゃんがこんな事してくれてたなんて・・・」

鈴菜「へへ・・・」

リアン「じゃあアタシ、音楽室行ってくるね！」

鈴菜「がんばってね！」

音楽室

ポーン！

リアン「プリーティーウィッチーリアンっちー」  
シュッ！

リアン「プールのカプルリカリリルナポポルト！！アタシの演奏を聴いてくれるお客さん達、出てきてえ！！」

ボウン！

ワーワー！！

リアン「練習は練習でも、あがない練習なのよね・・・だって、大勢の前で弾くといつもの調子が出ないんだもの・・・」

）  
）  
）  
）

澄子「それじゃ、教科書の32ページを開いて！水島！頭から読んで！」

水島秀樹「はい！」

澄子「？キレイ・・・スイートピーか・・・」

秀樹「花・・・花はキレイだ。季節を通して私達の心を和ませられる・・・」

澄子「和泉・・・毎日ありがとう！」

鈴菜「！！」

リアン「（小林先生・・・鈴菜ちゃんが生けてた事知ってたんだ・・・）」

哀「鈴菜ちゃん！」

マリア「ホンマに熱心やな・・・」

リアン「あ、これもう少いで咲きそう・・・この花、何て言うの？」

鈴菜「デイジー・・・キク科の花でね、花言葉は『無邪気』って言うの・・・」

哀「さつすが、詳しい！」

鈴菜「この花はね、特に好きな花なの・・・」

ポーン！

ドカツ！！

哀・リアン・マリア・鈴菜「わっっ！！！」

ボロツ・・・

鈴菜「あっ！！！」

哀・リアン・マリア「あっっ！！！」

「おゝい！灰原く！ボール取ってくれよ！」

哀「松村君、何て事するのよ！！せっかくキレイに咲いてた花が散っちゃったじゃない！！」

八木「ケーキ派の女が何言ってんだよ！」

哀「ムツカッ！！！」

マリア「確かに哀ちゃんはケーキ大好きやけどな！！！」

哀「マリアちゃん、どっちの味方！？」

マリア「あ、ゴメン・・・」

哀「鈴菜ちゃんが大切に育てた花なのに！！！」

マリア「そや！誤り！！！」

松村「なんでこんな点取り虫に謝んなきゃいけねえんだよ！！！」

鈴菜「！！！」

哀「何て事言うのよ！！！」

松村「ホントの事だろ！？」

ダッ！

リアン「鈴菜ちゃん！！！」

タッ！

リアン「気にする事ないわ！誰も鈴菜ちゃんの事・・・鈴菜ちゃん・・・」

ガラ・・・

リアン「え？（まだ来てないんだ・・・）」

哀「おっはよー！」

マリア「おはようさん！」

リアン「おはよう・・・。！！」

ガラ・・・

リアン「鈴菜ちゃん！どうしたの？今日は寝坊しちゃったの？」

鈴菜「止めたの・・・もう朝一番に学校に来るの、止めたの・・・」

リアン「えっ・・・」

哀「やっぱりショックだったんだわ・・・松村君の言った事・・・」

マリア「そやな・・・」

ポン！

鈴菜「！？」

リアン「花壇のお手入れしないの？」

鈴菜「いいの・・・朝一番に学校に来るのだって、お母さんに言われて始めた事だったし・・・勉強ができるワケでも、スポーツが得意なワケでもない。私って、誰よりも一番上手にできる事が何もないのよ・・・そうしたら、お母さんに『学校に登校するのを一番に

したら？毎朝教壇に花を飾れば教室も明るくなるし、先生からもほめてもらえると思うわ！』って言われたから始めたの・・・だからもういいの・・・別に好きでやってたワケじゃないんだから・・・」

## MAHO堂

チャツ・・・

哀「松村君！何の用？」

松村「たまたま通りかかったから、ちょっとさ・・・そうだ、これくれ！」

マリア「毎度あり！」

哀「今のつて、確か・・・ネネが作ったMAHOグッズ・・・」

ヒュオオオオオオオ・・・

松村「風・・・あ！このままじゃ・・・」

ザーツ・・・

哀「けっこう降ってきたよ！」

マリア「チャツチャと帰るか！」

鈴菜「・・・」

リアン「あ！ゴメン！アタシ鈴菜ちゃんと帰るね・・・」

松村「よいしょっ・・・」  
バサッ・・・

松村「オレをナメるなよー!!」  
リアン「あー!!」

鈴菜「そんな事しなくてもいいのに・・・」

松村「別に和泉のためにやってるワケじゃねえよ!!」

鈴菜「私はもうそんな花壇、どうでもいいんだから!!」

リアン「鈴菜ちゃん・・・松村君、大丈夫？」

松村「ゴホゴホ・・・」

リアン「熱があるじゃない!!」

## 保健室

松村「江戸川・・・オマエらのMAHOGZZ、効かないじゃないか・・・」

リアン「松村君・・・」

リアン「このままじゃ・・・よしっ!!」

ポーン!

リアン「プリティーウィッチーリアンっちー」

シュッ!

リアン「プールのカプルリカリルナポポルト!!雨も風もやんでっ!!」

ザーッ・・・

リアン「・・・」

ゴオオオ・・・

リアン「キャーッ!!!天気を変えるなんて、9級のアタシにはまだ

ムリなんだわ・・・どうしたらいいの？」

リリ「リリー！！」

リアン「ん？リリ？迎えに来てくれたの？」

哀「リリだけじゃないよ！」

マリア「ウチらも迎えに来たで！」

リアン「哀ちゃん、マリアちゃん！よかった、来てくれて・・・ア  
タシ1人の魔法じゃ花を守る事ができないの・・・お願い、2人の  
力を貸して！！」

哀「マジカルステージね！」

マリア「まっかしといて！！」

リアン「プゝルカプルリカ和やかにゝ・・・」

哀「レイレイシャゝイニー華やかにゝ・・・」

マリア「スィールクゝジェルクゝ清らかにゝ・・・」

カアア・・・

リアン・哀・マリア「マジカルステージ！！お願い！この花を守っ  
て！！」

カアッ！！

フワフワ・・・

哀「何？小さいカサがたくさん！」

リアン「まるでお花みたい・・・」

マリア「なるほどな・・・」

タタタ・・・

鈴菜「あ！！よかった・・・ちゃんと咲いてる・・・」

リアン「おはよう！」

鈴菜「おはよう・・・」

ピンポーン・・・

チャッ!

松村「い、和泉?」

鈴菜「カゼ引いたんだって?」

松村「別に大した事はないんだけど・・・」  
スツ・・・

鈴菜「はい!」

松村「オレに?」

鈴菜「今朝咲いたの・・・」

松村「けっこうキレイじゃん・・・この花、何て言うの?」  
鈴菜「デイジー・・・」

哀「ねね、どうなった?」

マリア「哀ちゃん、押したらアカンって!」

哀「だって、よく見えないんだもん・・・」  
グラ・・・

リアン「あ・・・」  
ドッ!!

鈴菜「あ!」

リアン「哀・マリア「わっ!」」

松村「オマエら!」

リアン・哀・マリア「わあっ!」



## エピソード25 早起き少女と心の花束（後書き）

リアン「やってきました、8級試験！」

哀「試験の課題は、制限時間内に魔法ハーブのアップルを探し出す事！」

マリア「しかも、ごつつう険しい難関の先にあつて、そこに行くのも一苦勞やて!!」

哀「このままじゃ、私達みんな不合格になっちゃうよ!!」

リアン「次回のChanging Detectiveは『エピソード26 みんな不合格!? 8級試験』よ!魔法よ世界を平和に変えて!!」

## エピソード26 みんな不合格！？8級試験

MAHO堂

ナナ「いよいよ今夜は8級試験ね！」

マジョミア「まあ、今のあなた達なら大丈夫だとは思うけど・・・  
くれぐれも油断しないようにね！」

魔女界

モタ「8級試験はあゝ、制限時間内に魔法ハーブのアップルを取ってくる事よゝ！」

モタモタ「3時間が過ぎちゃうと、試験は不合格だから注意してねゝ！」

リアン・哀・マリア「はい！」

哀「とは言ったものの・・・どうやってアップル探す？」

マリア「やっぱ、マジカルステージしかないんとちゃう？」

リアン「やるつか！」

リアン「プゝルカプルリカ和やかにゝ・・・」

哀「レイレイシャゝイニー華やかにゝ・・・」

マリア「スィールク〜ジェルク〜清らかに〜・・・」

リアン・哀・マリア「マジカルステージ！！魔法ハーブアップルのある場所を、教えて！！」

ヒュ〜・・・

ドン！！

『グルル・・・』

リアン「な、なんで熊が出てくるワケ・・・？」

哀「あ、わかった！きっと熊さんが魔法ハーブの場所を教えてくださいのよ！」

『グルルル・・・』

マリア「と、とてもそうは見えへんけどな・・・」

『ガアアアア！！』

リアン・哀・マリア「キャ〜！！！！」

ダダダダダダダダダ・・・

哀「熊熊熊熊〜・・・」

リアン「アタシに任せて！プ〜ルカプルリカリリルナポポルト！白装束よ、出てこい！！」

ポウン！

哀「なんでこんなカツコ・・・」

リアン「死んだフリは熊に効くって言うじゃない？」

『ガアアア！！』

リアン・哀・マリア「キャ〜！！！！」

ダダダダダダダダダ・・・

哀「そんなの、迷信よ〜！！」

リアン「そうだったの？じゃあ・・・プ〜ルカプルリカリリルナポポルト！お茶と座布団、出てきてえ！！」

ポウン！

リアン「いい天気ですねえ、熊さん・・・」

『・・・』

パリン！！

『ガアアアア！！』

哀「キャ〜！！」

ダダダダダダダダ・・・

マリア「一緒にお茶飲んでどないすんねん！！」

ビタア！！

リアン「い、行き止まりだわ！！」

哀「なんで！？なんで熊とアップルが結びつくの！？」

『ガアアア！！』

リアン「き、来たあ！！」

マリア「スィールク〜ジェルク〜ロリポップキャンディ！！時間よ、止まれえ！！」

カツ！！

ピタッ！

マリア「今や！横にそれで！！」

サッ！

シュウ・・・

ドゴォ！！

スウウウ・・・

リアン「き、消えた・・・」

哀「あ、これ蜂の巣だわ！！そういう事だったのね・・・」

マリア「ちよつと、見て！熊がぶつかったところが碎けて、穴が空いた！！」

リアン「この先に行けばいいって事じゃない？」

哀「やっぱりマジカルステージの効果ね！」

帰らずの森

哀「なんか、不気味なところだね・・・」

リアン「マジヨミアさんが言ってたけど、ここって『帰らずの森』  
って言うって、一度迷い込むと二度と出られないんだって・・・」

マリア「大丈夫やて！入り口の木に糸巻いてきたし、目印にしたら  
ええ！」

1時間後・・・

リアン「おつかしいな・・・さっきから同じところぐるぐる回って  
る気がするよ・・・」

マリア「変やなあ・・・糸をこうやってたどってるのに・・・」

哀「ちよつとあれ、入り口の木じゃない？」

マリア「ええ！？どういうこっちゃ！？」

リアン「2人とも、ホウキに乗って上に行こう！-」

リアン「やっぱり・・・この森の木全体が、少しずつ動いていたの  
よ！」

マリア「そやから、木に糸巻いても迷ってしまうゆうワケか・・・」

「

哀「だったら、動けなくするまで！レイレイシャ〜イーフ〜ワフ

ワフー！時間よ、止まれえ！-」

カッ！

ピタッ！！

リアン「今のウチに抜けるわよ！-」

リアン「よし、やっと動く森を抜けた・・・」

哀「あ！あれ、魔法ハーブのアップルじゃない？」

カアアア・・・

マリア「赤い花・・・まちがいあらへん！はよ取ろう！」

タタタ・・・

リアン「ん？」

シュル・・・

リアン「2人とも、近づいちゃダメ！」

哀・マリア「え？」

ぐるぐるぐるぐる・・・

哀・マリア「キャアアア！！」

リアン「やっぱり！コイツ、人食い花のガブガブだわ！マジヨミアさんに言われてたのよ！帰らずの森には人食い花がいるから気をつ

けるって・・・」

哀「先に言つてよー！！」

『ガブ、ガブ・・・』

マリア「アカン！コイツ、ウチらを食う気や！！」

哀「ヤダー！！」

スッ・・・

リアン「プゝルカプルリカリリルナポポルト！ガブガブを、消して  
！！」

ボウン！！

ドサッ！

哀「いったー・・・」

マリア「助かったわ・・・あ！魔法ハーブのアップルや！」

リアン「ガブガブの下にあったのね・・・」

モタ「8級試験、合格〜!!」

モタモタ「おめでと〜!!」

リアン・哀・マリア「やった〜!!」

リアン「2時間50分経過・・・かなりギリギリだったわね・・・」

哀「もうあの森は勘弁だわ・・・」

マリア「同感だな・・・」

## エピソード26 みんな不合格！？8級試験（後書き）

リアン「なんとか8級に合格できたね！」

マリア「そやな！」

哀「大変よ！坂本君が警察に捕まったって！」

リアン「ええ〜！？」

マリア「たくま君はそないな事する子とちゃう！何かワケがあるんや・・・」

哀「こうなったら、魔法で原因を探りましょう！」

リアン「次回のChangling Detectiveは『エピソード27 坂本君は不良小学生！？』よ！魔法よ世界を平和に変えて！！」



## エピソード27 坂本君は不良小学生！？

板倉詩織「スクープスクープ！！『恐怖の小学生、坂本たくま！中学生をボッコボコ』！！私の取材によれば、昨日呼び出されたのはこれが理由ね！！」

「やあね、こんな人と同じクラスだなんて・・・」

「中学生って何人？」

「4人はいたみたいね・・・」

哀「中学生どつき回しただって・・・」

リアン「たくま君、何かあったのかな・・・」

マリア「あ・・・」

たくま「・・・」

スッ！

ストツ・・・

リアン・哀・マリア「アゝアア・・・」

澄子「たくま君！マジメに歌いなさいよ！！」

たくま「ガキっぽいからヤダ・・・」

澄子「だったら廊下行きな！！」

たくま「・・・」

スッ・・・

リアン・哀「こわ・・・」

マリア「・・・」

澄子「今日の作文は『私の先生』よ！みんな、遠慮しないで思った

事書いていいからね！」

カリカリ・・・

澄子「・・・ん？たくま！」

たくま「はい・・・」

澄子「それでおしまい？」

たくま「はい・・・」

澄子「じゃ、読んでもらおうか！」

たくま「私の先生・・・ブス！」

ピキーン・・・

澄子「いい度胸ね・・・」

たくま「別に・・・」

澄子「ちよつとおいで！」

リアン・哀「やばぁ・・・」

澄子「やっぱり屋上は気持ちいいね・・・」

たくま「叱るんじゃないんすか？」

澄子「たくま、視力検査受け直した方がいいよ！こんな美人がブスに見えるようじゃ、相当悪いよ！・・・お父さん、帰ってくるんだって？」

たくま「・・・」

コク・・・

澄子「大変だね、単身赴任・・・イタリアだっけ？いつ帰ってくるの？」

たくま「明後日・・・」

スッ・・・

翌日・・・

詩織「スクープスクープ！」

リアン「何？」

哀「どうしたの？」

詩織「坂本たくまが！警察に捕まったの！！」

リアン「まさか・・・」

哀「どういう事？」

マリア「そんな事って・・・」

詩織「帝丹小学校3年B組坂本たくまは昨晚、埠頭にある7番倉庫に無断で忍び込んだ模様・・・この事件に関して同じクラスの皆さんはどう思っているのでしょうか・・・私、板倉詩織がインタビューしたいと思います！」

「まさか彼がそんな事するなんて・・・まだ信じられません・・・」  
「いつかやつちゃうと思ってたわ！あんな不良と同じクラスだなんて・・・」

マリア「ウソやっ！！坂本君はそないな人とちゃう！」

詩織「ウ、ウソじゃないわ！私の情報が信じられないの？その証拠に1時間目は自習のハズよ！」

マリア「ウソウソウソッ！！！」

リアン「マリアちゃん・・・」

哀「お、落ち着いて・・・」

マリア「絶対なんかの間違いや！！ウチ、職員室に行って確かめてくる！！」

タタタ・・・

「まったく！困ったモンですな・・・坂本は先日も問題を起こしたばかりですよ！それが今度は倉庫に忍び込んで警察沙汰とは・・・」  
澄子「事情も聞かずにたくまが悪いと決めつけるのはどうかと思いますが・・・」

「事情も何も、警察でも何もしゃべらなかつたらしいじゃないですか！悪い事してないのなら、何をしてたか言えるハズでしょ？そういうところから非行は始ま・・・」

マリア「ちがいますっ！！」

ガラッ！

マリア「たくま君はそんな人じゃありません！きっと何かワケがあるんです！」

「だったら学校に来てるはずでしょ？学校に来てないのが何よりの証拠！夜の学校に忍び込むなんてね、これは泥棒ですよ、泥棒！！」  
ドンッ！！

澄子「私は生徒を信じています！坂本はそんな事をする子ではありません！」

「そうまで言うならいいでしょう・・・もし坂本が悪事をはたっていた時は責任をとってもらいますからね！」

澄子「わかりました・・・その時は教師を辞めます！！」

リアン・哀・マリア「ええっ！！！！」

リアン「坂本君、倉庫なんかで何してたんだろっ・・・」

哀「問題はそこね・・・」

リアン「このままじゃ、小林先生クビになっちゃうよ・・・」

マリア「行ってくる！！自習時間の間に倉庫まで調べに行ってくる、ウチ！！」

哀「よし、わかった!」

リアン「アタシ達も行くよ!」

ポン!

マリア「プリティウィッチーマリアっち」

哀「プリティウィッチー哀っち」

リアン「プリティウィッチーリアんっち」

## 7 番倉庫

哀「調べるって言うても、どうやって調べる?」

リアン「こういう時は、マジカルステージよ!」

リアン「プゝルカプルリカ和やかにゝゝゝ」

哀「レイレイシャゝイニー華やかにゝゝゝ」

マリア「スィールクゝジェルクゝ清らかにゝゝゝ」

リアン・哀・マリア「マジカルステージ!!坂本君が何をしてたか教えて!!」

カアッ!!

ヒュルルルゝゝゝ

カランゝゝゝ

マリア「これって、ビデオのリモコンゝゝゝやんな?」

哀「どういう事?」

ピッ!

リアン「あ、写った!昨日の様子が写ってるんじゃない?」

スッゝゝ

リアン・哀・マリア「あゝっ!!」

マリア「たくま君?」

哀「何か持つてる・・・」

リアン「カバンみたいね・・・」  
フツ・・・

哀「あ！消えた・・・」

リアン「あ、何かあったよ！」

哀「開けてみましょう！」

マリア「え？なんでこんな物が・・・」

リアン「トランペット？」

マリア「練習してたんやろか、たくま君・・・」

たくま「あ！オマエら・・・」

リアン・哀「ゲッ！！」

マリア「たくま君・・・」

ザッ！

澄子「やっぱりここにいた！ん？リアンちゃん達はどうしてここに  
いるの？」

澄子「なるほどね・・・夜の倉庫なら人目につかず思いっきり練習  
できると思ったワケだ・・・」

たくま「うん・・・練習してるところを人に見られるのが恥ずかし  
いから・・・」

澄子「わかるよ、それ・・・小学校の先生になるにはピアノの練習  
をするんだけどね・・・ピアノなんて私のガラじゃないし・・・そ  
れで人目につかないように猛練習したのよ・・・たくま君のお父さ  
ん、明日帰ってくるんだって・・・」

哀「そりゃ練習がいるよね・・・」

マリア「あ、じゃあ中学生ボコボコ事件も？」

たくま「いつもの空き地で練習したら、急に絡んできてトランペットケリやがったから・・・」

「マリア、ひどいわ!」

澄子「でもケンカはよくないよ、ケンカは・・・」

マリア「あ、はい……」

た く ま

## エピソード27 坂本君は不良小学生！？（後書き）

哀「7級試験、意外とあっさり合格したよね〜！」

マリア「ええんかいな、ああいうので・・・」

哀「ま、いいんじゃない？」

マリア「あゝ、リアンちゃんがケガをしたウサギの命を救おうとしてる！！」

哀「ダメよ、リアンちゃん！！ケガを治すのは禁断の魔法でしょ！

！お願い、考え直して！！」

リアン「次回のChangling Detectiveは『エピソード28 使っちゃダメ！禁断の魔法』よ！魔法よ世界を平和に変えて！！」



## エピソード28 使っちゃダメ！禁断の魔法

MAHO堂

ナナ「今夜はいよいよ7級試験ね！」

マジョミア「言っておくけど、7級試験は9級や8級のように甘くはないわよ！」

リアン「大丈夫ですよ、心配しないでください！」

マリア「当たって碎けるっ！！！」

哀「碎けちゃダメでしょう・・・」

リアン・哀・マリア「えええっ！！今回の試験はなしっ！？」

モタ「そうなのよ。」

モタモタ「温泉旅行のチケットが懸賞で当たって、今日行かなくちゃならないの。だからあなた達の試験はこれで合格よ。」

マリア「それでええんかいな・・・」

モタ「あ、そうそう、7級になれば植物と話せるようになるからね。」

モタモタ「じゃあねっ！！」

ポン、ポン！！

マリア「試験もなしに合格って・・・」

哀「ま、いいんじゃない？」

リアン「とりあえず、帰ろっか！」

翌日

リアン「よし、よく食べてるな・・・」

哀「リアンちゃん、ウサギの世話？」

リアン「ええ。歩美ちゃんがずっとかわいがってたウサギだからね。歩美ちゃんがいらない分、アタシがちゃんと世話しなくちゃ・・・」

マリア「うちらも手伝うよ。」

リアン「ありがとう。」

しかし、数日後・・・

リアン「フウ、ウサギ元気にいるかなあ？」

タタタ・・・

リアン「あゝ！！ウサギが・・・！！」

だきっ・・・

リアン「ひどいケガ・・・きつと、昨日誰かがドアを開けっ放しにして、中に入ってきた野犬に襲われたんだわ・・・とにかく、動物病院に・・・」

リアン「入院ですか・・・？」

「ええ。今日はとりあえず当院で治療した上で、検査入院という形になります。まあ、ケガの方は浅いようですし、大丈夫だと思いますよ。」

リアン「ハア・・・」

リアン「・・・」

カチャカチャ・・・

ナナ「リアンちゃん、なんか様子が変ね・・・」

マジヨミア「何かあったのかしら・・・？」

哀「リアンちゃんの様子がおかしいの。」

マリア「ほな、学校にある木に聞いてみよか。」

哀「レイレイシャ〜イニーフ〜ワフワフー！桜の木と話せるようになれー！」

カッ！

哀「桜さん、リアンちゃんは どうして様子がおかしいんですか？」

『それはね、ウサギが大ケガをして入院してるからだよ・・・』

マリア「大ケガ・・・ほな、まさかリアンちゃん・・・」

リアン「これしかないの・・・ウサギを救うためには、これしか・・・プルカプルリカリルルナポポルト！ウサギのケガよ、治れえ

!!」

カッ!!

ムクッ・・・

スッ・・・

「し、信じられん・・・自力で立てなかったウサギが、立ち上がったぞ!!」

リアン「よかつ・・・た・・・」

ドサッ・・・

ヒューン・・・

スタッ!

哀「リアンちゃん!!」

マリア「遅かった・・・!!」

哀「スゴイ熱だわ・・・」

リアン「ん・・・うう・・・」

哀・マリア「リアンちゃん!!」

リアン「哀ちゃん、マリアちゃん・・・」

マジョミア「まったく・・・あれほど言ったのに禁断魔法を使うなんて・・・ウサギの代わりにリアンちゃんが死んでも、おかしくなかったのよ!!」

リアン「ごめんなさい・・・」

哀「でも、どうしてリアンちゃん無事なんですか?」

『私が代償の力を弱めたからです・・・』

マジョミア「その声は女王様・・・」

『リアンちゃんの優しさに免じて、今回は特別に許しますが、罰として今日から10日間、リアンちゃんは魔法を使えないようにします・・・』  
カアッ!

シューン・・・

『10日間の間、あなたは魔法を使えません。よろしいですね？』  
リアン「はい・・・」

## エピソード28 使っちゃダメ！禁断の魔法（後書き）

哀「さて、禁断の魔法を使った代償で、10日間魔法が使えなくな  
ったリアンちゃん！」

マリア「自業自得とはいえ、なんか同情できるな・・・」

リアン「ありがとう・・・え？キャアアア！！」

マリア「大変や！リアンちゃんがさらわれた！」

哀「あれって、もしかして・・・黒の組織・・・！？」

リアン「次回のChangling Detectiveは『エピソード29 リアンちゃん、黒の組織に捕まる！！』よ！魔法よ世界を平和に変えて！！」

## エピソード29 リアンちゃん、黒の組織に捕まる!!

『罰として今日から10日間、リアンちゃんは魔法を使えないようにします……』

カアッ!

シューン……

『10日間の間、あなたは魔法を使えません。よろしいですね?』

リアン「はい……」

『10日目の夕方、魔法が使えるようになるでしょう……』

リアン「今日で10日……また魔法が使えるようになるのね……」

「

ド・ミ・ソ・ド!

シューン……

リアン「ハア……早く夕方にならないかなあ……」

MAHO堂

哀「おっはよう!!」

マリア「おーっす!!」

ナナ「今日はずいぶん速く来たのね？」

哀「だって、今日はリアンちゃんが罰を受けて10日目じゃない！」

マリア「また一緒に魔女見習いできると思ったら、うれしいんや！」

マジヨミア「言っておくけど、罰が解けるのは夕方なのよ？」

哀「わかってますよ！」

ナナ「なんか空の様子がおかしいね・・・」

リアン「フウ・・・ハア・・・」

リアンは空を見上げた。

リアン「まだだいぶ時間があるわね・・・ハア・・・」

リリ「リリ、リリ・・・（ため息ばかりついていては、幸せが逃げますよ？）」

リアン「リリ・・・ありがと・・・」

「その通り・・・」

リアン「え？」

ザッ・・・

「まさか、そんな姿になっているとは・・・気づかなかったぜ・・・」

リアン「ア、アンタは・・・!!」



哀「何？この感じ・・・」

マリア「スゴく邪悪な気配や・・・」

哀「ま、まさかこの感じは!!」

ダッ!!

マリア「ちよつ、哀ちゃん!？」

リアン「ウ、ウォッカ・・・」

ウォッカ「ホオ・・・オレの名前を知っているのか・・・」

「当然だな・・・ソイツはオレ達の姿を見た事があるんだからよ・・・」

リアン「ジ、ジンまで・・・」

哀「私の予感が正しければ・・・この気配の正体は・・・」

ザッ!!

哀・マリア「!!」

ドウ!!

リアン「うつ・・・」

ドサッ・・・

ジン「ウォッカ、コイツを連れて行くぞ・・・」

ウォッカ「わかりました。」

ヒョイ！

ザッザッ・・・

ジンはリアンを車に押し込むと、ウォッカと共に車で走り去った。

ブオオオオオ・・・

哀「リ、リアンちゃん・・・」

ジン「ここに入ってる。」

ドン！

リアン「キャッ！！」

ドサッ！

リアン「イタタ・・・」

ジン「ウォッカ、目隠しを外してやれ。」

ウォッカ「はい。」

パサッ・・・

リアン「ジン・・・」

牢屋に押し込められたリアンは、ジンをにらみつけた。

彼女は今、両手を前にされ、手錠をかけられている。

ジン「オマエの始末は、上と相談して決める・・・せいぜい、良い

夢でも見てるんだな・・・ウォッカ！ソイツを監視してろ。逃げら

れては困るからな。」

ウォッカ「わかりました。」

ジン「じゃあ、オレは幹部と話をしてくる。」

そう言くと、ジンはその場を後にした。

取り残されたリアンと、彼女を監視しているウォッカ。  
ウォッカはさつきから、リアンをマジマジと見つめている。

リアン「な、何よウォッカ？アタシはこれでも工藤新一なのよ？そんな目でジロジロと見ないでくれる？」

ウォッカ「わ、悪い・・・それにしても、こんな姿になるとは・・・本当に薬の副作用じゃないのか？」

リアン「副作用なんかじゃないわ。それに、もしそうだったらとつくに哀ちゃんに解毒剤頼んでるわよ・・・」

ウォッカ「それもそうか・・・」

そう言くと、ウォッカはリアンに近寄ってきた。

リアン「な、何？ウォッカ・・・」

ウォッカ「こうしてみると、名探偵のオマエさんもけっこうカワイイなあ・・・アニキもいないし、ちょっとだけ・・・」

リアン「あ・・・あ・・・」

リアン「キャーッ！！！！」

ジン「ん？」

リアンの悲鳴が気になったジンは、リアンを閉じ込めている牢屋に向かった。

ジン「おい、どうした・・・」

リアン「この変態！スケベ！！ロリコンッ！！！！」  
ドカバキゴスッ！！！！

ジンが見たものは、リアンにボコボコにされているウォッカの姿であつた・・・

ジン「何をやってるんだ、ウォッカは・・・」

ジンはなかばあきれていた。

エピソード29 リアンちゃん、黒の組織に捕まる!!（後書き）

哀「ジンとウォッカにさらわれたリアンちゃんを助けるため、追跡メガネで後を追う私達!」

マリア「リアンちゃん、大丈夫やるか・・・妙な事になってへんかったらええんやけど・・・」

哀「そして、アジトにたどり着いた私達が見た、衝撃の結末とは・・・?」

リアン「次回のChanging Detectiveは『エピソード30 リアンちゃん、ジンを自首させる』よ!魔法よ世界を平和に変えて!!」

## エピソード30 リアンちゃん、ジンを自首させる

リアンがさらわれた事に、哀はまったく驚いていなかった。  
なぜなら・・・

マリア「哀ちゃん！リアンちゃんがさらわれたいうのに、すごい落ち着いてへんか？」

哀「だってジンのヤツ、甘いんだもの・・・この追跡メガネで彼女の探偵バツジの場所を探せば、リアンちゃんなんてすぐに見つかるのよ！！アゝハツハツハツ！！」

マリア「哀ちゃん、なんか性格変わったな・・・」

もちろん、そう簡単にいくわけもない。  
誘拐した犯人がヤツらだからだ。

その頃、リアンはというと・・・

リアン「この変態！スケベ！！ロリコンッ！！」

ドカバキゴスッ！！！！

ジン「何をやってるんだ、ウオツカは・・・」

ウオツカ「ア・・・アニキ助けて・・・このままじゃ殺されやす・・・」

・

ジン「しょうがねえなあ・・・」

ジンはめんどくさいと思いながらも、牢屋の中に入り、リアンを抱き上げた。

ガバッ！

リアン「キャゝ、キャゝ、キャゝ！！」

ジン「おとなしくしろって・・・ん？」

リアンのポケットから、何かがはみ出しているのが見えた。

ジン「なんだ、これは？」

ジンはリアンの探偵バッジを取り上げた。

リアン「あ、それは・・・」

ジン「（きつとこれは、発信器と盗聴器だな。）」

そう思ったジンは、バキツとバッジをつぶした。

リアン「ああっ！！お父さんに初めて買ってもらったアクセサリーが・・・」

ジン「いいっ！！？」

リアン「うえゝん・・・」

そう言くと、リアンは突然泣き出した。

ジン「こ、これ、そんなに大事な物だったのか・・・？」

リアン「う、うん・・・」

リアンはまだ泣いている。

もちろん、ウソ泣きなのだが・・・

ジン「ウオツカ！オマエがちゃんと言ってくれないから、コイツの大事な物壊しちゃったじゃねえか！！」

ウオツカ「えっ・・・」

つて、ジンさん！

人に罪なすりつけちゃダメでしょ・・・

ジン「壊してしまった責任は取ろう・・・何か欲しい物はあるか？」

リアン「じゃあ、夕食は特上のしゃぶしゃぶがいい！！」

ジン「わ、わかった・・・ウオツカ、聞いたな？今夜はしゃぶしゃぶだ！！部下達と上肉買いに行つてこい！！」

ウオツカ「アニキは？」

ジン「オレはコイツとのんびり待ってる。」

ウオツカ「ハアア！！？」

バチッ！

哀「いつっ！！」

マリア「どないしたん？」

哀「どうやら、探偵バッジ壊されたみたいよ・・・」

マリア「アカンやんか、それ！！」

哀「だよねえ・・・でも、なんか忘れてる気がするんだけどなあ・・・」

マリア「ああっ！そういえばウチら、今は魔女見習いやないか！」

哀「あ、そっか！魔法使えばよかったんだ・・・」

マリア「最初から気づけや・・・」

リアン「おいしー！絶品ね、このしゃぶしゃぶ！」

ジン「そ、そうか！喜んでくれてよかった。」

リアン「アタシ、ステーキとお寿司も食べたいなー。」

ジン「わかった・・・ウオッカ、買って来ーい！」

ウオッカ「へーい！」

タタタ・・・

ジン「ところで、工藤新一・・・」

リアン「今は江戸川リアンよ。」

ジン「リアン・・・ウチの組織に来ないか？」

リアン「・・・え？」



その頃、哀とマリアは透明魔法で姿を隠し、空を飛んでいた。  
哀「早くリアンちゃんを見つけないといけないわね。」  
マリア「そやね・・・そやないと今頃リアンちゃん・・・」

ジン『フッフッフ・・・カワイがつてやるぞお嬢ちゃん・・・』  
リアン『イヤアアアア・・・』

マリア「何て事に・・・」  
哀「ジンくっ！もしそんな事してたら絶対に許さないんだからくっ！」  
マリア「あ、哀ちゃん・・・？」

ジン「オレ達の仲間にならないか？仲間になったらシェリーの事もオマエの事も見逃そう・・・な？悪い話じゃないだろ？」  
リアン「別にいいんだけどさあ・・・どうしてジン、自首しないの？」  
ジン「そんな事できるワケないだろう・・・オレは組織の幹部にして、ボスなのだから・・・」  
リアン「だからよ！たった一度きりの人生なのよ？こんな事で、あなたの優しい心を汚しちゃダメ！！」

ジン「し、しかしだなあ・・・」

リアン「もし自首して罪を償ってくれるのなら、アタシ・・・今度あなたやウォッカと1日デートしてあげる!!」

ジン「ほ、本当か!？」

リアン「うん」

ジン「（な、なんて純粹で優しい瞳だ・・・オレはこんなカワイイ子に今までヒドい事をしていたのか・・・!!）」

ウォッカ「兄貴ー、買って来やした・・・」

ジン「ウォッカ・・・オレはもう決めた!」

ウォッカ「え？」

しばらくして、哀とマリアはリアンがいる場所へと着いた。  
トンッ!

哀「魔女服を解除してつと・・・」

スウ・・・

マリア「行くでえ!!」

哀「リアンちゃん!!」

マリア「助けに来たで!!」

バン!

哀「大丈夫・・・え？」

ジン「約束だ、リアン!」

リアン「もちろん」

哀「あの、リアンちゃん・・・?」

ジン「その声、シェリーか・・・」

哀「ジン!!」

ジン「シェリー、聞いてくれ。オレは・・・オレは警察に自首する

「！！」

哀「え．．．ええっ！！？」

マリア「そんなアホな．．．」

その後、ジン達は警察に自首した。

・ ジンとウォッカの爽やかな笑顔が、少し疑問になった哀であった．．．

## エピソード30 リアンちゃん、ジンを自首させる（後書き）

哀「スゴいわね、リアンちゃん。あのジンを自首させるなんて・・・」

「

リアン「そう？話してみたら結構良い人だったんだよ！」

マリア「そういう事平気で言えるアンタはスゴいわ・・・」

リアン「さて、アタシも魔法また使えるようになったし、MAHO堂をがんばろーっ!!」

哀・マリア「おー!!」

『フッフ・・・そう簡単にいくかな?』

リアン・哀・マリア「だ、誰!?」

リアン「次回のChangling Detectiveは『エピソード31 ライバル登場!その名はマジョルア』よ!!魔法よ世界を平和に変えて!!」

## エピソード31 ライバル登場！その名はマジョルア

MAHO堂は、今日も盛況だった。

ナナ「今日も大繁盛ね・・・」

マジョミア「リアンちゃん達もがんばってるからね。」

リアン「ありがとうございます。」

哀「グッズの数も割と増えましたからね・・・」

マリア「ウチらの腕も上がってきたんちゃう？」

その時、どこからか歌声が・・・

「あゝあゝあゝ」

マジョミア「ハアゝ、またか・・・」

ボウン！！

デラ「皆さんゝこんにちはゝ今日は面白い商品を持ってゝ来ましたゝデラよゝゝ」

マジョミア「デラ・・・毎回歌歌いながら煙上げて登場するのはやめてくれない？」

デラ「いいじゃない、これでも自重してるんだから・・・」

マジョミア「（どこがよ・・・）それより、今日は面白い物を持っ  
て来たんだって？」

デラ「そうそう！魔法玉と交換したトランプセット！せっかくだから、ポーカ―でもやらない？」

マジョミア「いいわね。でもただやるだけじゃ面白くないから・・・  
何か賭けない？私が勝ったら、魔法玉の代金をまけてくれるとか。」

デラ「いいけど・・・私が勝ったら代金は倍額よ！」

マジョミア「フォーカード！」

デラ「負けた・・・」

マジョミア「今日の私は運がいいわ！借金がチャラになるところか、大儲け！」

デラ「クッソ、もう1回よ！」

マジョミア「甘いわね……」

マジョミア「ロイヤルストレートフラッシュ」

デラ「また負けたあ……どうして？なんで30回もやって1度も勝てないのおー！？」

ナナ「デラもマジョミアのクジ運の強さは知ってるでしょ？これ以上やってもムダよ。」

デラ「仕方がないわ……約束通り、魔法玉をあげる……じゃあねっ！フンツ！！」

デラは不機嫌な顔で消えた。

マリア「何や、今日は偉い不機嫌やったな。」

ナナ「デラはマジョミアの同級生でね、昔は一番の賭博師だったのよ。でも、ある日マジョミアにコテンパンに負かされてから、いつかマジョミアに勝ってやろうとしてるんだけど……ムリがあるのよねえ……」

リアン「とりあえず、サツサと準備しよう！」

そして翌日……

リアン達が学校に着くと、何やら教室が騒がしかった。みんなが固まって、何かのチラシを見ている。

そこには……

『元祖MAHO堂新オープン!』

リアン・哀・マリア「が、元祖MAHO堂!？」

リアン達は学校が終わると、真っ先にMAHO堂に駆けつけた。

リアン「マジョミア!!」

マジョミア「何だ、リアンちゃん達か・・・」

哀「よかった、MAHO堂は無事みたい・・・」

マリア「ほなら、元祖MAHO堂って何やねん？」

「アタシの店の事さ!」

リアン・哀・マリア「？」

リアン達が空を見上げると、ホウキに乗った女が降りてきた。

マジョミア「やっぱりあなたか・・・マジョルア・・・」

リアン「マジョルア？」

マジョルア「久しぶりね、マジョミア・・・しばらく見ない間に随分小さくなったじゃないか？」

マジョミア「ちよっと成り行きで、そのポニーテールの女の子を助けちゃってね・・・」

マジョルア「フーン、相変わらずお人好しだねマジョミアは・・・そんなんだから魔女ガエルになっちまったんじゃないのかい？」

マジョミア「余計なお世話よ・・・それより、用件を言いなさいマジョルア・・・」

マジョルア「実はアタシもMAHO堂を開く事にしたんだよ。この通りちゃんと営業許可証ももらってある。」

マジョミア「また私と張り合う気?あなた、魔法グッズ作りで私に勝った事ないんじゃないかしら？」

マジョルア「それは、魔女同士だったらの話よ。今のアンタじゃ、

アタシには勝てないさ・・・」

マジョミア「フン、せいぜいほざいてなさい・・・またいつかの日みたいに叩きのめしてあげるから・・・」

マジョルア「それはこっちのセリフよ・・・」

マリア「なあ、マジョルアって何者なん？」

ナナ「マジョルアはね、マジョミアの魔法学校時代の同級生だったの。ホウキの乗り方も魔法グッズの作り方も魔法の腕もマジョミアの方が上で、彼女はいつも悔しがっていたわ・・・そして、あのMAHO堂の営業権利についてもね・・・」

哀「MAHO堂の？」

ナナ「MAHO堂の経営者は、時期女王になれるといわれているの。今の女王様も、昔はMAHO堂のオーナーだったのよ。そしてMAHO堂のオーナーの権利は、女王様の厳正・・・なるあみだくじの結果、マジョミアだったの。」

マリア「何ちゆう強運や・・・」

マジョミア「あの時あの子かなりへこんでいたから、もう挑戦してこないと思っていたのに・・・ホントしつこいわ・・・」

哀「じゃあ、今のあなたじゃ勝てないっていうのは？」

マジョミア「それはね、魔法グッズに願いの力を込めるには、魔女の髪の毛が必要だからよ・・・」

マリア「ええ！ほな、勝てへんのとちゃうん？」

マジョミア「大丈夫よ、私を誰だと思ってるの？私が本気を出せば、髪の毛の1本や2本ぐらいチョロいものよ・・・」



しかし、マジョルアの魔法グッズの方が飛ぶように売っていて、M A H O 堂はなかなか商品が減らなかった。

リアン「今日もお客さん来ないね・・・」

哀「やっぱり魔女ガエルと魔女じゃ、力の差が歴然なのかしら・・・」

「

マジョミア「そんな事ないわよ！あなた達のクラスメート達はよく買いに来てくれるし、それに強力な魔法グッズには反作用があるからね・・・今にきつと、返品の苦情が殺到するハズよ！」

哀「そうなんですか？」

ナナ「リアンちゃん達魔女見習いの魔法グッズとちがって、魔女の魔法グッズは力が強い分、反作用があるし大きいのだ。」

マジョミア「まあ、後少しの辛抱よ！それより、確か明日の夜は6級試験があるハズだから、がんばりなさい！」

リアン・哀・マリア「はいっ！！」

## エピソード31 ライバル登場！その名はマジョルア（後書き）

リアン「マジョルアのグッズの反作用で、元祖MAHO堂に苦情が発生！」

哀「そんな中、私達は6級試験を見事合格！」

マリア「新たな力で、マジョルアなんかコテンパンにしたるで〜！」

哀「でも、やっぱり相手は魔女・・・私達、ちよつと大ピンチです！！」

リアン「次回のChanging Detectiveは、『エピソード32 マジョルアVS6級魔女っ娘』よ！魔法よ世界を平和に変えて！！」

## エピソード32 マジョルアVS6級魔女っ娘！！

マジョルアの店の客足が少し途絶え始めた頃、リアン達は魔女界で6級の試験を受けていました。  
その内容とは・・・

哀「何で6級試験が魔女界でバイトなワケ・・・？」

マリア「オマケに、薪割りやなんて・・・」

リアン「文句言わないの！これをすれば試験合格なんだからがんばりなさいってマジョミアさん言ってたでしょ？がんばりましょう！」  
哀・マリア「はい・・・」

そして、1時間近くかけてようやく薪を全て切り終えた。

「思ったより早かったわね！あなた達の先輩より早かったわ！はい！女王様からの魔法玉よ！！」

リアン・哀・マリア「あ、はい！！」

リアン達は期待して受け取ったが・・・

手には1つずつの魔法玉が・・・

リアン・哀・マリア「えっ！？たったこれだけえ！？」

モタモタ「1個で十分よお！全員6級合格！！」

リアン・哀・マリア「えっ！？」

モタ「6級の試験課題はね、魔法玉をいかにして手に入れるかだったのよ！」

リアン「マジョミアさん・・・そういう事なら先に言ってくれば良かったのに・・・」

モタモタ「じゃあポロンをバージョンアップしてあげるから、自分が一番大切にしている楽器を持って来て！」  
リアン・哀・マリア「一番大切にしている楽器？」

マリア「ウチはこのハーモニカや！」

哀「私はこのオカリナ！小さい頃お姉ちゃんにプレゼントしてもらったの！」

リアン「アタシはこれ！4歳の時、初めて買ってもらったバイオリン・・・」

モタ「それじゃ、行くわよー！！」

カアッ！！

ポウッ！

シュルルル・・・

パシ！

モタ「それが新しいポロンよ！中に入ってる魔法玉も新しい魔法玉で、今までの3倍の効き目があるのよ！」

リアン・哀・マリア「やったあー！！！」

数日後・・・

マジョルア「フンフンフン フェフェー！下着とバスローブ、持って来ておくれ！」

フェフェ「もー・・・めんどくさいなー・・・」

マジョルア「あ、それからその服も洗濯しとくんだよ！」

フェフェ「はいはい・・・まったく・・・人使い・・・じゃない、妖精使いが荒いんだから・・・」

「こらあーっ！！」

フェフェ「うわっ！？」

「アンタの所の魔法グッズは、願い事は叶う代わりに汚したり病気になるらしいじゃないか！！店員達では話にならん！！店主を出しなさい！！」

マジョルア「おだまり！アタシが店の主人だよ！！元祖MAHO堂では苦情は返品は一切受け付けん！！」  
「ふざけるなっ！！わーっ！！」

マジョルア「全く、人間共め！！」

フェフェ「マジョルアの魔法グッズを使って願いが叶えば、その反動で何か悪い事も起こるってちゃんと言わなかったからいけないんじゃないの？」

マジョルア「バカか、オマエは！そんな事言ったら魔法グッズが売れなくなってしまうよ！！アタシはもう1度フロに入ってくるからね！！オマエ達は元通りにしとく事！！」

フェフェ「はい・・・」

「フェフェさん！これもう売り物になりませんが、どうします？」

フェフェ「今日燃えないゴミの日らしいから、全部出しちゃえば？」

「まだ使えそうな水晶玉もありますけど？」

フェフェ「いいからもう全部ゴミに出しちゃってよ！」

ナナ「……」

そーっ……

マジョルア「何ーっ!？」

ナナ「!」

マジョルア「水晶玉を燃えないゴミに出しただーっ!？サツサと探して回収して来な!！」

ナナ「……というワケなのよ。」

リアン「アタシ達がマジョルアより先に水晶玉を見つけるしかないわね。」

マリア「行くで!！」

哀「ゴミはもう処理場に行っちゃったと思うわ。」

マジョルア「ったく……いつまでかかってるんだろっね、役立たず共が……!」

ペチャクチャペチャクチャ……

マジョルア「ア……イツら……」

マリア「この中にあるんやな?」

哀「広いわね……」

リアン「新しいクラウンポロンを試すチャンスね!プー!ルカプルリカリリルナポポルト!マジョルア的水晶玉、出て来い!！」

カァッ！

ババババツ・・・

リアン「あら？」

哀「リアンちゃん、あれ！」

キラッ・・・

マリア「よっしゃあー！」

「ゴミ処理場とは気がつきませんでした・・・さすがマジョルア様・

・・・」

タツ！

マジョルア「うつ！？」

マリア「遅かったな！」

リアン「水晶玉はアタシ達が見つけたわよー！」

マジョルア「むう、魔女っ娘の分際で・・・返せーっ！！」

リアン「返してもいいけど、条件があるわ！魔法グッズの魔力を消してー！」

哀「これ以上みんなを不幸にするのは許せないわー！」

マリア「これからもそんな魔法グッズは作らへんて約束してー！」

マジョルア「ウーム、仕方ないね・・・わかったよ、言う通りにしよう・・・さあ、水晶玉を返しておくれ！」

リアン「うん！」

リアンはマジョルアの所へ走った。

サッ！

リアン「え？」

マジョルア「じゃあな！礼を言うよ！」

リアン「ちよつと待ってよ！魔力を消してよ！」

マジョルア「そんな話、知らないねえ・・・」

マリア「だましたんやな！？最低！マジョミアさんよりもえげつな

いわー!!」

マジョルア「マジョミアよりえげつない?」

哀「あんな姿してるけど、マジョミアさんはあなたより成実だし、優しいし・・・人をだましたりはしないわ!!」

マジョルア「言わしておけば・・・ならばアタシが本物の魔女の力を思い知らせてあげるよ!このアタシに魔法で勝てたら、グッズの魔力を消した上にここから去ってやろうじゃないか!!その代わりにアタシが勝つたら・・・一生ウチの店でタダ働きしてもらうからねっ!!」

ボンッ!

ゴオオオオ・・・

ナナ「キャーッ!!」

マリア「くぅ・・・」

リアン「絶対負けないわよ!!プルカプルリカリルナポポルト!マジョルアの苦手な物、出て来い!!」

ポンッ!

リアン「・・・ハ?誰でも寒がるオヤジギャグ辞典?」

マジョルア「プーッ!!」

リアン「日曜に遊園地連れて行ってくれないと許サンデー・・・」

マジョルア「プーッ!サンデーと許サンデー・・・」

リアン「月曜雨でも学校休マンデー・・・火曜は彼氏とチューズルデー・・・」

マジョルア「ギャハハハ!!ヒーヒー!お、恐ろしい技だ・・・こうなったら容赦しないよ!」

ゴゴゴゴゴ・・・

リアン・哀・マリア「わぁっ!!」

ズーン!!

哀「レイレイシャ〜イニーフ〜ワフワフー!ロボットよ凍れ!!」  
パァン!

マリア「スィールク〜ジェルク〜ロリポップ〜キャンディ!ロボット



よ小さくなれ!!」

パン!

ズーンズーン!

マリア「ダメやあ!!」

マジョルア「ホホホ!踏みつぶしてしまっわよ!!」

マジョミア「何をやってるの!」

リアン「マジョミアさん!」

マジョミア「冷静になってよく考えて!相手はゴミの寄せ集めよ!」

リアン「そうだわ!プゝルカプルリカリルナポポルト!掃除機、

出て来い!!」

ポワア!

哀「レイレイシャゝイニーフゝワフワフー!掃除機、大きくなあれ!!」

ボンツ!

マリア「スィールクゝジェルクゝロリポップゝキャンディ!ほんでもって、ロボットを吸い込んでまえゝ!!」

シュウウウ・・・

スポツ!

マジョミア「ナイス連係プレーよ!」

ナナ「ついでにマジョルアも吸い込んだじゃえ!」

ゴオオオオ・・・

マジョルア「ぎえゝっ!!」

マジョルア「サツサと水晶玉を返しなよ。」

マリア「またえげつない事する気やないやろな?」

ナナ「大丈夫!そんな事したら、6級の魔女見習いに負けた事を魔女界中に言いふらすから。」

マジョミア「これに懲りて、もう2度とMAHO堂の妨害をしよう

なんて考えない事ね！」

マジヨミア「では始めるわよ！」

リアン・哀・マリア「はい！」

リアン「プゝルカプルリカ和やかにゝ．．．」

哀「レイレイシャゝイニー華やかにゝ．．．」

マリア「スィールクゝジェルクゝ清らかにゝ．．．」

リアン・哀・マリア「マジカルステージ！！マジヨルアの魔法グッズから魔力よ消えて！！」

ポウ．．．

カアア．．．

リアン「これで一安心ね！」

マリア「妨害もなくなっただし．．．」

哀「明日からまたがんばりましょうー！！」

## エピソード32 マジョルアVS6級魔女っ娘！！（後書き）

リアン「マジョルアも追っ払ったし、亜安心してMAHO堂再開できるね！」

哀「そうね！けどその前に・・・夏恒例のアレがあるじゃない！」

リアン「作者の世界では今は冬だけだね・・・」

哀「仕方ないじゃない、他の作品にかかりつきりで忙しかったんだから！」

マリア「そりゃそうやけど・・・」

リアン「夏休み恒例と言われる肝試し！マリアちゃんはメチャ苦手・・・」

マリア「ウ、ウチ、そういうのアカンねん・・・」

哀「一体何が起きるのか!？」

マリア「起きたらイヤや〜!!」

リアン「次回のChangling Detectiveは、『エピソード33 幽霊に会いたい!!』よ！魔法よ世界を平和に変えろ!!」

### エピソード33 幽霊に会いたい!!

今日リアン達は、クラスメートでありお寺の住職の娘でもある石川道子の家、石川寺にやって来た。

帝丹幼稚園の頃から石川と仲良しである歩美達3人は、夏休みの時期になると毎年お寺に遊びに来ていたらしい。

そんなワケで、リアンと哀、たくまとマリアも参加する事になったのだが・・・

「それじゃあみんな、覚悟はいいな？せーの・・・」

「たのもーっ!!」

ギイ・・・

石川道子（コナン達のクラスメート）「皆さん、ようこそいらっしやいました!!」

リアン「スゴーい！何だか緊張しちゃうね!!」

道子「それじゃあ、そろそろ始めましょうか・・・夏休み最後の良なお話は、ある檀家さんのお話です・・・」

「石川のこれを聞かなきゃ・・・夏休みは終わんねーもんな!!」

マリア「・・・え?・・・え?良いお話なんやろ?えっ?」

道子「その方は、息子さんを亡くしたばかりで、毎日のようにお墓に通っていたそうです・・・そんなある日、1人の少年に出会ったそうです・・・そして次の日も・・・雨だというのに傘も差さずにそこに立っていたそうです・・・」

『こんな所で何をしてるの?』

『待つてるの・・・お母さんの仕事が終わるまでここで待つてる約束だから・・・』

『約束？』

道子「それ以上何を聞いても、男の子は答えてくれなかったそうです・・・」

リアン「何で？」

哀「いいから黙って聞く！」

道子「毎日のようにそこにいて、寂しげな表情を見せる男の子・・・いつしかその方は少年の笑顔が見てみたい、そう思うようになっていったそうです・・・でもその男の子に何を語りかけても、寂しげな表情は変わらなかった・・・そんな事が続いたある朝・・・」

『おばさん！今までありがとう！やっとな明日お母さんに会えるの！』

『よかったわね！』

『うん！』

道子「そう言つて笑つた少年の顔を見た時、とても幸せな気持ちになれたそうです・・・めでたしめでたし・・・」

「えっ、それで終わり？」

哀「何か拍子抜けね・・・」

リアン「ウソーン！」

マリア「ええ話やない・・・」

道子「実はこの話には後日談があるんですよ・・・」

リアン「そうこなくっちゃ！」

マリア「あゝっ！！」

道子「それから何日か過ぎたある日・・・」

カラン！

『！？あの男の子に何かあつたんですか？』

『男の子？亡くなつたのは宅の主人の奥さんでございます・・・』

道子「その墓前には、あの時自分に見せてくれた少年の笑顔があったといひます・・・亡くなつたのは、息子さんを小さい時に亡くしたお医者様で・・・」

『先生、急患です!』

『申し訳ありませんが、他の先生に・・・』

『お母さん・・・行つてあげて・・・』

『でも・・・』

『ボクは大丈夫だから、患者さんを助けてあげて・・・お母さんの仕事が終わるまで、ボク待つてゐるから・・・約束するから・・・』

『わかつたわ・・・すぐ戻つて来るから!』

『うん・・・』

道子「でも母親は少年の死に目に会う事はできませんでした・・・」

『うつうつ・・・母さん、約束するわ・・・これ以上あなたのような子を増やさないように頑張るから・・・』

道子「母親は少年との約束を守り、たくさんの患者を助け・・・少年は母親の仕事が終わるのをずっと待つていたのです・・・」

「イヤゝツ!!」

マリア「イヤやあ!!」

「マリアちゃん?」

マリア「そやかてその男の子、幽霊なんやろ!? お母さんを迎えに来たつて事やろ!？」

哀「いい話じゃない・・・」

「オマエが一番怖えよ・・・」

「東尾、後ろに何かいる!」

マリア「ヒゝツ!! アカンゝツ!!」

「右肩にも何かいるぞ!!」

マリア「イヤイヤ!! もうアカン・・・」

ヒクヒク・・・

「ハハハ・・・」

道子「その柱に近づかない方がいいですよ・・・」

「・・・ハ?」

道子「いるんですよ、そこに1人・・・」

「1人?」

「ギャッッ!!」

リアン「やつぱ、道子ちゃんが言つと迫力が違うな・・・」

マリア「ムリムリ! あんなお話の後に肝試しなんて!!」

リアン「ああいう話の後だから楽しいんじゃない!」

哀「オバケなんて出るワケないって!」

ブンブンッ!

リアン「マリアちゃん、怖くなったらマジョルアを思い出すのよ! マジョルアに比べたら、幽霊なんてカワイイものよ!」

哀「そうよ! あのだ底意地の悪さ、幽霊以下だわ! 大丈夫だって!」

マリア「そやね、何か勇気が出てきた!」

リアン「その意気よ! 怖くなったらマジョルアよ!」

「行つてらっしゃーい!」

「ランラララッ!」

「オレ達やお笑い3人組だい!!」

ドロドロ・・・

「!!」

「何か音・・・した?」  
バーン!

「ギャアッ!!」

「出たんだよ！ありや絶対本物だつて！ばあさんの格好した・・・」  
道子「その話は本当だと思います！おそらく2人が見たのは、私の祖母だと思います。」

哀「祖母つて、おばあさん？」

道子「ええ。2年前に亡くなったのですが成仏できないようで・・・  
檀家の方が何度か見かけたらしいのですが、どういうワケか私の前には姿を見せないのです・・・」

「出たわよ！スゴいのが！！」

「マジイ！？」

「首が二ヨキニヨキ伸びる白髪のおばあさんが・・・」

リアン「いてないいてない・・・」

「ダメよ、リアンちゃん！もっと盛り上げなきゃ！！」

リアン「気持ちはわかるんだけど、次の番がねえ・・・」

マリア「マジヨルアマジヨルアマジヨルアマジヨルアマジヨルア！

！」

ドドドド・・・

たくま「おい、東尾！さつきから何ブツブツ言つてんだ？」

マリア「・・・え？」

たくま「マジヨルアって何だよ？」

マリア「あ、おまじない・・・リアンちゃんが教えてくれたんや・・・」

たくま「効くのか？それ。」

マリア「こう呟くと怖くなるんよ！」

たくま「本当かよ・・・」



ポウツ・・・

マリア・たくま「!!」

たくま「なあ、何か感じねえか？」

マリア「見たらアカン!!」

スウツ・・・

マリア「マジョルアアツ!!」

マリア・たくま「マジョルアマジョルアマジョルアマジ  
ョルアマジョルアマジョルアマジョルアマジョルアマジ  
ョルアマジョルアマジョルアマジョルアマジョルアマジ  
ョルアマジョルアマジョルアマジョルアマジョルアマジ  
ドドドド・・・」

マリア・たくま「ハアハア・・・」

哀「今度は私の番ね!」

マリア「哀ちゃんは怖くないん？」

哀「だって、道子ちゃんの前には幽霊出ないって言ってたでしょ？」

私道子ちゃんと一緒だから・・・」

道子「ハア・・・」

哀「道子ちゃん、歩くの速いよ!」

道子「すいません・・・」

哀「やっぱり夜のお墓ってゾクって来るわよね・・・」

道子「大丈夫ですよ、どうせ私の前には出て来てくれないんです・・・」

・  
」

哀「道子ちゃんもしかして、おばあさんの幽霊に会いたいの？」

道子「謝りたい事があるんです。祖母が亡くなった時、ヒドい事を

言ってしまったて．．．もし会えるなら幽霊でも会って謝りたい。お寺の娘がこれじゃ、ちよつと不謹慎ですよね、アハハ．．．」

哀「．．．」

哀「2人共ちよつとつき合つて！」

マリア「道子ちゃんがそないな事を．．．」

リアン「そういえばおばあさんの話してる時の道子ちゃん何か寂しそうだったものね．．．よっし、いっちょやったるか！」

哀「マジカルステージね！」

マリア「ちよつと待って！それって魔法でおばあさんの霊を呼び出すって事！？」

哀「イヤだなあ、マリアちゃん！」

リアン「そうよ！」

マリア「ホホホホ！！」

リアン「これも人助けよ！」

マリア「ホホホ！！」

マリア「ホケケケ．．．」

哀「マリアちゃん、いくよ．．．」

リアン「大丈夫かしら．．．プルカプルリカ和やかに．．．」

哀「レイレイシャゝイニー華やかに．．．」

マリア「スィールクゝジェルクゝ清らかに．．．」

カアッ!!

「うわぁ!」

詩織「スクープよ、スクープ!」

リアン・哀・マリア「マジカルステージ!!道子ちゃんをおばあさんの幽霊に会わせてあげて!!」

ポウ・・・

コト・・・

リアン「・・・馬?」

「出やがった!!今度は向こうのお墓で何かが光りやがった!!」  
ダッ!

「石川!!」

ザッ!

リアン・哀・マリア「ヒイ!!道子ちゃんどうしたの?」

道子「この辺で怪しい光を見たって聞いて・・・」

リアン「み、見なかったよ・・・」

道子「そ、それは!!」

ガラツ・・・

哀「わーっ！スゴイ数の竹細工・・・」

道子「全部祖母の作った物です。」

リアン「それじゃあさっきの馬も？」

道子「ええ。私って小さい頃からおばあちゃんっ子だったんです。

忙しい父や母に代わって、祖母がいつも私の相手をしてくれていましたから・・・」

道子「おばあちゃん・・・」

「ん？」

道子「何を作っているのですか？」

「ホラ！」

道子「わあ、お馬さんだわ！！」

「完成したらあなたにあげよう！！」

道子「本当ですか？」

「私がウソを言った事があるか？」

道子「いいえ！ありません！！」

「よし、あなたが学校から帰って来るまでにはできるでしょう！行つておいで！！」

道子「はい！！約束ですよ！絶対作っておいてくださいね！！」

「ああ、約束じゃ！」

道子「でも、おばあさんは・・・」

ガラツ！

道子「約束したじゃないですか・・・私が帰るまでに作り上げるって約束したじゃないですかあ！！おばあちゃんなんか・・・おばあちゃんなんか大嫌いだ！！」

道子「この馬はその時の物なんです。すいません、先に戻っていてもらえますか？」

ボタン！

道子「おばあちゃん・・・どうして出て来てくれないんですか・・・」

「

「道子・・・」

道子「！？・・・！！おばあちゃん・・・！？」

「久しぶりじゃの・・・」

道子「どうして・・・どうして2年間も姿を見せてくれなかったんです！！ずっと会いたかったのに・・・会って・・・会って謝りたかったのに！！ひどい事言ってごめんなさい・・・」

「謝らなければいけないのは私の方じゃよ・・・約束さえちゃんと守っていれば、こんな事にはならなかった・・・」

道子「それじゃあやっぱり私との約束のせいだ・・・！？」

「それはちがうよ・・・私があなたとの約束を守りたかつたんじゃ・・・その馬を完成させたくてそりやまあいろんな人に声をかけたが、私の顔を見るたびにみんな逃げてしまう・・・まあ、当然と言えば当然か・・・」

道子「私なら逃げなかったのに・・・」

「・・・ん？ウフフ・・・」

道子「アハハ・・・教えてください！！この馬は私が完成させます！！」

「うんうん・・・」

道子「こんな感じですか？あ、なるほど・・・」

ヒョコ！

道子「はい、わかりました！アハハ・・・」

詩織「1人で何しゃべってるのかしら？」

リアン「やっぱり何とかしてあげられないかしら？」

哀「だったら、おばあさんの幽霊に変身するってのはどう？」

リアン「ああ、グッドアイデア！」

詩織「何やってるの？」

リアン「ヒッ！！」

詩織「あのね、道子ちゃんが変なのよ！一人でブツブツしゃべって・  
・まるで誰かと話しているような・・あれ？」

コト！

道子「できました！おばあちゃん・・・」

「ありがとう道子・・・ようやく約束が果たせたよ・・・」

道子「おばあちゃん！まだ行かないでください！！私はまだ話したい事がいっぱいあるんですよ！！もつといろんな事だって教えて欲しいし、もつともつと一緒にいたいのに・・・」

「いるよ・・・私はこれからも、ずっとあなたの側にいるよ・・・」

道子「おばあちゃん・・・それって約束ですか！？」

「ああ、約束だ・・・」

フウツ・・・

道子「約束ですよ・・・おばあちゃん・・・」

「ありがとう・・・」

リアン「・・・え？何！？」

哀「うん・・・」

マリア「聞こえた・・・」

ゴォッ！！

リアン・哀・マリア「！！」

哀「今のつて、道子ちゃんのおばあさんかしら・・・」

リアン「とっても優しい感じがした・・・」

マリア「怖なかったわ・・・」

『石川家之墓』

道子「今日も良い天気ですよ．．．おばあちゃん．．．」

### エピソード33 幽霊に会いたい!! (後書き)

リアン「MAHO堂も繁盛して落ち着いてきたし、そろそろ5級試験の時期だね!」

哀「今までと同じく、楽にできたら良いけどね。」

マリア「何や、先輩らの時とは課題がちごうてるらしいで。」

リアン「そなの?」

哀「一体どんな課題が待ってるのかしら・・・」

マリア「どんな課題にせよ、当たって砕けるや〜!!」

哀「砕けちゃダメでしょうが!!」

リアン「次回のCharging Detectiveは、『エピソード34 知能テストの5級試験!?』よ!魔法よ世界を平和に変えて!!」



## エピソード34 知能テストの5級試験！？

リアン達は、MAHO堂に集まっていた。

マリア「いよいよ今夜は5級試験やな！」

哀「そろそろ魔女見習い試験も折り返し地点よね。」

ナナ「そうね、ここまではとても早かったわ。今までの魔女見習い達と比べるとね。」

マジョミア「でも5級から先は一筋縄ではいかないわよ！3人共気を引き締めてね！」

リアン・哀・マリア「はい！！！」

マジョミア「そういえば、そろそろデラが例の物を持って来てくれるハズだけど・・・」

哀「例の物？」

「あゝあゝ」

デラの歌声が聞こえてくる。

マジョミア「あ、来たわね。」

マジョミアの声と同時に、デラがMAHO堂に現れた。

ポンッ！

デラ「呼ばれてゝ飛び出てゝ やつてゝ来ましたゝ デラよおゝ」

マジョミア「あなた毎回歌を歌って出て来るけど、それに意味あるワケ？」

デラ「細かい事は気にしないの。シワが増えるわよマジョミア？」

マジョミア「う、うるさいわよデラ！早く用件を済ませなさい！！」

マジョミアは眉間にシワをよせながら叫んだ。

デラ「はいはい、早く用件を言うわよ。リアンちゃん、あなた達にお届け物よ！」

リアン・哀・マリア「あ、はい。」

リアン達3人はデラの前に来た。

デラ「はい、これ！」

デラは3人にそれぞれ何かの入れ物を渡した。

リアン「これは何ですか？」

デラ「6級に昇格するともらえる物よ！中に魔法玉と同じ形をした物が入っているでしょう？」

哀「あ、はい。」

ナナ「それは認定玉といって、5級以降の試験に合格することに1つずつもらえる物なのよ！」

マジョミア「認定玉が8個集まれば、魔女として1人前になれるってワケよ。後5級以降の試験を受けるにはそれが必要だから、なくさないようにね！」

マリア「そうなんや。」

デラ「じゃあ、私はもう帰るわね。」

デラはそう言くと、ポンツと消えた。

ポンツ！

マジョミア「じゃあ、そろそろ魔女界に行きましょうか。」

リアン・哀・マリア「はい！」

リアン達は、魔女界に出發した。

## 魔女界

モタモタ「さあ、今夜は5級試験よー！」

モタ「5級試験の課題はあー、ズバリ知能テストよー！」

リアン・哀・マリア「ち、知能テストオー！？」

リアン達は驚いた。

モタ「そうよー。今から3ラウンドクイズを行うから、チャレンジしてねえー。」

モタモタ「3ラウンド中2ラウンドをクリアできたら、試験合格よー。」

マジョミア「頑張ってね、3人共ー！」

リアン・哀・マリア「はい!!」

3人は元氣良く叫んだ。

モタ「それじゃあ、始めるわよ! 第1ラウンドはあ、漢字の読みを当てるクイズよ。10問あるから、その内5問正解したらクリアだからね。」

リアン・哀・マリア「了解!!」

モタ「では第1問。読み方が『い』で始まるこの10文字の読みを当ててね。胃・家・稻・雷・否・碇・筏・礎・盧・𪛗! さあ、この10文字は何て読む!？」

マリア「うーんと・・・最初の5文字はわかるんやけどなあ・・・『い』『いえ』『いね』『いかずち』『いな』やろ?」

モタ「正解。」

哀「6は『いかり』、7は『いかな』。8は『いしずえ』・・・」

リアン「9は『いおり』・・・そして最後の10は『いびき』ね?」

モタモタ「せ、正解・・・」

マリア「ようわかったなあ、後の5問・・・」

モタ「それじゃあ第2問。読み方が『お』で始まるこの文字の読みを当ててね。尾・奥・扇・翁・嫗・臙・鴻・邑・蝗・麋! さあ、この10文字は何て読む!？」

マリア「うーんと・・・最初の4文字はわかるで。『お』『おく』

『おうぎ』『おきな』。んで5番は『おみな』か・・・?」

モタ「正解よ。5番はよくわかったわね。」

マリア「何となくやったんやけどな・・・」

哀「6は『おぼろ』、7は『おおがり』。8は『おおざと』かしら?」

モタモタ「正解よ。8の邑は『都』等の漢字の部首の事よ。」

「

リアン「9と10はそれぞれ『おおねむし』と『おおじか』ね?」

モタ「正解。」

モタモタ「ちなみに蝗は『イナゴ』の事なのよ。」

マリア「米の害虫か・・・」

モタ「第3問。読み方が『か』で始まるこの文字の読みを当ててね。  
蚊・霞・粥・蚕・塊・篝・苴・鰾・湮・胛！さあ、この10文字の読みは？」

マリア「1は『か』、2は『かすみ』、3は『かゆ』、4は『かいこ』、5は『かたまり』・・・ほんで、6は・・・『かがり』・・・？」

モタモタ「正解〜。」

哀「7は『かいしき』、8は『かいらぎ』ね？」

モタ「正解〜。」

リアン「9は『かいり』。最後の10は『かがね』ね？」

モタモタ「正解よ〜。次は第4問。読み方が『た』で始まるこの文字の読みを当ててね。凧・長・宅・財・薪・筍・撓・掌・櫟・鬣。」

マリア「う〜んと・・・1は『たこ』、2は『たけ』、3は『たく』、4は『たから』、5は『たきぎ』やな。」

モタ「正解よ〜。」

哀「6は『たかむな』、7は『たわわ』、8は『たなうら』？」

モタモタ「正解〜。ちなみに6は『たけのこ』の事よ〜。」

リアン「9は『たすき』。10は『たてがみ』ね。」

モタ「正解〜。ここまでストレートクリア。次を正解すれば、第1ラウンドクリアよ〜。」

マリア「よっしゃあ！燃えてきたで〜！！」

哀「マリアちゃんつて、そういうタイプなのね・・・」

モタモタ「第5問は読み方が『さ』で始まる10文字の読みを当てるのよ。差・災・幸・境・倒・盃・榊・肴・蠍・細！さあ、この10文字は何て読む！？」

マリア「ウチ、今回の問題は7・8・9がわかったで！」

リアン「そうなの？」

哀「じゃあ、今回は私から答えるわ。1・2・3・4・5・6はそれぞれ、『さ』『さい』『さち』『さかい』『さかさ』『さかずき』

ね？」

モタ「正解〜。」

マリア「よっしゃ、ウチやな！7・8・9は『さかき』『さかな』

『さそり』やる？」

モタモタ「正解よ〜。」

リアン「アタシは10だけか。ズバリ『さざれ』！！」

モタ「大正解！ちなみに細石っていう単語は日本の有名な歌にも出てくるのよ〜。」

リアン「知ってます。歌った事ありますから。」

モタモタ「そうなんだ〜。」

モタ「5問ストレートクリア〜。やるわね〜。」

リアン・哀・マリア「やったあ〜！！！」

その後、リアン達は第2ラウンドもストレートでクリアした。

モタモタ「第2ラウンドもストレートクリアかあ〜。やるわね〜。」

モタ「でも、第3ラウンドはどうかしら〜？」

リアン「受けて立ちます！！！」

哀「どんな問題でもかかってきなさい！！！」

マリア「当たって碎けるや〜！！！」

リアン・哀「碎けちゃダメでしょ！！！」

マリア「テヘッ」

リアン・哀「『テヘッ』じゃな〜い！！！」

マリア「アハハ・・・」

モタ「あゝ、トリオ漫才は終わりかしら？」

リアン「あ、はい・・・」

哀「すいません、始めてください・・・」

モタモタ「じゃあ、第3ラウンドね。第3ラウンドは、ことわざ

×クイズよ〜。」

リアン・哀・マリア「ことわざ ×クイズ？」

モタ「そうよ。今から10のことわざに関する事柄を述べるから、  
か×で答えてね。」

リアン・哀・マリア「わかりました！」

モタモタ「じゃあ第1問。『犬も歩けば棒に当たる』とは、外に出て遊ぶより家の中に閉じこもっている方が良いという事である。か×か？」

マリア「×！家の中に閉じこもっているより、外に出た方が良い事に巡り会えるつちゅう意味や！」

モタ「正解よ。」

モタモタ「ちなみに本来の意味は、出しゃばりすぎると思わぬ災難に遭うという意味だったのよ。」

マリア「ほんなら、問題自体も答えやつたつちゅう事か？」

モタ「ええ。それが転じて今の意味に直されたのよ。じゃあ、次の問題ね。『李下に冠を正さず・瓜田に履を納れず』とは、人に疑われるような事はなるべくしない方が良いという意味である。か×か？」

哀「です！」

モタモタ「正解。」

モタ「ちなみに、両方のことわざのそれぞれの意味を誰か言えるかしら？」

リアン「アタシが言うわ。『李下に冠を正さず』とは、李スモモの木の下で冠カンムリをかぶり直せば、スモモを盗むのではないかと疑われるという意味のことわざ。『瓜田に履を納れず』とは、瓜畑で履き物を履き直そうとかがめば、瓜を盗むのではないかと疑われるという意味のことわざ。合っているかしら？」

モタモタ「両方正解よ。やるわね。」

リアン「エヘヘ・・・」

モタ「次はこのことわざよ。『鷸蚌いじやうの争い』とは、互いに争った結果両者が相討ちになりどちらにも利益が行かない事である。か×か？」

哀「うん、×？」

モタモタ「正解よ。よくわかったわね。じゃあ正しい答えを言える

かしら？」

哀「え〜っと、確か・・・2人が争っている内に、第3者が利益を横取りしてしまう事。でしたよね？」

モタ「ええ、そうよ。ちなみに鷸蚌っていうのは、シギとカラスガ  
イの事なの。同じ意味で別の漢字を使ったことわざで『漁夫の利』  
っていうのがあるわよね？」

リアン「あ、はい。」

モタ「こつちのことわざでは、シギと争う貝の名前がハマグリにな  
ってるのよ。」

リアン「そうなんですか〜。」

モタモタ「次はこのことわざよ。『物言えば唇寒し秋の風』とは、  
人のためになる事ならば、例え陰口でも叩くべきだという意味であ  
る。か×か？」

マリア「ん〜、×？」

モタ「正解よ。じゃあ、本当の意味を言えるかしら？」

マリア「もちろん。ホンマの意味は『人の悪口など、言わずもがな  
の余計な事を言ったりすると、思いがけない災いを招く事になるか  
ら、なるべく口は慎め』つちゅう意味や。」

モタモタ「正解よ。次はこのことわざ。『砂上の楼閣』とは、砂の  
上に立てた高い建物はすぐ倒壊してしまう事から実現不可能な物事  
という意味である。か×か？」

哀「ですね。」

モタ「正解。ちなみに四字熟語でも同じような意味の言葉があるわ  
よ。何かわかる？」

哀「空中楼閣ですね。」

モタ「正解よ。空中に建物を建てるなんてアニメの世界とかでもな  
い限り到底実現不可能な事だからね。」

モタモタ「次はこのことわざ。『膳部揃うて箸を取れ』とは、食事  
は料理全てが揃うまで待たなくても良いという意味である。か×  
か？」

リアン「×！食事は慌てずに料理全てが揃ってから箸を取るべきだ  
という意味です。」

モタ「正解よ。ちなみに『膳部』というのはお膳にのせる料理の事  
で、『全部』とかけた言葉なのよ。」

リアン「ダジャレみたいですネ。」

モタ「そうね。次はこのことわざ。『虎に翼』とは、元々強いもの  
や勢いのあるものに、さらに強いものや勢いのあるものが加わると  
いう意味である。　か×か？」

マリア「　や。ただでさえ強い虎に、さらに空を飛べる翼を加える  
つちゅう事やからな。」

モタモタ「正解よ。ちなみに同じ意味のことわざで、『鬼に金棒』  
っていうことわざがあるわよ。」

マリア「元々強い鬼に、さらに金棒を与えるつちゅう事やな。」

モタ「そうよ。次はこのことわざ。『石臼を箸に刺す』とは、でき  
る事をできない事のように言うという意味である。　か×か？」

哀「×です。」

モタモタ「正解よ。じゃあ本当の意味は何かわかる？」

哀「無理難題を言うというたえです。」

モタ「その通りよ。石臼を箸で刺す事など、到底不可能な事だから  
ね。」

モタモタ「次はこのことわざよ。『竜の髭を撫で虎の尾を踏む』と  
は、極めて危険な事をするという意味である。　か×か？」

リアン「　です。恐ろしい竜の髭を撫でたり虎の尾を踏んだりする  
などの行為は、命知らずな事この上ないからです。」

モタ「正解よ。最後はこのことわざ。『好事門を出でず、悪事千里  
を行く』とは、良い事も悪い事も割とすぐに世間に広がりやすいと  
いう意味である。　か×か？」

マリア「×や！！」

モタモタ「正解。じゃあ、本来の意味を答えられるかしら？」

マリア「うーんと・・・好い事は往々にして世間に知られず、悪い



事はすぐ遠方にまで広まってまうっちゅう意味や!」

モタ「正解」。」

モタモタ「これで第3ラウンドもストレートクリア。5級試験、合格よ!!」

リアン・哀・マリア「やったあゝっ!!」

リアン達3人は、手を叩き合った。

その後認定玉をもらったリアン達は、ホウキに乗って空を飛んでいた。

リアン「意外と簡単にクリアできたね。」

哀「本当ね。知能テストだなんて言うから、もっと難しいものだと思ってたのに。」

マリア「要するに、ウチら3人組に不可能はないっちゅうこっちゃな!」

リアン「この調子で見習い試験を進めて、絶対1級に合格しましょうね!」

うね!」

哀「ええ!」

マリア「もちろんや!!」

リアン・哀・マリア「おゝっ!!」

リアン達は新たな決意を胸に、MAHO堂へと帰還した。

そんな3人を、謎の少女が不敵な笑みを浮かべ見つめていた・・・

## エピソード34 知能テストの5級試験！？（後書き）

リアン「5級試験に合格したし、見習い試験も順調ね！」

マリア「そういや、こないだ歩美ちゃんが帰って来たんやんな？」

哀「ええ、芸能人になったっていうし・・・」

リアン「突然飛び入りでオーディションに参加する事になったアタシだけど、そこで衝撃の光景を見ちゃったの！！」

哀「何と歩美ちゃんが、紫の服を着て魔法を使ったのよ！！」

マリア「まさか歩美ちゃん・・・」

リアン・哀・マリア「魔女見習い！？」

リアン「次回のChangling Detectiveは、『エピソード35 帰って来た歩美は魔女見習い！？』よ！魔法よ世界を平和に変えて！！」

## エピソード35 帰って来た歩美は魔女見習い!?

ある日のMAHO堂にて

ナナ「マジョミア、知ってる? 昨日エステでウワサを聞いたんだけどね・・・最近謎の天才魔女見習いが現れたんですって?」

マジョミア「謎の天才魔女見習い・・・?」

ナナ「そう、何でもね・・・3回試験を受けて、全部飛び級合格なんですって!!」

マジョミア「何ですって!!・・・って事は、3回の試験で4級合格う!?!ある意味うらやましいかも・・・」

ナナ「しかも全部満点ですって!!」

マジョミア「そうなの・・・まあ、リアンちゃん達にはかなわないでしょうけどね・・・」

ナナ「その事についてなんだけどね・・・」

ナナはマジョミアに耳打ちした。

ゴニョゴニョ・・・

マジョミア「な・・・何ですってえゝっ!!?」

何を聞いたのか、マジョミアは絶叫を上げた・・・

帝丹小学校

「はあい、皆さん!並んで並んで!!あ、押さないで!」

「何だ?」

「ただ今から女優・綾小路麗華サイン入り生写真を差し上げちゃいます」

マリア「女優?」

「今度パパの会社がスポンサーになって映画を作る事になりましたの!当然ヒロインは私!綾小路麗華、華麗に銀幕デビュー!!」

「マジかよ・・・」

「オカルト映画？」

「シャラ〜ップー！タイトルは『愛の煌めき 純愛ロマンに決ま  
つてゐるかない！！』」

「鮎の塩焼き？」

「鰯の照り焼き？」

「愛の煌めきって言ってるでしょ！！ま、そういう事なので・・・  
これは1年後には超お宝写真になりますわよ！」

「江戸川リアンちゃんや吉田歩美ちゃんの写真だったら欲しいけど  
なあ・・・」

「オレも・・・」

補足説明ですが、リアンはアイドルになっています。

子供だからチャイドルと呼んだ方が正しいかも・・・？

「吉田歩美や江戸川リアンなんてもう古いわよ！！」

「ブーッ！！」

「・・・」

澄子「えー・・・授業を始める前にお知らせよ！入って来なさい、  
歩美ちゃん！」

ガラッ！

「はい・・・」

歩美が教室に入ってきた。

リアン「歩美ちゃん・・・」

マリア「帰って来たんやね・・・」

簡単な自己紹介を済ませ、歩美はマリアの隣の席に着席した。

歩美「小林先生から聞いたわ。MAHO堂ってお店を手伝ってるん  
だってね。ウフフ・・・」

リアン「芸能人になったっていうから、綾小路よりタカビーになっ

たと思ってたけど・・・何か良い感じね！」

マリア「ホンマや！！」

哀「人気になったのもわかる気がするわ・・・」

## 放課後

リアン「え？今度の日曜用事があるの？」

歩美「うん。映画のオーディションがね・・・」

「オーディションですってえ！？」

マリア「何や・・・綾小路麗華・・・」

「そのオーディションってもしかして『愛の煌めき』っていう映画かしら？」

歩美「そうよ・・・知ってるの？」

「オッソホホホホ！！吉田さん！そのオーディション、受けてもヒロイン役にはなれせんわ！！」

歩美「どうしてそんな事がわかるの？」

「なぜならその映画は、ウチのパパの会社がスポンサーなんですもの！！ヒロインは私に決まりでしょ！！」

マリア「ムカッ・・・」

リアン「そんな事・・・」

歩美「そんな事わからないわ！！だって確かにスポンサーは力があるかもしれないけど・・・映画はスポンサーが作るワケじゃないのよ！監督さんやプロデューサーさんや大勢のスタッフが力を合わせて作るものだから・・・例えばスポンサーだって思い通りになんてならないと思うわ！！綾小路さんだったかしら？芸能界はそんなに甘くないのよ！！」

「あうう・・・フン・・・だったら勝手に受けると良いわ！！まあムリだと思うけど・・・」

マリア「何や、アイツ・・・歩美ちゃん、歩美ちゃん、絶対合格し

て!!」

歩美「ええ！頑張るわ!!」

リアン「そうだわ！アタシ達で歩美ちゃんの応援に行かない？」

マリア「それえな!!」

歩美「嬉しい！ありがとう」

『映画『愛の煌めき』ヒロインのオーディション会場はこちらです・

・・』

ザワザワ・・・

マリア「いっぱい観客があるなあ・・・」

哀「それより・・・リアンちゃんトイレに行ったきりけどどうしたのかしら・・・」

リアン「歩美ちゃんどこかしら？一言励まそうと思ったのに・・・参加者控え室？ここね。いるかしら？」

リアンは参加者の中に歩美の姿を確認した。

リアン「あ、いたいた!」

「困るなあ・・・」

リアン「へっ？」

「早く整列して!」

リアン「イヤ、アタシはそういうのでは・・・」

「ホラ急いで急いで!」

ボタン!

「えーっ!?何であなたがここにいるの?」

リアン「綾小路こそ。」

「ヒロイン役はオーディションを受けた中からしか選ばないって言

うから、仕方なく受けに来てあげたのよ!!」  
リアン「ああ、ビックリした・・・そういえば、アタシもアイドル  
だったじゃん・・・」

オーディションが始まった。

哀「リアンちゃん、どうしたのかしら？」

マリア「迷子になってんのとちゃうんか？」

「はい、ありがとう・・・」

次に出て来たのは・・・

哀・マリア「リアンちゃん!？」

そう、リアンであった。

マリア「何で舞台におんねん？」

リアン「えっと・・・20番、江戸川リアンです」

さすが現役アイドルだけあって、リアンの演技はかなり上手かった。  
続く綾小路はテニスの演技を、歩美はフルートを吹いて演技した。

「えー、皆さんお疲れ様でした・・・では第1次審査の合格者を発  
表します・・・3番、井上さん・・・11番、泗水さん・・・20  
番、江戸川さん・・・21番、綾小路さん・・・35番、吉田さん  
・・・」

その後も審査は進み・・・

「えー、では・・・第3次審査の合格者を発表します・・・20番、  
江戸川さん・・・21番、綾小路さん・・・35番、吉田さん・・・」

リアン・綾小路・歩美の3人は最終審査まで進んだ。

哀「リアンちゃんスゴいわ・・・」

マリア「まさか最終審査まで残るなんて思わへんかったわ!!」

リアン「イヤア、アハハ・・・」

「マグレよマグレ!!ま、最後は私と吉田さんとの戦いになるでしょうね!」

リアン「そんな事わからないじゃない!」

歩美「すみませーん!係員さん!!ここうるさくて精神集中できないの・・・他に静かな部屋ありませんか?」

リアン・哀・マリア「う・・・」

歩美「あ、別にリアンちゃん達がうるさいっていうワケじゃないの!気にしないでね!」

リアン「ハア・・・」

マリア「気にするつちゆうねん・・・」

「オーホホホ!!自分の好きな衣装でお気に入りのお芝居をする・・・最終審査は私のロミオとジュリエットで決まりね!!」

綾小路はゴツイ化粧と衣装をしていた。

リアン「アタシも着替えなきゃ・・・」

考えた結果、リアンは人魚姫を演じる事に決定した。

そして、最終審査・・・

リアン「アタシはこうなる運命だったんだわ・・・さよなら、王子様・・・」

リアンは人魚姫のお芝居をした。

哀「とても上手で、悲しいお芝居ね・・・」

マリア「泣けてきよるわ・・・」

周りの観客や審査員も、リアンの演技で泣いていた。

「ああ・・・ロミオ様!!」

「はい、結構です・・・次!35番の方・・・」

リアン「!!!ウソ!!!」



次に出て来た歩美の姿を見たリアンは驚いた。  
なぜなら・・・

歩美「私、子供の頃から魔女になるのが夢だったんです！だから魔法の役を演じさせていただきます！！」

そう、歩美はリアン達と同じような服を着て来たのだ。

リアン・哀・マリア「！！」

そう言うと、歩美はポロンらしき物を取り出し呪文を唱えた。

歩美「ウールルンウルンティーアティーアラー！！審査員の皆さん、私とリアンちゃんにだけ投票して！！」

その頃マジョミアはMAHO堂で、歩美が写っているチラシを見ていた。

マジョミア「これは！？」

歩美「これで私がリアンちゃんが合格ね！なんちゃって、そんな魔法が使えたら良いな・・・35番、吉田歩美でした！！」

マリア「ホンマの魔法とちごたんか・・・？」

哀「でも、見習い服もクラウンポロンも私達と同じよ・・・」

リアン「歩美ちゃんが・・・まさか・・・」

「では、映画『愛の煌めき』のヒロインの合格者を発表します！！合格者は1票の差で・・・20番・・・江戸川リアンさん！！」

リアン「え・・・アタシ・・・？」

歩美「良かったね、リアンちゃん！」

リアン「ま、まあね・・・ん？」

リアンの目線の先には、上を指差している白いネコがいた。  
チヨイチヨイ・・・

リアン「（ナナさん？屋上に来て？）」

屋上に上がったリアン達を、マジヨミアが待っていた。

マジヨミアは3人にチラシを見せる。

リアン「えーっ！？何で歩美ちゃんとマジヨミアさんが写ってるの！？」

マジヨミア「それはアタシじゃないわ・・・その魔女ガエルが誰かはわからないけど、歩美という子は恐らく・・・」

哀「魔女見習い？」

マリア「やつぱり審査の時も魔法を使ってたんやー！」

「ホホホホ！！その通りさー！！歩美こそ、このマジヨルア様が育て上げた天才魔女見習いよー！！」

リアン・哀・マリア・ナナ・マジヨミア「！！」

リアン達が声のした方を見ると、ホウキに乗った歩美の腕に魔女ガエルが抱えられていた。

マジヨミア「マジヨルア！！って・・・」

リアン・哀・マリア「魔女ガエルになってる・・・」

マジヨルア「アンタの魔女っ娘共の評判が良いんでね・・・アタシも弟子を育ててみたくなったのさー！！」

リアン「ウソくさ・・・」

マリア「歩美ちゃんに正体見破られただけとちゃうん？」

マジヨルア「ちがーうつー！！アンタのようにチマチマ魔法グッズを売って儲けるより、歩美を大スターにしてガッポリ稼ぐためよー！！」

歩美「マジヨルアは私の事務所の社長なのよ！」

マジヨミア「うーん・・・」

マジョルア「歩美の人気が出れば出るほど、次期女王選挙の資金が  
たんまり稼げるって寸法よ！！勝負は見えたようね！マジョミア！  
！」

歩美「というワケなので、皆さんこれからもよろしくね」

マジョルア「ホホホホホ！！」

歩美達は飛んで行った・・・

リアン・哀・マリア・ナナ・マジョミア「・・・」

### エピソード35 帰って来た歩美は魔女見習い！？（後書き）

リアン「まさか歩美ちゃんが魔女見習いになって帰って来るとはね．．．」

哀「オマケに、マジョルアの魔女見習いになってるなんて．．．」

マリア「マジョルアのヤツ、変な事吹き込んでなきゃええけどな．．．」

歩美「大丈夫よ、私元ネタの女の子みたいな事はあまりしないから．．．」

哀「元ネタの女の子って？」

マリア「おジャ魔女どれみの瀬川おんぷの事やる。」

リアン「あー、確かにあの女の子はねえ．．．」

歩美「それより、リアンちゃん達4級試験があるんでしょ？私はもう受かってるけど．．．」

リアン「あ、そうだった。確かかけっこだったっけ？」

哀「しかも相手はカメとウサギ。これは勝ったも同然ね！」

マリア「何でやる．．．何やメツチャイヤな予感がするんやけどなあ．．．」

歩美「次回のChangling Detectiveは、『エピソード36 4級試験は大暴走！！』よ！魔法よ世界を平和に変えて！！」

## エピソード36 4級試験は大暴走!!

MAHO堂

リアン達3人は、MAHO堂に集まっていた。

リアン「いよいよ今夜は4級試験ね！」

哀「今夜の試験もサクツとクリアして、試験合格しちゃいましょう！」

マリア「当たって碎けるや〜!!」

リアン「だから碎けちゃダメだつてば・・・」

「ウフフ、3人は本当に仲が良いのね・・・」

リアン・哀・マリア「？」

3人が振り向くと、歩美が立っていた。

リアン「歩美ちゃん!？」

哀「何しに來たの!？」

マリア「マジョルアの命令か!？」

リアン達3人はタップを構えた。

歩美「そんなに構えないでよ!アタシは別に邪魔しに來たワケじゃないから・・・」

リアン・哀・マリア「え？」

歩美「アタシが既に合格した4級試験の情報を伝えに來たのよ。リアンちゃん達とはフェアにやりたいからね。」

リアン「そりやどうも・・・」

哀「ところで、こないだ歩美ちゃん禁断魔法を使つたわよね？」

歩美「ああ、人の心を変える魔法？」

マリア「マジョミアさんの話やと、禁断魔法使ったら災いが降りかかるって言うてたで。何で歩美ちゃんは何の災いも受けへんのや？」

歩美「ああ、それはね・・・これのおかげよ。」

歩美は右手にしてあるブレスレットを見せた。

歩美「これはマジョルアからもらった物なんだけど、このブレスレ

ットには災いを跳ね返す力があるのよ。」

リアン「なるほど、それで禁断魔法を使っても災いが来ないワケね。」

歩美「ええ。でも安心して、アタシはもう禁断魔法使うつつもりないから。そもそも1回使っただけで良い気分がしなかったからね。」

哀「そうなの・・・」

マリア「ほんで？情報って何なんや？」

歩美「4級試験についての情報よ。今回の試験はね、魔女界1の駆けっこの名手と言われている2匹の動物と競争して勝つ事が課題なの。」

リアン「駆けっこ？」

歩美「そうよ。ただしその2匹と駆けっこするのは妖精達で、アタシ達魔女見習いはサポート役なんだけどね。」

哀「フーン・・・」

マリア「楽勝やな。駆けっこするだけなんやったら。」

歩美「自信あるみたいだけど、対戦相手を甘く見ない方が良いわよ。対戦相手の2匹はね、勤勉なウサギと素速い亀なんだから。」

リアン「勤勉なウサギと素速い亀？」

歩美「ええ。亀の方は見た目に反して超俊足・・・ウサギの方はサボリ知らずという強敵よ・・・」

哀「何か手強そうね・・・」

マリア「どんなんが相手でも問題あらへん！当たって砕けるや〜！」

リアン・哀・歩美「砕けちゃダメでしょうが！！」

マリア「あ、そやった。テヘッ」

リアン・哀・歩美「テヘッ じゃな〜い！！」

こんな調子で大丈夫なんでしょうか、リアン達・・・

魔女界

モタ「さあ、4級試験よ。」

モタモタ「4級試験の課題わあ、アタシ達が飼っている勤勉なウサギと素速い亀と駆けっこして勝つ事よ。」

マリア「歩美ちゃんの情報通りやな・・・」

モタ「それじゃあ、お供の妖精達をそれぞれ用意してね。」

リアン・哀・マリア「はい！」

リアン「リリ、出番よ！」

リリ「リリ！！」

哀「ネネ、頑張つてね！」

ネネ「ネネ！！」

マリア「暴れて来いや、モモ！」

モモ「モモ！！」

モタ「それじゃあ、」

モタモタ「4級試験開始よ！！」

リリ達3匹の妖精は、ウサギとカメと共に走り出した。

ダッ！！

モタ「あ、そうそう、魔女見習い達は妖精のサポートはできるからね。」

モタモタ「ただし、妨害魔法は禁止よ。」

リアン「わかりました！」

マリア「ほな、行こか！」

哀「ええ！！」

リアン達は、ホウキに乗って飛び出した。  
ドンッ！！

リリ達3匹とウサギとカメは、初回からデッドヒートを繰り広げている。

リアン「あ、いたいた！」

哀「調子良さそうじゃない。」

マリア「おっと、目の前に壁があるで！」

ウサギとカメは妖精達を追い抜き壁に飛びつくと、高速で登り始めた。

ガシッ！

ダダダダダ・・・

哀「は、速い！！」

リアン「どうする？そのまま追いかけても追いつけるかどうか・・・

」

マリア「それならこうや！スィールク〜ジェルク〜ロリポップ〜キャンデイー！壁に大穴よ、開けえ！！」

マリアの魔法で、壁に大穴が空いた。

ボウン！！

リリ達はその穴を通り抜けて行く。

リアン「うまくいったわね。」

リリ達はその後も次々と障害を乗り越え、ついに最終関門に差し掛かった。

ウサギとカメは1度止まると、お互いの片足をヒモで結んでいる。

哀「最終関門って、2人3脚なのかしら？」

歩美「そうよ。」

リアン達の後ろに、歩美が現れた。

マリア「おわ、歩美ちゃん！！」

歩美「最終関門では、妖精と魔女見習いが2人1組になって2人3脚をするの。アタシの試験も最後こうだったしね。」

哀「そうなの。」

リアン「じゃあ、アタシ達も急がなきゃ！！」

リアン達はリリ達の側に降りた。



タンッ！

リアン「リリ、最後は2人3脚よ！」

リリ「リリ！」

リリはリアンの姿になると、リアンと共に走り出した。

ダッ！

哀「ネネ、行くよ！」

ネネ「ネネ！」

ネネと哀も、走り出す。

マリア「モモ、行くでえ！！」

モモ「モモ！」

マリアとモモも、走り出した。

リリとリアン、ネネと哀、モモとマリア、ウサギとカメのそれぞれはデッドヒートを繰り広げる。

タタタタタ・・・

リリ・リアン「行つけえ！！！」

リリとリアンはウサギとカメを抜き去り、1着でゴールした。

ダンッ！

リアン「やったあ！！！」

マリア・モモ「オラオラ！！！」

マリアとモモは超高速で突っ込み、ウサギとカメを吹き飛ばしつつゴールした。

ダンッ！

マリア「よっしゃあ！！！」

哀・ネネ「絶対に負けない！！！」

哀とネネは加速する。

そして、ついにウサギとカメを抜きゴールした。  
ダンッ！

哀「か、勝った・・・」

モタ「よくやったわね。」

モタモタ「4級試験、合格よ！！！」

リアン・哀・マリア「やったあー!!」

歩美「よくやったわね、3人共!!」

リアン「見てたんだ、歩美ちゃん・・・」

歩美「3人共スゴいわ!あのウサギとカメ相手に圧勝するなんて。アタシなんてギリギリだったのに・・・」

マリア「まあな。」

哀「じゃあ、帰りましょうか。」

リアン・歩美「ええ!」

マリア「そやな!」

リアン達4人は、人間界へと帰って行く。

その4人を、静かに見ている者がいた。

『ククク・・・江戸川リアン・・・イヤ、コナン。やはり魔女見習いになっていたか・・・でも、所詮全てムダ・・・アタシを倒さない限り、あなたは元には戻れないのよ・・・ウフフフフ・・・アハッハッハッ!!!』

謎の魔女は、高らかに笑っていた。

果たして、この魔女は何者なのか?

リアンの正体を知る、彼女の目的とは・・・!?

## エピソード36 4級試験は大暴走！！（後書き）

リアン「次はいよいよ3級試験ね！」

マリア「ここまで来たらストレートにクリアやー！」

歩美「そううまくいくかしら・・・3級試験はあまりの難しさに、途中でポロンを放り出して逃げちゃう魔女見習いもいる程よ。」

マリア「大丈夫やて！ウチらはそんなもん・・・」

リアン「あゝ、レモンパイ」

哀「あつちにはイチゴのショートケーキが」

マリア「あ、ウチの大好物の湯豆腐・・・」

歩美「ちよっ、みんな！！う・・・アタシの大好物の梅ゼリーまで・

・・・」

リアン「それぞれの大好物の誘惑を受け、しどろもどろになるアタシ達3人！」

哀「今度こそ、ダメかもしれません・・・」

マリア「次回のChanging Detectiveは『エピソード37 誘惑の3級試験！？』や！魔法よ世界を平和に変えて

！！」

## エピソード37 誘惑の3級試験！？

MAHO堂

リアン「明日はいよいよ3級試験ね！」

哀「今までの試験もトントントン拍子に突破してきたし！」

マリア「当たって砕ける法で、今回の試験も楽勝やな！」

「あらあら、みんな張り切ってるわねえ。」

リアン「ナナさん、マジョミアさん。」

マジョミア「気合い入ってるみたいだけど、3級の試験は今までと同じようにはいかないわよ？」

哀「どういう事ですか？」

ナナ「3級試験はね、4級までの試験よりも格段に難しさが上がってるの。」

マジョミア「あまりの難しさに、その場にポロンを置いて逃げ出してしまう魔女見習いが毎年出るほどのよ。」

マリア「ヒエ・・・」

「あら、今から怯えてるようじゃ合格は難しいかしらね？」

リアン「マジョルア！！」

歩美「マジョルア、そういうこっちだってまだやってないじゃない。」

マジョルア「そうだったわね。」

歩美「みんな、気にしないで。明日はお互い頑張りましょ！」

リアン・哀・マリア「うん！！」

リアン達4人は、3級試験に向けて意気込んでいる。そんな4人を、謎の人物が見つめていた。

「ようやく見つけたわ・・・江戸川リアン・・・」

## 魔女界

モタ「さあ、今夜は3級試験よ。」

モタモタ「3級試験の内容は、3つの世界を突破してゴールの扉を潜れば合格よ。」

モタ「制限時間は3時間だから、気をつけてね。」

リアン「それじゃあ・・・」

リアン・哀・マリア・歩美「レッツゴー!!」

リアン達はスタートの扉に入って行く。

「（行動開始。）」

リアン達を監視していた人物は、パツと消えた。

リアン「魔法モグラの退治、ですか？」

「ええ、この庭に50匹ほどモグラが巣くっていてね。何とか追いつ出してほしいのよ。」

リアン「そういう事なら任せて!」

リアンは魔法でピコピコハンマーを出すと、モグラを追い出し始めた。

リアン「えい!やあ!」

リアンは軽快にモグラを叩いていく。

20分程で、リアンは全てのモグラを叩き出し袋に入れた。

リアン「フウ、これで50匹ね!」

「（100匹のモグラよ、降れ!）」

謎の人物は魔法を唱える。

すると、リアンの頭の上からモグラが100匹降ってきた。

ドサドサドサッ！！

リアン「ちょっ、何で１００匹も降ってくるのー！？」

「とりあえずこれも何とかしてー！！」

結局、総数１５０匹ものモグラを全て倒して袋に入れるのに、リアンは１時間もかかってしまった。

同じ頃、マリア

マリア「ウチの最初の試練はこの森に住む魔法グモの巣から樹液を手に入れる事か。村の住人によると魔法グモはごつつ大人しいらしいし・・・楽勝やな、アハハ！」

マリアは森の中を進んでいた。  
ピタッ！

マリア「おったおった、魔法グモや！なあ魔法グモはん！ちょつとウチに樹液分けてくれへんか？」

魔法グモはコクリとうなずく。

マリア「よっしゃ！ほな遠慮なく・・・」

マリアは巣に近づく。

「（魔法グモよ、その魔女見習いを襲え！！）」

謎の人物の魔法を喰らった魔法グモは、マリアを糸で絡め取った。  
グルグルグルグル！

マリア「ちょお何で！？話がちがうやんかー！！」

マリアは悪戦苦闘しながら、魔法グモから樹液を手に入れる。

これでマリアも、１時間使ってしまった。

哀は魔法ガラガラヘビから鱗を取る試練だ。

哀「（そ〜つと、そ〜つと・・・）」

「（そりゃ!）」

カツ!

「シャ?」

哀「え!!」

「シャアア!!」

哀「キャ〜!!」

パクン!!

哀はヘビに飲み込まれた。

歩美は親鳥から頼まれ、崖下のヒナ鳥を助けていた。

歩美「もう大丈夫よ。」

「（それ!）」

謎の人物が放った魔法により、岩場が崩れる。

ガラガラ!

歩美「何で〜!?」

歩美はなす術もなく川に落ちて行つた。

その後もリアン達4人は謎の人物に妨害を喰らい、確実にタイムロスしていった。

リアン「だいぶタイムロスしちゃったよ。急がないと不合格になっちゃう！」

リアンは走っていた。

リアン「ん？2つの扉？」

ピタッ！

リアンは2つの扉に気づき、足を止める。

リアン「これのどちらかがゴールなのね。それにしてもこの甘ったるい匂いは・・・もしかして、もしかすると・・・」

リアンは右の扉に近づく。

リアン「やっぱり！これ、レモンパイの匂いだ」

リアンの瞳がハートになる。

リアンことコナンの正体である新一は、レモンパイが大好物なのだ！！

リアン「ゴールはきつとこっちね！」

リアンは右の扉に飛び込んだ。

哀「イチゴのショートケーキ」

マリア「湯豆腐や」

歩美「う、梅ゼリー・・・」

哀・マリア・歩美の3人も、それぞれの好物の誘惑に負け、間違った扉に入ってしまった。

リアン「あゝん、まさか引っかけだったなんて！」  
リアンは必死に走っている。



リアン「見えた、ゴール！」

リアンはゴールの扉に飛び込んだ。

リアン「やっとゴールできたあ！これで3級試験・・・」

モタ・モタモタ「不合格よ」。

リアン「ええゝ！！何でゝ！？」

モタ「だって3時間過ぎてるもの。ホラ！」

リアンはモタの時計を見た。

リアン「さ、3時間10分・・・」

哀「やっぱりリアンちゃんもなのね・・・」

リアン「じゃあまさか・・・」

マリア「ああ・・・」

歩美「私達も不合格よ・・・」

リアン「そんなあ！4人共不合格だなんてゝ！！」

モタモタ「これは追試になるわね」。

哀「魔女見習い試験に追試があるんですか・・・」

マジョルア「ああ・・・これで元の姿に戻る日が1日遠のいた・・・」

・

マジョルアは肩を落とす。

マジョミア「それにしても、どうしてリアンちゃん達4人そろって

不合格になっちゃったのかしら・・・」

マジョミアは考え込んでいる。

「（フッフ、4人共不合格・・・そう簡単に魔女になってもらっちゃ

や困るのよ・・・特に江戸川リアン、あなたにはね・・・）」

リアン達を妨害し不合格に追い込んだ謎の人物は、不敵に笑ってい

た。

果たして、この人物の正体は・・・！？

## エピソード37 誘惑の3級試験！？（後書き）

リアン「大好物の誘惑を受け、3級試験を不合格になっちゃったアタシ達！」

哀「モタさん達はそんな私達に、追試を用意してくれました！」

ナナ「うーん、でもねえ……」

マジョミア「あなた達じゃ、最悪死ぬかも……」

マリア「ハハハ、マジョミアさん！死ぬやなんて大げさな……」

マジョミア「だって3級試験の追試の場所って……火山だもの。」

リアン・哀・マリア・歩美「ええー！？火山ー！！？」

哀「果たして私達は無事に追試に合格できるのでしょうか……？」

マリア「不安がいっぱいやな……」

歩美「次回のChanginng Detectiveは『エピソード38 怖い追試！熱い火山！？』よ！魔法よ世界を平和に変

えて……」

予告……

次回作、執筆決定！！

続報を待て！！

## エピソード38 怖い追試！熱い火山！？

### MAHO堂

リアン達は、MAHO堂で机に突っ伏していた。  
歩美もいる。

マリア「ハア、まさか4人そろって落ちてまうとはな・・・」  
リアン「すいませんマジョミアさん、魔女に戻る日が遠のいちゃって・・・」

マジョミア「気にしないで、誰にでも失敗はあるわ。リアンちゃん達は今までの試験をストレートに受かってきたんだから、むしろそっちの方がスゴいわよ。」

哀「そうですか・・・」

マジョルア「でもマジョミア、安心してはいられないわよ？今夜は追試なんだから・・・」

マジョミア「それなのよね、問題は。本試験より追試の方が厳しいからね、魔女見習い試験は・・・」

マリア「そやけど大ゲサちゃうか？たかが追試ごときで死ぬかもしれへんやなんて。」

マジョミア「甘いわよ、マリアちゃん。怖いのは追試を受ける事じやなく、その場所なのよ！」

哀「そういえば、3級の追試は火山だつて言っていましたよね？」

マジョミア「ええ。魔女界でも有数の活火山・・・魔業火山よ！！」

リアン・哀・マリア・歩美「ま、魔業火山！？」

リアン「どういう場所なんですか、そこは？」

マジョミア「魔業火山は、魔女界でも有数の危険地帯なの。70年ごとに噴火を起こしてる、灼熱の活火山よ。」

マリア「魔女界にもあるんやなあ、火山・・・」

哀「そういえば私達の世界にも、阿蘇山や富士山があるよね。」

マジョルア「富士山が最後に噴火した年に、ちょうどアタシとマジョミアは人間界に旅行に来てたわ。あの頃は自然が豊かだったわね。」  
マジョミア「ええ……今の人間界はビルばかりの大都会になっちやったけどね……」  
哀「今から何10年前の話なんですか……」

その夜

リアン・哀・マリア・歩美「魔女界へ、レッツゴー!!」

魔女界

モタ「こんばんはあゝ。」

モタモタ「3級試験の追試はあゝ、魔業火山の火口付近にあるハーブ、ファイヤーアップルを採って来る事よあゝ。」

モタ「追試だから制限時間はないけど、誰か1人でもリタイアしたら後日に持ち越したからねえゝ。」

哀「つまり今回の追試は、私達全員がクリアする事が条件なんですね?」

マリア「やっatarouやないか!!」

歩美「追試如きでつまづくワケにはいかなからね!」

リアン「みんな、頑張ろうね!!」

哀・マリア・歩美「うん!!」

モタモタ「じゃあ、今から追試の開始よゝ。」

リアン達は、飛び出して行った。

## 魔業火山

歩美「暑いー!!」

マリア「この暑さはさすがにキツイわ・・・」

哀「リアンちゃん、何とかならない？」

リアン「しょうがないわね・・・プルカプルリカリルナポポルト！人数分のかき氷よ、出て来て！」

リアンは魔法でかき氷を出す。

ボン！

哀達はそれぞれかき氷をパクついた。

歩美「ちべたーい」

マリア「さすがウチらより先輩なだけあるな。」

哀「おいしいわ！」

リアン「これで少しは涼しくなっただでしょ。さあ、先に行くわよ！」

リアン達はしばらく進み、魔業火山の火口付近にやって来た。

歩美「ここが、魔業火山の火口・・・」

マリア「ここにハーブ・ファイヤーアップルがあるんやな。」

哀「早く採りに行きましょう。」

リアン達が火口に向かおうとしたその時、彼女達の眼前に巨大な花の魔獣が現れた。

ズズズズ・・・

ズボォッ!!

歩美「コ、コイツは・・・フレアガブガブ!!」

哀「歩美ちゃん、知ってるの？」

歩美「ええ・・・マジョルアに聞かされた事があって、覚えてたの。でもコイツは本来、火山内部の洞窟に生息してるの。こんな所にはいないハズなのに、どうして・・・？」

リアン達は、本来いないハズのフレアガブガブがいる事に疑問を持っていた。

その答えは極めて簡単だ。

少し離れた所でリアン達を監視している者・・・

コイツが、火山内部から持って来てここに埋めたからだっただ。

「フフフ・・・あの花は私が改良した新種・・・思う存分暴れなさい!!」

『ガアアアア!!』

フレアガブガブは、口から火球を飛ばしてきた。

ブッ!!

リアン達は何とか避ける。

ボウ・・・

リアン「コイツの火球、小さいけどかなり厄介だわ!」

マリア「このままやと危険や!ヤツを倒すで!」

哀「マジカルステージね?」

歩美「そういう事なら、私も!」

リアン達はフレアガブガブを取り囲んだ。  
ザッ!

リアン「プールカプルリカ和やかに!」

哀「レイレイシャイニー華やかに!」

マリア「スィールクージェルク〜清らかに!」

歩美「ウ〜ルルンウルン<sup>あで</sup>艶やかに!」

リアン・哀・マリア・歩美「マジカルステージ！！豪雨よ、フレアガブガブを消火して！！」

リアン達のマジカルステージで、豪雨がフレアガブガブに降り注ぐ。ザアアアア！！

「ガ・・・ガア・・・」

フレアガブガブはだんだん小さくなっていき、最後には消滅した。

歩美「フウ、何とか倒した・・・」

マリア「あ、あそこにハーブがあんで！」

哀「採りに行きましょ！！」

リアン達はハーブを採りに行く。

「させん・・・」

謎の者がリアン達を妨害しようとした、その時・・・

「そうはさせない！！」

「！？」

突っ込んで来た別の影が、謎の影を攻撃する。

「チイツ・・・」

「あなたの好きにはさせないわよ！マジヨラブラン！！」

「チツ、？？？か・・・まあ良いわ。」

マジヨラブランと呼ばれた魔女は、瞬時に消えた。

その後、リアン達はハーブを持ち帰り追試に合格した。

しかし、リアンだけは気づいていた。

3級試験で自分達を妨害した者がいた事に。

マジヨラブラン。

彼女の目的は、果たして・・・？

## エピソード38 怖い追試！熱い火山！？（後書き）

リアン「やっと更新再開だね！」

マリア「まあまた更新遅なるらしいけどな。」

哀「仕方ないじゃない、作者も色々連載中作品あるんだし。」

歩美「そういえば、次の試験って何だろ？」

哀「聞いた話じゃ、またハーブ探してみたいだよ！」

マリア「次回のChangling Detectiveは、『エピソード39 緊迫の2級試験！死なないで、マジョミア！』や！

！題名がごつつ気になるけど、ウチらの友情パワーとくと見せたるで！！」



### エピソード39 緊迫の2級試験！死なないで、マジョミア！！

リアン達4人は、MAHO堂に集まっていた。

2級試験について話し合うためだ。

リアン「マジョミアさん、2級試験ってどんな内容なんですか？」

マジョミア「2級試験は指定されたハーブを採って来るのが課題よ。指定されるハーブは毎回変わるの。」

マジョルア「こないだの追試で課題になったファイヤーアップルだった時もあったわね。」

マリア「マジかいな……」

歩美「何だか不安だわ……」

マジョミア「あなた達なら大丈夫よ！あ、そうそう！今日は早めに閉めるから。」

リアン「どうしてです？」

マジョルア「マジョハートっていう女医の魔女がいてね、彼女に会う約束してるのよ。」

リアン「じゃあ、みんなもう帰りましょ！」

哀「さよなら〜！」

マリア「またな〜！」

リアン達は帰って行く。

マジョミアとマジョルアは彼女達を見届けると、魔女界へと向かった。

2人をマジョラプランが監視しているとも知らずに……

### 魔女界

マジョルア「マジョハートまだ来てないみたいね。」

マジョミア「気長に待ちましょ。」

マジョミアとマジョルアはマジョハートを待っている。

その背後に、ゆつくりと何かが忍び寄っていた。

そして、次の瞬間……

ズキッ！

マジョミア「痛っ！！」

マジョルア「どうしたのマジョミア！？」

マジョミア「左腕が……痛い……」

マジョミアは座り込む。

マジョルアは辺りを見回し、すぐに『それ』に気づいた。

マジョルア「そこっ！！」

マジョルアは対象に火炎魔法を放つ。

ボツ！！

マジョルアが燃やしたのは、クモだった。

しかも、背中が青い……

クモはゆつくりと燃えていく。

ボウウウウ……

マジョルア「マジョミア！しっかりして！！」

マジョミアは地面に倒れ、苦しんでいた……

リアン「マジョミアさん！！」

リアン達はマジョルアから連絡を受け、魔女界にある病院を訪れた。  
バン！！

マジョミア「リアン……ちゃん……」

マジョミアはベッドに寝ている。

哀「一体何があったんですか！？」

マジョルア「襲われたのよ、何者かに。誰も見つからなかったけど、

現場にはセアオジヨロウグモがいたわ・・・」

歩美「セアオジヨロウグモって、猛毒のクモじゃない!!」

マジョルア「ええ・・・毒を持つ個体は だけだけど、その威力はハンパなく強いわ・・・ただ幸いなのは、5時間経過するまでに血清を打てば確実に助かるって事・・・」

マリア「ほな、早う血清の材料探さな!!」

マジョハート「今回の2級試験は、血清の材料になるハーブを採って来る事にするよう頼んでおこう。今すぐ帰って、準備して来るんだ。」

リアン「はい!!」

リアン達は急いで家に帰り、15分足らずで病院に戻って来た。

モタ・モタモタ「今回の2級試験は、ヒーリングポイズニーというハーブを採って来る事よ!ヒーリングポイズニーは紫電の洞窟の最奥部に咲いているわ。」

マジョハート「ここから紫電の洞窟まで片道約1時間30分。最奥部まで行って戻って来る時間と血清を作る時間を考慮しても、少なくとも3時間30分で戻らねばならん。」

マジョルア「みんな、頑張つて。」

リアン・哀・マリア・歩美「はい!!」

リアン「マジョミアさん、絶対に助けますからね!!」

リアン達は飛び出して行った。

それから1時間足らずで、リアン達は紫電の洞窟にたどり着いた。

マリア「思ったより早う着いたな。」

歩美「一応魔法で地図出したしね。」

哀「急ぎましよう!!」

リアン達は、紫電の洞窟の最奥部にたどり着いた。

リアン「ここが、最奥部・・・」

哀「あ！あそこに見えてるの、ヒーリングポイズニーじゃない？」

歩美「間違いないわ。凶鑑に載ってるのと一致する！」

マリア「凶鑑に載ってるんかいな・・・」

リアン「早く回収しましょう！」

リアン達はヒーリングポイズニーに近づく。

その時だった。

上から無数のクモが落ちて来たのは。

ドサドサッ！

リアン「コイツら、セアオジョロウグモ！？」

歩美「ええ。でもコイツらは、毒は持たないわ。ただ・・・コイツらがいるという事は、近くにきつと もいるー！」

マリア「コイツら一体どういう生態なんや？」

歩美「セアオジョロウグモは多数の に対し、 は1匹しかいないのよ。 達は1匹の のためにその身を捧げるのよ。」

クモ達が糸を吐いてきた。

シュルルル！

歩美「キャッー！」

リアン「歩美ちゃんー！」

歩美「ア、アタシは大丈夫！それより早くハーブを回収してー！」

哀「ええ！行くよりリアンちゃんー！」

リアン「うんー！」

リアン達はハーブに向かって走る。

そのリアン達を狙って、クモ達は糸を吐き出した。

ブシュッ！

マリア「させるかー！」

マリアは魔法で木刀を出し、糸を叩き斬る。

ザンー！！

マリア「どんなもんやー！！」

しかし間髪を入れず飛んできた糸が、マリアを絡め取った。

シュルルル！

マリア「キャッー！！」

リアン「マリアちゃんー！！」

マリア「大丈夫やー！早うハーブを回収せえー！！」

リアン「うんー！！」

リアンと哀はハーブを採った。

マリア「ここはウチらが食い止めるー！！」

歩美「リアンちゃんと哀ちゃんは、早くマジョミアさんの所に向かってー！！」

リアン「わかったわー！！」

哀「2人共無理しないで！」

リアンと哀は出口に向かって走って行った。

マリア「ああは言うたけど、さすがにキツいな・・・」

歩美「ええ・・・アタシ達もここまでかしら・・・」

「こんな所でくたばって良いの？」

圧迫に耐えるマリアと歩美の前に、謎の少女が現れた。

マリア「誰や、アンタ。」

「アタシ？アタシは『一応は』あなた達の味方。」

そう言うのと、謎の少女は2人を拘束している糸を焼き払った。

ボウウウ・・・

「さ、早く行きなさいな。『あの子』を支えられるのはあなた達3人。誰か1人でも欠ければダメなの。」

歩美「ありがとう！」

マリア「おおきになー！！」

歩美とマリアは走り出す。

「ありがとう・・・か・・・」

2人を見届けた謎の少女は、微笑んでいた。

リアンと哀はその頃、病院に戻って来ていた。

リアン「マジョルアさん、ハーブ採って来たよ!!」

マジョルア「思ったより早かったわね。さすがだわ・・・」

マジョハート「血清は私が作る。それ程かからぬから待っている。」

リアン「あの・・・アタシに作らせて下さい!!」

マジョハート「オマエがか？」

哀「大丈夫です、私も手伝いますから。」

マジョハート「わかった、このレシピ通りに作るんだ。」

リアン・哀「はい!!」

リアンと哀はレシピに従って、30分足らずで血清を作り上げた。

マジョハート「驚いたな。この私以外に血清を1時間もかけずに作れるヤツがいるとは・・・」

マジョルア「リアンちゃん、早くマジョミアに!!」

リアン「はい!!」

リアンはマジョミアに血清を打つ。

チクッ!

マジョミア「痛・・・」

哀「マジョミアさん、大丈夫ですか!？」

マジョミア「ええ、何とか・・・あなた達のおかげよ。」

リアン「マジョミアさん・・・」

リアンは泣いている。

マジョミア「あなた、本当にスゴい魔女見習いね・・・」

その後、リアン達は見事2級試験を合格した。

マリアと歩美が2、3日検査入院するハメになったが・・・

### エピソード39 緊迫の2級試験！死なないで、マジョミア！！（後書き）

哀「無事2級試験も合格して、残すは1級試験だね！」

マリア「どんな課題が来ようが、ウチらやったら大丈夫や！」

歩美「不可解なのは、マジョミアさんを襲った者が何者かよね・・・

」

リアン「どんな人か気になるけど、まずは1級試験をやっちゃいましょう！！！」

哀「次のChanginɡ detectiveは、『エピソード40 新たな波乱！？最後の1級試験！！』よ！！！」

歩美「この話もいよいよ大詰めね！」

マリア「ホンマに大詰めやったらええけどな・・・」

予告

Changinɡ detective2（仮）、執筆決定！！

## エピソード40 新たな波乱！？最後の1級試験！！

MAHO堂

マジョミア「（明日はいよいよ1級試験なのね・・・）」

「な～に黄昏てるの？」

マジョミア「マジョルア・・・イヤね、こないだ出会ったばかりなのに、もう1級試験まできたから・・・」

マジョルア「そうね。みんなとても心が強いわ。だからここまで頑張れたのよね。」

マジョミア「ええ。私、あの子達を誇りに思うわ。本当の娘みたいで・・・」

マジョルア「そうね。私も歩美ちゃんの事そう思ってる。」

マジョミア「お互い年はとったわね。」

マジョルア「そうね・・・アハハ！」

魔女界

リアン達は、魔女界にやって来ていた。

1級試験を受けるためだ。

モタ「1級試験はあ～、魔法を使って現世の人を助けてあげがとうと言ってもらう事よ～。」

モタモタ「ただし、魔法で人の心を変えるのは反則よあ～。」

歩美「ついにここまできたのね。」



マリア「ウチらやったらどんな課題も返り討ちや!!」

哀「リアンちゃん、頑張ろうね!」

リアン「うん・・・」

マジョミア「どうしたの、リアンちゃん?」

リアン「あ、いえ・・・ずっと気になってる事があったので・・・」

マジョルア「さ、頑張って来なさい!!」

リアン・哀・マリア・歩美「はい!!」

リアン達は人間界に向かった。

リアン「さ、手分けして行きましょう!」

哀「うん!」

マリア「おお!!」

歩美「ええ!」

リアン「さてと、どこかに困ってる人は・・・」

するとリアンの目に、帽子をベンチに置き忘れたままバスに乗っている老人が見えた。

リアン「いけない! プールカプルリカリルナポポルト! 帽子よ、

おじいさんを追いかけて飛んで行け!!」

リアンは魔法で帽子を飛ばすと、後を追いかける。

そして、おじいさんが目的地に着いたところで現れた。

リアン「おじいさん、帽子落としましたよ!」

「ああ、わざわざありがとう! それにしてもどうやってバスに追いついたんだい? まさか魔法でも使ったかな?」

リアン「(ギクツ!!)」

「ま、そんなワケないか。じゃあな、ありがとうよ！」  
おじいさんは去って行く。

リアン「やった！ありがとうって言ってもらえたわ！！」

リアンは哀達3人よりも先に、屋台へと戻って来た。

マジヨミア「さすがはリアンちゃんね。魔女見習い至上最速の1級合格よ！」

リアン「アハハ・・・ありがとうございます・・・」

マジヨルア「今からすぐ資格をもらいに行く事もできるけど、どうする？」

リアン「みんなが戻って来るまで待ちます！」

マジヨミア「ウフフ、リアンちゃんは友達思いなのね。」

その頃、哀達は・・・

マリア「あっ！乳母車が階段から落ちそうになっとう！」

マリアは階段から落ちそうな乳母車を発見した。

マリア「スィールクゝジェルクゝロリポップゝキャンディ！！乳母車よ、ゆっくり止まれ！！」

マリアは魔法で止めたが、乳母車を下にいた人が受け止めた。

「ありがとうございます！」

乳母車の持ち主が下にいた人に近寄る。

マリア「（こら、ウチが助けたとは言えへんな・・・）」

一方哀は、公園に来ていた。

哀「わっ、スゴく散らかってる!!」

哀は片っ端からゴミをひつつかむと、クズカゴに投げ入れた。  
程なく、清掃員がやって来る。

「おお、キレイになっている!ありがとうよ、嬢ちゃん!」

哀「はい!」

哀は公園から去ると、嬉しくなった。

哀「やったあ、ありがとうって言ってもらえたわ!」  
だが・・・

哀「あ!私、魔法使うの忘れてた!!」

歩美もお菓子をねだっている子供を見かけ魔法でお菓子を出すか、  
母親に止められてしまった。

哀「全然うまくいかないなあ・・・ああ!魔法玉が残り1つ!」

マリア「歩美ちゃんは何?」

歩美「私も後1つ・・・」

マリア「ウチらの最後の魔法か・・・」

湖近くを飛んでいた哀達の目に、溺れそうになっている子ギツネが  
見えた。

哀「大変!!」

マリア「ウチが行く!!」

マリアが突っ込み、子ギツネを助け出す。

哀「レイレイシャ〜イニーフ〜ワフワフー!バスタオルよ、出て来

て！」

マリア「スィールク〜ジェルク〜ロリポップキャンディ！焚き火よ、出る！」

歩美「ウ〜ルルンウルンティアティアラー！ミルクよ、出る！」

哀達は最後の魔法玉を使い、子ギツネを介抱した。

「コンコン！」

子ギツネは嬉しそうに去って行く。

哀「これで魔法玉なくなっちゃったね・・・」

だが、屋台に戻ると・・・

モタ「3人共合格よ！」

哀「ええ、何で!？」

モタモタ「だってあの子ギツネ、『ありがとう』って言ってたですよ！」

マリア「よっしゃあ!!！」

こうして見事1級試験に合格したリアン達は、女王様の元を訪れた。魔女界の女王様『リアンちゃん達、よく頑張りましたね。では、認定証を出して下さい。』

リアン達は認定証を出し、前にかざす。

女王様はそれを、水晶玉に変えた。

リアン「女王様、これは？」

魔女界の女王様『それは、魔女の水晶玉です。』

マリア「水晶玉にしちゃえらい小さいなあ。」

魔女界の女王様『それはまだあなた達になりたてだからです。これから頑張つて、少しずつ大きくしていつて下さい。』

リアン「みんな、やったね！」

リアン達が、お互いに手を叩き合おうとしたその時・・・

ナナ「大変よ、みんな!!」

ナナとフェフェが、青ざめた顔でやって来た・・・

## エピソード40 新たな波乱！？最後の1級試験！！（後書き）

リアン「ついに1級試験合格だね！」

哀「でも、ナナさんが血相変えて飛んで来たよ。」

マリア「何かイヤな予感がするで・・・」

歩美「次回のChangging Detectiveは、『エピソード41 女性化の真実！！一生戻れない！？』よ！！」

リアン「このタイトル・・・モノスゴくイヤな予感がするわ・・・」

## エピソード41 女性化の真実！！一生戻れない！？

リアン達は見事1級試験に合格する。

しかし、その喜びは束の間だった。

ナナとフェフェが、青ざめた顔で飛んで来たからだ。

ナナ「大変よ、みんな！！」

哀「ナナさん、どうしたんですか？」

フェフェ「さつき黒装束の女が突然現れて・・・マジョミアとマジョルアをスゴい力で連れ去って行っちゃったのよ・・・」

マリア「大変や、早よ助けな！！」

リアン「どこですか、ソイツは・・・？」

ナナ「バミアの森よ、東にあ・・・」

『ある』と言い終わる前に、リアンと歩美は飛び出していた。  
ドン！！

バミアの森

リアンと歩美がバミアの森に着くと、黒装束の女が立っていた。  
その横に、ボロボロになったマジョミアとマジョルアがいる。

歩美「な、何てヒドい事を・・・」

「あら、意外と早かったわねえ。」

リアン「マジョミアさん達から・・・離れなさい！！」

リアンはポロンを振るい、黒装束の女に突っ込んだ。

ドン！！

リアン「プルカプルリカリリルナポポルト！！雷撃よ、黒装束の女を燃やせ！！」

リアンは雷撃の魔法を黒装束の女に放つ。

バッシュッ！！

だが、突然黒装束の女の懷から現れた妖精がバリアで雷撃を防いだ。

ババッ！！

バチン！！

リアン「な！？」

ギギ『マジョラブランのお供妖精』「ケツケツケツ、バカじゃないの？そんなやけっぱちで撃った魔法が当たる訳ないじゃん。ラブ  
ラン、コイツもうアタシが殺っちゃって良〜い？」

マジョラブラン「止めなさい、ギギ。アタシはその娘に用があるの。  
手出しはダメよ。」

ギギ「は〜い。チェッ。」

哀達が追いついて来たのと同時に、マジョラブランは黒装束のフー  
ドを脱いだ。

バサアッ！

マジョラブラン「役者がそろったわね。では改めて自己紹介させて  
もらっわ。アタシはマジョラブラン。またの名を・・・『黒魔女ラ  
ブラン』。」

哀「黒魔女・・・？」

リアン「どうしてマジョミアさん達をキズつけたんですか？」

マジョラブラン「それはね・・・江戸川リアン、あなたを誘き出す  
ためよ。なぜならあなたを女に変えたのは・・・このアタシだから  
ね。」

リアン「ア、アタシを・・・！？」

マリア「どういう事やー！！」

マジョラブラン「言った通りよ。コナンをリアンに変えたのはこの  
アタシ・・・『呪い』でね。」

歩美「呪いですって？ふざけるのも大概に・・・」

マジョラブラン「アタシは至って大マジメよ。アタシは色々呪いを  
研究しててね、新しい呪いの実験台を人間界で探してたのよ。そ



の実験台に彼がなっただけの事。」

マリア「要するに・・・アンタを叩きのめせばアホな呪いも解ける  
つちゅうこっちゃな？」

歩美「コナン君をこんな目に遭わしといて、タダで済むと思わない  
でよ・・・」

バキボキ・・・

マリアは魔法で木刀を出すと、歩美と共に突っ込んだ。

ドン！！

マリア「オオリヤアアア！！」

マリアは木刀を振り下ろす。

ガッ！

だが、マジョラブランは片手で木刀を掴むと、もう片方の手で叩き  
斬った。

スパッ！！

マリア「な！？」

マジョラブラン「その程度？」

マジョラブランは魔法でマリアを吹っ飛ばす。

ドゴォ！！

マリア「キャアアア！！」

ドサッ！

歩美「隙ありよ！！」

歩美はマジョラブランの背後に回り込み、空中からかかと落としを  
する。

ゴォッ！！

だが、マジョラブランはまたも片手で歩美の蹴りを防いだ。  
ガシッ！！

歩美「え・・・」

マジョラブラン「弱い。」

マジョラブランはそのまま歩美を地面に叩きつける。

ドゴォ！！

歩美「キャア!!」

ガク・・・

哀「よくも2人を!!」

哀はポロンを振り、魔法を飛ばす。

ゴォッ!!

だが、マジヨラブランは既に哀の背後にいた。

マジヨラブラン「どこ狙ってんの？」

哀「!!」

マジヨラブランは魔法で哀を吹っ飛ばす。

ドン!!

哀「キャアアア!!」

ドサッ!

マジヨラブラン「はい、3人アウト。後はあなただけ・・・よ？」

マジヨラブランが振り向いたその時、彼女は初めて驚いた。

リアンから、尋常じゃない程のオーラが出ていたからだ。

ゴゴゴゴゴ・・・

マジヨルア「あの魔力・・・リアンちゃんの魔力って、こんなにあったの？」

マジヨミア「元々の潜在能力が高かったみたいだね、リアンちゃん。恐ろしいまでに魔女の才能があるわ。ただ・・・『この状態』はまずい。」

マジヨルア「この状態？」

マジヨミア「リアンちゃんね・・・人一倍繊細で優しいの。誰かがキズつけられる度に、彼女の魔力が上昇してくのよ。だけど、上昇し過ぎるとリアンちゃんにも制御できなくなる・・・あれは言わば『暴走状態』!!」

バサカーモード

リアン「・・・許、さん。」

リアンはマジヨラブランに突っ込んだ。

ドンッ!!

マジヨラブラン「は、速っ・・・」

リアンはマジヨラブランに回し蹴りを喰らわす。

ドゴォー！！

マジヨラブラン「キャアアアー！！」

ギギ「ラブランー！！」

リアン「プルカプルリカリリルナポポルト・・・」

リアンはポロンをかざし、魔法を唱え始める。

マジヨラブラン「ヤバイ・・・ギギー！！バリアよー！！」

ギギ「オッケーー！！」

ギギはマジヨラブランの正面に立ち、バリアを張る。

だが、リアンは構わず雷撃の魔法を放った。

バシユッ！！

ズドドドド！！

ギギ「な、何て魔力・・・妖精最強のアタシのバリアに、少しずつヒビが入るなんて・・・」

マジヨラブラン「ええ、この魔力は対したものだわ。でもまだ彼女は未熟・・・すぐに魔力が尽きるわ。」

マジヨラブランの言った通り、3分足らずでリアンの魔力は尽きてしまった。

リアン「ハア、ハア・・・」

リアンは地面に倒れる。

ドサッ！

マジヨラブラン「あなたはよくやった方だね。だけど所詮ここまでさあ、人思いに葬ってあげましょう。」

「そうはさせない！！」

マジヨラブランが水晶玉を取り出したその時、緑色の装束を羽織った少女がリアンの前に立ちはだかった。

ザッ！

マジヨラブラン「あなたは・・・刃ー！！」

ケンセイバ

剣野刃「マジヨラブラン！あなたの好きにはさせない！！ハアアア

アア・・・」

刃と呼ばれた少女は、魔力を込め始める。

マジヨラブラン「さすがに分が悪いか。今日のところは引き上げるわ。江戸川リアン！あなたがもし小学校を卒業するまでにアタシを倒せなければ、あなたは一生女の子のままよ。それがイヤなら、精々頑張る事ね・・・」

マジヨラブランはそう言うと、風にまかれて消えた。

驚愕の真実、コナンがリアンになったのは呪いだった！！

闇の黒魔女マジヨラブランを相手に、リアン達はとう立ち向かうのか・・・！？

第1期・完。

エピソード41 女性化の真実！―一生戻れない！？（後書き）

哀「ついにわかったわね、リアンちゃんの真実が！」

マリア「そやけどウチら、あっちゅう間に倒されてもうたで・・・」

歩美「マジヨラブラン・・・あんなのに勝てるのかしら・・・」

リアン「大丈夫だよ、みんなで頑張りましょうー！」

マジョミア「第1期はここまで。次作は第2期！Changin

Detectiveフレッシュ！が始まるわよー！」

リアン「皆さん、応援して下さいね」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5571a/>

---

C h a n g i n g   D e t e c t i v e

2011年1月8日10時42分発行